大蓮寺遺跡（第２次）発掘調査報告

～松阪市櫛田町所在～

2015（平成 27）年３月

三重県埋蔵文化財センター

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

出土緑釉陶器

例　言

1．本書は、三重県松阪市櫛田町に所在する大蓮寺（だいれんじ）遺跡（第２次）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査及び報告書作成は平成24～26年度に県土整備部からの経費の執行委任を受けて実施した。

3．発掘調査は土工委託を実施し、業務の円滑化を図った。整理および報告書作成は三重県埋蔵文化財センターが行った。本調査の体制は次の通りである。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
調査研究１課　主査　萩原義彦
星野浩行
土工受託機関　有限会社　安立水道
調査期間　平成24年９月14日～平成24年12月26日
調査面積　1,161㎡

整理担当　調査研究１課　主査　萩原義彦

4．調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部、松阪建設事務所、松阪市教育委員会からの協力を得た。

5．発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご助言を賜った。（敬称略・肩書は、調査指導時）
藤澤良祐（愛知学院大学）・尾野善裕（京都国立博物館）・丸山真史（奈良文化財研究所）

6．当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究１課が行った。本書の執筆・編集は萩原が行った。

7．当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

［地図類］

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図（世界測地系に準拠）及び松阪市都市計画図（日本測地系に準拠）である。

2　挿図の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北で表している。なお地域の磁北は真北に対して６°40′西偏している。

［遺構類］

1　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』(1999年版）を用いた。

2　本書で使用した遺構表示記号は下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＸ：火葬墓

ＳＺ：土器溜　　Ｐｉｔ及びＰ：柱穴・小穴

3　柱穴の「掘形」とは、柱を据えるために掘削した穴のラインを指す。

4　一覧表中の遺構番号は、発掘調査における遺構の種類・内容を問わず通し番号である。本文中において掲載した実測図は、報告番号に基づいて作成している。

5　時期については、各遺構の出土遺物等によって判断した。

6　規模については、長径（長さ）・短径（幅）・深さを各メートル単位で記載し、一部が調査区外に及ぶ遺構の平面規模や、深さが不明については「－」を記入した。

7　出土遺物については、遺構から出土しているものを記述した。

8　備考については、本文中において記述していない特徴等について記述した。

［遺物類］

1　報告書番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号をふっていない。したがってこの番号が遺物の全てではない。

2　実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの３桁は用紙の番号で、後側の２桁は用紙内での実測した順序の番号である。

3　出土遺構は遺構番号で示している。遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。

4　器種については、判明しているものについて記載した。なお椀については「碗」「垸」等があるが「椀」に統一している。

5　計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「－」は、計測できないものを表している。単位は、㎝である。さらに遺物によっては、長・幅・厚・高台径・底径などを表すこともある。

6　調整・技法の特徴は、成されている調整について記述しており調整順序によるものではない。

7　胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。

8　焼成については、良・並・不良の３段階に分けて、その中間に位置する場合は「やや」を付記した。

9　色調については、『新版　標準土色帖』（小山・竹原編19版　1997年）に基づいて表記した。

10　残存については、その部位を12分割した際の残存度を示した。

11　備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載している。

［写真図版］

1　写真図版は、遺構・遺物ごとでまとめた。

2　出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。

3　遺物の写真図版は、縮尺不同である。

本文目次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　調査契機 …… 1
　2　調査経過 …… 1
　3　調査方法 …… 1
　4　文化財保護法にかかる諸通知 …… 2
Ⅱ　地理的環境及び歴史的諸環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　遺構 …… 8
　1　基本層序 …… 8
　2　検出遺構 …… 8
Ⅳ　出土遺物 …… 23
Ⅴ　自然科学分析 …… 44
Ⅵ　まとめ …… 58
　1　遺構から …… 58
　2　出土遺物について …… 61
　3　小結 …… 63

挿図一覧

第１図　遺跡位置図
第２図　調査区地形図
第３図　調査区位置図
第４図　調査区平面図
第５図　調査区土層断面図
第６図　掘立柱建物ＳＢ49実測図
第７図　掘立柱建物ＳＢ48実測図
第８図　掘立柱建物ＳＢ51実測図
第９図　柱穴Ｄ８Ｐ４遺物出土状況図
第10図　柱穴Ｄ７Ｐ12遺物出土状況図
第11図　掘立柱建物ＳＢ50実測図
第12図　掘立柱建物ＳＢ47実測図
第13図　掘立柱建物ＳＢ46実測図
第14図　柱穴Ｆ７Ｐ３遺物出土状況図
第15図　区画溝ＳＤ20平面図（１）
第16図　区画溝ＳＤ20平面図（２）
第17図　区画溝ＳＤ20平面図（３）
第18図　区画溝ＳＤ20平面図（４）
第19図　出土遺物実測図（１）
第20図　出土遺物実測図（２）
第21図　出土遺物実測図（３）
第22図　出土遺物実測図（４）
第23図　出土遺物実測図（５）
第24図　出土遺物実測図（６）
第25図　出土遺物実測図（７）
第26図　出土遺物実測図（８）
第27図　出土遺物実測図（９）
第28図　出土遺物実測図（10）
第29図　出土遺物実測図（11）
第30図　出土遺物実測図（12）
第31図　掘立柱建物変遷図
第32図　遺跡周辺小字図

表一覧

第１表　遺構一覧表
第２表　掘立柱建物一覧表（１）
第３表　掘立柱建物一覧表（２）
第４表　出土遺物観察表（１）
第５表　出土遺物観察表（２）
第６表　出土遺物観察表（３）
第７表　出土遺物観察表（４）
第８表　出土遺物観察表（５）
第９表　出土遺物観察表（６）
第10表　出土遺物観察表（７）
第11表　出土遺物観察表（８）
第12表　供試材の履歴と調査項目
第13表　供試材の化学組成
第14表　出土遺物の調査結果のまとめ

写真一覧

写真１　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果
写真２　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果
写真３　含鉄鉄滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果
写真４　鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果
写真５　銅滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果
写真６　鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果
写真７　調査地遠景

写真図版一覧

巻頭カラー１　調査区全景（南から）
巻頭カラー２　調査区全景（北から）
　　出土緑釉陶器
写真図版１　調査前風景（南から）
　　調査前風景（北から）
写真図版２　完掘状況（南から）
　　完掘状況（北から）
写真図版３　掘立柱建物ＳＢ46完掘状況（南から）
　　掘立柱建物ＳＢ47・48・49完掘状況（南から）
写真図版４　掘立柱建物ＳＢ50完掘状況（東から）
　　掘立柱建物ＳＢ51完掘状況（東から）
写真図版５　不明遺構ＳＸ40完掘状況（東から）
　　土坑ＳＫ45完掘状況（北から）
写真図版６　区画溝ＳＤ20遺物出土状況（東から）
　　区画溝ＳＤ20遺物出土状況（西から）
写真図版７　区画溝ＳＤ20遺物出土状況（北から）
　　区画溝ＳＤ20遺物出土状況（北から）
写真図版８　区画溝ＳＤ20遺物出土状況（南から）
　　区画溝ＳＤ20遺物出土状況（東から）
写真図版９　Ｆ７Ｐ３遺物出土状況（東から）
　　Ｄ８Ｐ４遺物出土状況（南から）
写真図版10　Ｄ７Ｐ12遺物出土状況（北から）
　　作業風景（東から）
写真図版11　出土遺物（47・48・57・68・93・94・97・98・106・107・109・112・120・122）
写真図版12　出土遺物（123・124・131・133・147・154・155・159・160・161）
写真図版13　出土遺物（165・168・176・180・194・195・196・205）
写真図版14　出土遺物（207・221・226・248・250・253・269・281・293）
写真図版15　出土遺物（278・287・300・304・306・322・327・340・341）
写真図版16　出土遺物（388・400・414・416・436・208・209・435）

Ⅰ　前　言

１　調査契機

三重県埋蔵文化財センター調査研究１課では、三重県の各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認及び保護に努めている。こうした中で、県土整備部道路整備課から一般県道松阪環状線地方特定道路整備事業計画の照会を受け、事業予定地内に大蓮寺遺跡を確認した。

その結果、事前に範囲確認調査を実施し、本遺跡において遺構が確認された。その結果を受けて遺跡の取り扱いについて当該部局と協議を重ねた結果、発掘調査を実施し、記録保存が図られることとなった。

２　調査経過

＜調査日誌から＞

平成24年10月３日　重機による表土掘削開始。
10月４～５・９～10日　引き続き表土掘削。
10月11日　４ｍメッシュの設定。
10月12・15・16日　南から北に向かって包含層掘削及び遺構検出。
10月17・18日　雨天作業中止
10月19日　雨水排水のため作業中止。
10月23日　雨天作業中止。
10月23日　排水のため作業中止。
10月25日　Ａ～Ｈ９～10区の溝・柱穴の遺構掘削。
10月26・29日　ＳＤ（溝）20掘削。
10月30日　７～８区の遺構掘削。ＳＤ20は、遺物多い。
10月31日　午前中遺構掘削。午後会議のため作業中止。
11月１・２日　遺構掘削、ＳＤ20及び７～８区のピット掘削。
11月５日　６区を中心に遺構掘削。ＳＤ20の遺物出土状況の写真撮影。
11月６日　雨天作業中止。
11月７日　５～６区の遺構検出・掘削。ＳＤ20遺物出土状況図作成。
11月８日　５区の土坑・ピットなどの遺構掘削。
11月９日　４区の包含層掘削。ＳＤ20遺物取り上げ作業。
11月12日　排水作業のため作業中止。
11月13・14日　２～３区の包含層掘削。
11月16・19日　ＳＤ21（区画溝）掘削。
11月20・21・22日　ピット・土坑の遺構検出及び掘削。
11月26日　雨天作業中止。
11月27・28日　遺構検出及び掘削。ＳＫ45及びピット。
11月29日　３ｍメッシュの地区設定。
11月30日　調査区清掃。
12月３日　調査区清掃。遺構平面図（１/20）の作成にかかる。
12月４日　雨のため作業中止。
12月５日　写真撮影。ローリングタワーによる全景写真撮影。（６個所）
12月６・７・10～12日　遺構実測。
12月13日　調査区南壁・東壁実測（１/20）。
12月14日　現地説明会準備。
12月15日　現地説明会開催。36名の参加者。
12月17～19日　柱穴の断ち割りを行う。
12月20日　全て撤収。
12月26日　現地引き渡し。

３　調査方法

発掘調査は、重機によって表土を掘削し、包含層及び遺構掘削は人力によって行った。調査に際しての４ｍメッシュの地区割については、東西方向にアルファベット（西から東にかけてＡ、Ｂ、Ｃ、～）、南北方向に数字（北から南にかけて１、２、３、～）を設定した。各グリッドの名称は、北西隅の杭のナンバーをそのグリッド名とした。

遺構番号は、遺物が出土した遺構に限り１番からの通し番号を付けている。柱穴の遺物は、グリッド毎に１番から付けている（例：Ａ２区Ｐｉｔ１、Ｂ６区Ｐｉｔ８など）。

遺構平面図は、３ｍメッシュを設定し１/20で作成した。基準座標点は３ｍメッシュに最初から付した。調査区土層断面図は、１/20で、遺物出土状況の個別図は１/10で作成した。

写真撮影については、全体・個別遺構写真を４×５インチ、35㎜フィルムにより行った。

４　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下のとおり行っている。

・三重県条例第48条第１項に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地における土木等の発掘通知
平成24年１月30日付　松建第1685号（県教育長宛）
・法第99条第１項に基づく発掘調査
平成24年９月14日付　教埋第222号（県教育長宛）
・法第100条第２項に基づく出土品の発見認定
平成25年１月31日付　教埋第439号（県教育長宛）
・遺失物法に基づく出土品の提出
平成25年２月４日付　教委第12－4430号（松阪警察署長宛）

第Ⅱ章　位置と環境

１地理的環境

大蓮寺遺跡（１）は、松阪市櫛田町に所在する。行政区分上、松阪市は東側が伊勢湾、南側が明和町、多気町、大台町、西側が奈良県、北側が津市に接している。松阪市は、人口約16万人、総面積約623㎢と広域である。市域内には、東流及び北流する河川が北から、三渡川、金剛川、櫛田川、祓川の順に伊勢湾に注ぎこんでいる。なかでも流域規模の大きい櫛田川下流域は、この河川による沖積平野が形成されている。沖積平野の南側は、丘陵地帯が広がり、櫛田川右岸を北流する祓川の右岸域には、明野原台地と呼ばれる洪積台地が東方に存在する。

遺跡の所在する櫛田町は、松阪市域の中でも東部に位置する町である。そして大蓮寺遺跡周辺の標高は、海抜８～９ｍである。

２歴史的環境

ここでは大蓮寺遺跡周辺の遺跡について、発掘調査によって判明している遺跡を中心に概観していきたい。最初に弥生時代から述べる。

櫛田川を挟んで東南約３㎞の対岸の洪積台地上から祓川沿いの金剛坂遺跡①（２）は、弥生時代前期の集落跡があり、織糸遺跡②（３）・寺垣内遺跡②（４）では、中期から古墳時代初頭の方形周溝墓が確認されている。

北に約0.5㎞の瀬干遺跡③（５）では、発掘調査が２度にわたって実施され、方形周溝墓が８基確認されている。遺物には、パレススタイル壺が出土している。墓域が確認されていることから集落が至近に所在するとみられる。

北西約2.5㎞には、堀町遺跡④（６）が所在し、弥生時代後期の集落跡である。徐々にではあるが発掘調査の成果によってこの地域の弥生時代の様相が判明してきつつある。

古墳時代には、北西に約3.2㎞の佐久米古墳群が存在する。佐久米古墳群⑤は、大塚山古墳（７）・糠塚古墳（８）・丸山古墳（９）の３つの古墳からなる。大塚山古墳は、前方後円墳と考えられ、刀剣や銅鏡をはじめとして、多くの出土品が知られている。丸山古墳は、円墳と考えられ、甲冑片が出土している。糠塚古墳は、円墳と考えられ、銅鏡や円筒埴輪の出土が知られている。佐久米古墳群は、古墳の規模や出土遺物からみて地域の首長墳と考えられる。しかしながらこれら古墳群を造営したとみられる集落については、不明である。

南南西に約0.8㎞の丘陵地帯に天王山古墳群⑥(10)が造営される。この古墳群から蛇行剣が出土しており、特異な性格を持つ古墳であると考えられる。

また、南南東に約2.3㎞の横地高畑遺跡⑦(11）では、一辺９ｍの方墳が確認されている。周溝から鉄鎌や土師器高杯などが出土している。

さらに、南東に約1.3㎞の古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群⑧(12）では、円墳３基、方墳１基が確認されている。古墳の時期は、出土遺物から６世紀後半とみられる。

飛鳥・奈良時代から平安時代においては、古代官道である奈良古道推定ラインが当遺跡の南側をほぼ東西方向に走る。櫛田川下流域は、この古道と軸を揃えた飯野郡・多気郡の条里地割が広がっている。東に約0.7㎞の櫛田神社付近には、寺院跡として大雷寺廃寺（13）が存在していたと考えられている。この寺院跡の瓦は、櫛田町から和屋町にかけて広く出土している。本遺跡は、大雷寺廃寺と想定されたこともある。

また、北西部の約0.2㎞に朝見遺跡⑨(14）が広がる。朝見遺跡は、平成22・23年度に発掘調査が行われ多大の成果があがっている。なお、平成26年度の調査のうち東南部の調査区からは平安時代の鏡が出土している。（第２図参照）

さらに、東に約３㎞の国史跡斎宮跡（15）では、昭和45年度から継続して計画調査が実施されており、当遺跡の出土遺構・遺物の点から考えると関わりのある可能性があろう。

そして、約３㎞櫛田川を遡った上流に大川上遺跡（16）がある。大川上遺跡⑩では、「神宮寺」と墨書

第１図　遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院「松阪」「松阪港」1：50,000より〕

された土器が出土している。そのため大川上遺跡は、伊勢神宮寺と何らかの繋がりがある可能性を示していると考えられる。

南東に約1.8㎞の横地西ノ垣内遺跡⑪(17) では、掘立柱建物や製塩用の土坑とみられる遺構が確認されている。

中世の鎌倉時代から室町時代に至っては、多くの遺跡が展開する。堀町遺跡⑫は、第１～５次調査によって集落跡が確認されている。なかでも第６次調査では、数多くの井戸が確認されている。

南に約0.5㎞の琵琶垣内遺跡⑬(18) では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物や井戸、溝が確認されており、中世の集落跡と考えられる。

さらに南に約2.5㎞の山添遺跡⑭(19) では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物や井戸が確認されており、中世の館跡の可能性が考えられる。

東に約0.3㎞には櫛田地区内遺跡群⑮(20) が存在する。平成８年度に調査が行われ、室町時代から江戸時代にかけての遺構が確認されている。

最後に大蓮寺遺跡⑯の第１次調査では、奈良時代の遺構・遺物を確認している。

［註］

①明和町「金剛坂遺跡発掘調査報告」(明和町郷土文化を守る会　1971年)
三重県埋蔵文化財センター「金剛坂遺跡（第４次）・辰ノ口古墳群（第２次）発掘調査報告」(1999年)
三重県埋蔵文化財センター「金剛坂遺跡（第５次）・辰ノ口古墳群（第３次）発掘調査報告」(2001年)

②三重県埋蔵文化財センター「織糸遺跡」(2006年)

③三重県埋蔵文化財センター「瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡発掘調査報告」(1996年)
三重県埋蔵文化財センター「瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告」(2000年)

④三重県埋蔵文化財センター「堀町遺跡」(2000年)

⑤松阪市史編纂委員会「松阪市史　第２巻　史料編・考古」(1978年)

⑥三重県埋蔵文化財センター「天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告」(2006年)

⑦三重県埋蔵文化財センター「横地高畑遺跡発掘調査報告」(1998年)

⑧三重県埋蔵文化財センター「古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告」(2000年)

⑨三重県埋蔵文化財センター「朝見遺跡（第２・３次)」(2014年)
三重県埋蔵文化財センター「朝見遺跡（第５次）現地説明会資料」(2014年)

⑩三重県埋蔵文化財センター「大川上遺跡発掘調査報告」(1999年)

⑪三重県埋蔵文化財センター「横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告」(1999年)

⑫註④と同じ
三重県埋蔵文化財センター「堀町遺跡（第５次）現地説明会資料」(2012年)
三重県埋蔵文化財センター「堀町遺跡（第６次）現地説明会資料」(2013年)

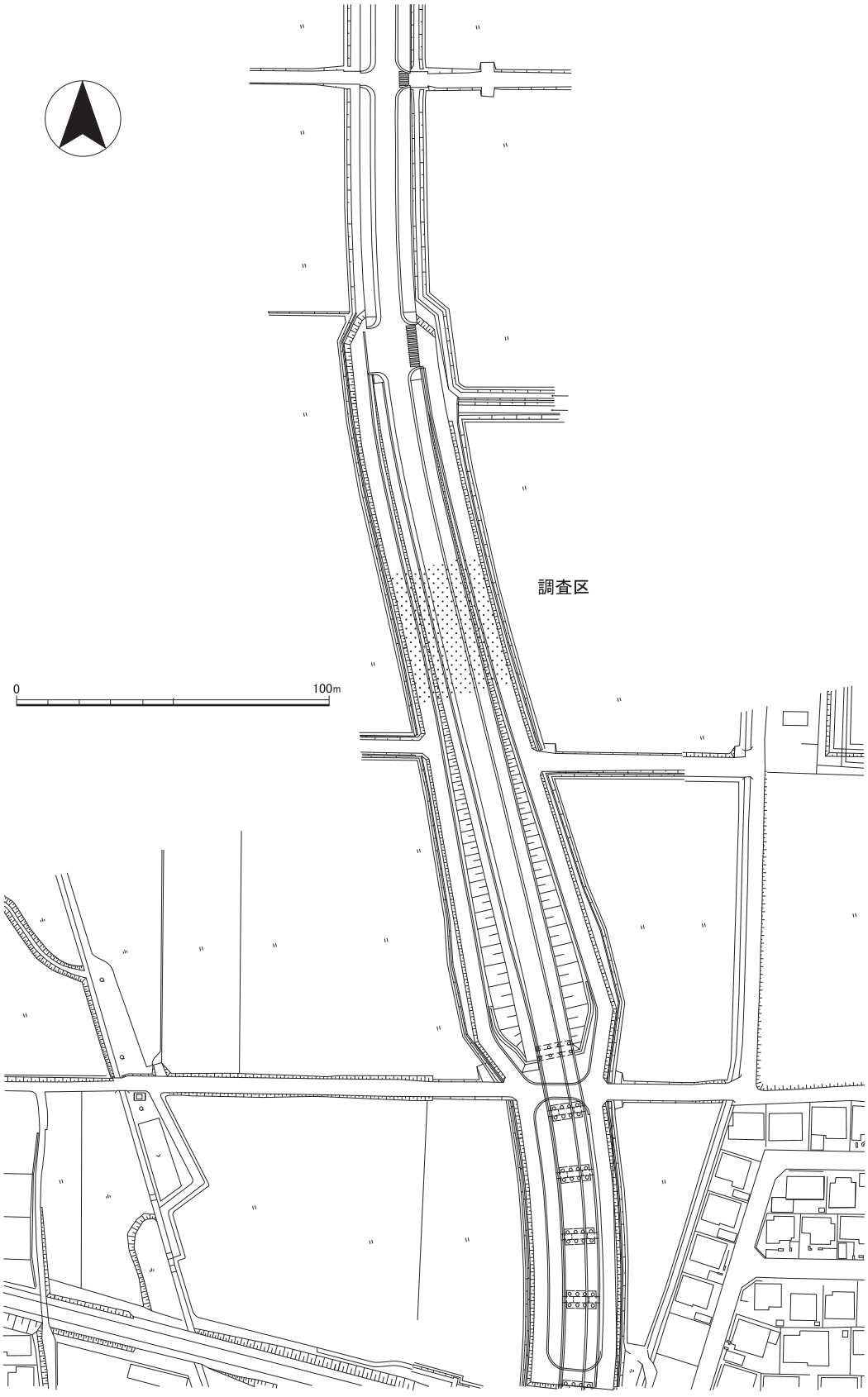
⑬三重県埋蔵文化財センター「琵琶垣内遺跡（第２次）発掘調査報告」(1999年)
三重県埋蔵文化財センター「琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告」(2006年)
三重県埋蔵文化財センター「琵琶垣内遺跡（第３次）発掘調査報告」(2007年)

⑭三重県教育委員会「山添遺跡発掘調査報告」(1979年)
三重県埋蔵文化財センター「山添遺跡（第２次）・里中遺跡ほか」(1997年)
三重県埋蔵文化財センター「山添遺跡（第３次）発掘調査報告」(2002年)
三重県埋蔵文化財センター「山添遺跡（第４次）発掘調査報告」(2007年)

⑮三重県埋蔵文化財センター「櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ　池ノ端地区・かん志ゆう地区」(1997年)
三重県埋蔵文化財センター「櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ　奥ノ垣内地区」(1997年)

⑯註③と同じ

第２図　調査区地形図（1：5,000）



第３図　調査区位置図（1：2,000）

第Ⅲ章　遺　構

1　基本層序

今回の調査対象地は、櫛田川左岸の沖積平野で、標高は８～９ｍである。

土層の基本的な層位は、第１層が盛土、第２層が黄灰色土（2.5Y6/1、マンガン混）、第３層が基盤層（地山）の黄色土（2.5Y7/8）である。遺構検出は、第３層上において行った。遺構は、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝から中世の溝に至るまでのものが検出できた。遺構の埋土は褐灰色土（10YR4/1）または、黄橙色土（10YR7/8）などである。

そして本来、第１層は、耕作土と考えられる。また北側と南側の柱穴の深さを比べてみると北側のもの深さが非常に浅い。柱穴など遺構の完掘状況から北側を中心に削平があった可能性もあろう。

2　検出遺構

掘立柱建物ＳＢ46　桁行２間×梁行２間で北と西に１間分の庇を持つ建物である。調査区外のため東側にも庇が付く可能性がある。棟方向は、北で東に18°振れる。建物規模は桁行7.6m、梁行6.3mを測る。柱間寸法①は、桁行が東から2.6m（８尺５寸）、2.5m（８尺５寸）、梁行が南から2.3m（７尺５寸）、２m（６尺５寸）で庇はそれぞれ2.5m（８尺）と２m（６尺５寸）である。

従って建物全体の推定規模は桁行7.58m（25尺）、梁行6.21m（20尺５寸）となる。建物の面積は、庇部分を含めて47.07㎡である。

出土遺物には、土師器甕・灰釉陶器椀・壺か瓶（53～56）がある。掘立柱建物の廃絶時期は、灰釉陶器椀の時期が東山72号窯式新段階とみられ10世紀末とみられる。

掘立柱建物ＳＢ47　桁行２間×梁行２間で四面に庇を持つ建物である。棟方向は、北で東に18°振れる。建物規模は桁行9.64m、梁行8.2mを測る。柱間寸法は、桁行が東から2.58m（８尺５寸）、2.44m（８尺）、梁行が北から2.16m（７尺）、2.2m（７尺）で、庇は東から2.08m（７尺）、2.54m（８尺）、北から1.7m（５尺５寸）、2.14m（７尺５寸）である。従って建物全体の推定規模は桁行9.55m（31尺５寸）、梁行8.18m（27尺）となる。建物の面積は、庇部分を含めて78.12㎡である。

出土遺物には、土師器杯・台付皿か椀・墨書土器・製塩土器、灰釉陶器椀（１～８）がある。掘立柱建物の廃絶時期は、土師器杯から10世紀末とみられる。

掘立柱建物ＳＢ48　桁行２間×梁行２間で南と西に１間分の庇を持つ建物である。棟方向は、北で東に14°振れる。建物規模は桁行6.2m、梁行5.94mを測る。柱間寸法は、桁行が北から2.1m（７尺）、2.3m（７尺５寸）、梁行が西から1.98m（６尺５寸）、２m（６尺５寸）、庇がそれぞれ1.9m（６尺５寸）、1.96m（６尺５寸）である。

従って建物全体の推定規模は桁行6.36m（21尺）、梁行5.91m（19尺５寸）となる。建物の面積は、庇部分を含めて37.59㎡である。

出土遺物には、土師器皿・杯・椀・甕・土錘・軒平瓦（61～72）がある。掘立柱建物の廃絶時期は、10世紀後葉とみられる。

掘立柱建物ＳＢ49　桁行４間×梁行２間で西に１間分の庇を持つ建物である。棟方向は、北で東に15°振れる。建物規模は桁行7.9m、梁行5.44mを測る。柱間寸法は、桁行が北から1.9m（６尺５寸）、2.1m（７尺）、２m（６尺５寸）、1.9m（６尺５寸）、梁行が東から1.94m（６尺５寸）、2.2m（７尺）、庇は1.3m（４尺５寸）である。

従って建物全体の推定規模は桁行8.03m（26尺５寸）、梁行5.45m（18尺）となる。建物の面積は、庇の部分を含めて43.76㎡である。

出土遺物には、緑釉陶器椀・灰釉陶器皿・椀・土師器皿・杯・鉢・甕・墨書土器・製塩土器・軒平瓦（９～52・276～279）がある。掘立柱建物の廃絶時期は、灰釉陶器椀から10世紀中葉とみられる。

掘立柱建物ＳＢ50　桁行４間×梁行２間の南北棟である。棟方向は、北で東に11°振れる。建物規模は桁行8.5m、梁行4.6mを測る。柱間寸法は、桁行が

第４図　調査区平面図（1：200）

北から２ｍ（６尺５寸）、2.1m（７尺）、2.5m（８尺５寸）、1.9m（６尺５寸）で梁行が西から2.36m（８尺）、2.24m（７尺５寸）である。

従って建物全体の推定規模は桁行8.64m（28尺５寸）、梁行4.7m（15尺５寸）となる。建物の面積は、40.61㎡である。

出土遺物は鉄製品刀子（57）である。そのため、掘立柱建物の廃絶時期は判断できないが、柱穴の埋土等により10世紀後葉とみられる。

掘立柱建物ＳＢ51　桁行３間？×梁行１間以上の建物である。柱穴が調査区西壁面から確認されているため、２間×２間の建物で西と南側は庇の可能性がある。棟方向は、北で東に15°振れる。建物規模は桁行6.9m、梁行2.1mを測る。柱間寸法は、桁行が北から2.46m（８尺）、2.1m（７尺）、2.34m（８尺）、梁行が2.1m（７尺）である。

建物全体の推定規模や面積は、不明である。

出土遺物には、土師器小皿・陶器椀・須恵器甕（58～60）がある。掘立柱建物の廃絶時期は、陶器椀から12世紀後半とみられる。

土坑ＳＫ35　Ｂ３区において検出した長楕円形の土坑である。土坑の規模は、短辺0.66m、長辺1.26m、深さ0.08mである。出土遺物には、土師器杯・甕（73～75）がある。

土坑ＳＫ38　Ｅ４区において検出した不定形の土坑である。南側半分は、攪乱によって削平されている。土坑の規模は、一辺2.23～2.98m、深さ0.25～0.3mを測る。

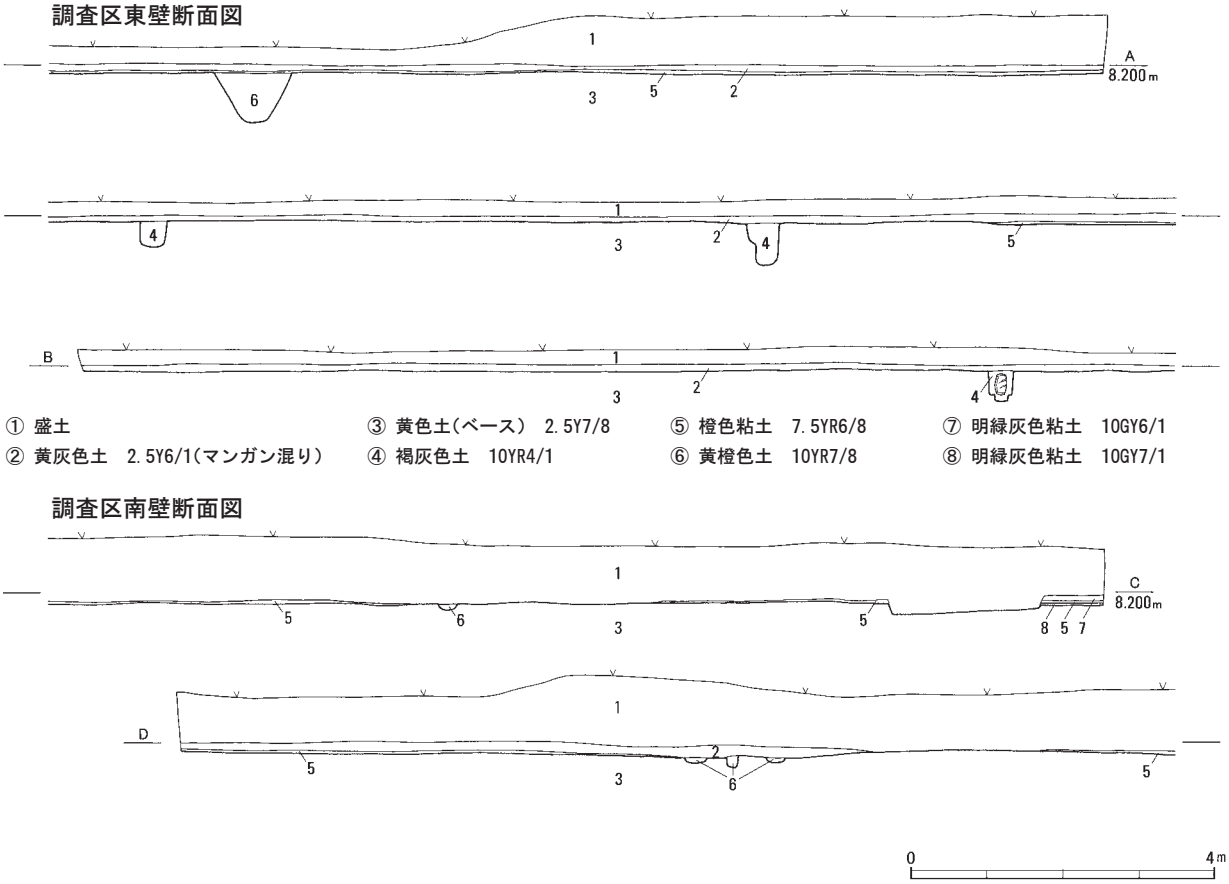
出土遺物には、土師器丸底壺・杯・志摩式製塩土器・灰釉陶器椀（76～85）がある。土坑の廃絶時期は、灰釉陶器から10世紀後半とみられる。

土坑ＳＫ39　Ｇ４区において検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は、径1.11m、深さ0.18mを測る。遺構検出時には、平面形から井戸と考えた。

出土遺物には、土師器皿・土錘（86・87）がある。土坑の廃絶時期は、11世紀前半以降とみられる。

土坑ＳＫ42　Ｇ６区において検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は、直径1.44～2.07m、深さ0.27mである。

出土遺物には、土師器杯・甕・志摩式製塩土器・



第５図　調査区土層断面図（1：100）

灰釉陶器椀（89～101）がある。土坑の廃絶時期は、灰釉陶器から９世紀後半以降とみられる。

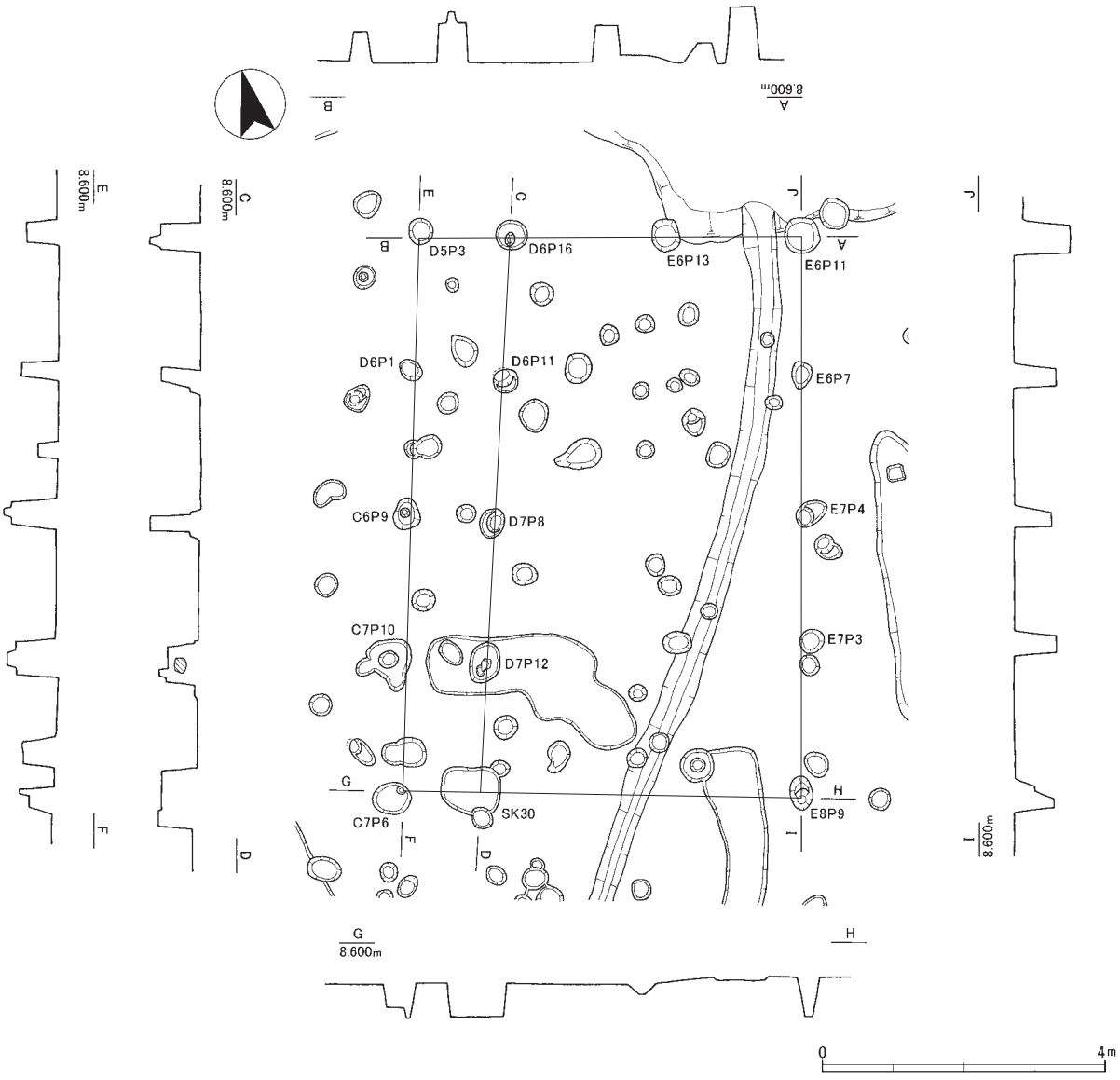
土坑ＳＫ45　Ｅ２区において検出した隅丸方形の土坑である。遺構検出時には、平面形から井戸と考えた。土坑の規模は一辺が1.73～1.9m、深さ0.31mを測る。四隅には柱穴が確認でき覆屋的なものが存在したとみられる。土坑で記載したが井戸の可能性もあろう。

出土遺物には、土師器皿・灰釉陶器皿・椀・ロクロ土師器皿（102～105）がある。土坑の廃絶時期は、灰釉陶器から10世紀後半とみられる。

区画溝ＳＤ20　調査区の南部Ｂ９区からＧ９区にかけての東西溝である。溝の規模は、幅0.75～2.16m、深さ0.48～0.5mである。溝の方位はＥ12～14°Ｎである。溝の断面形は、ほぼ逆台形である。西端は確認できたが、東端は調査区外に伸びる。溝から北側に掘立柱建物群を確認することができ集落と外側を区画する溝と考えられる。

出土遺物は多く、緑釉陶器や灰釉陶器椀・土師器皿・杯・椀・甕・志摩式製塩土器・轆羽口・瓦・鉄製品釘・筒形青銅製品（110～221）などが出土している。溝の時期は、10世紀後半には埋没したとみられる。

区画溝ＳＤ21　調査区の北西部Ｂ２区からＡ７区にかけての南北溝である。溝の規模は、幅が少なくとも0.64m、深さ0.26～0.34mである。溝の方位はＮ15°Ｅである。調査区北側にも延伸していると推測される。溝から東側に掘立柱建物群を確認すること



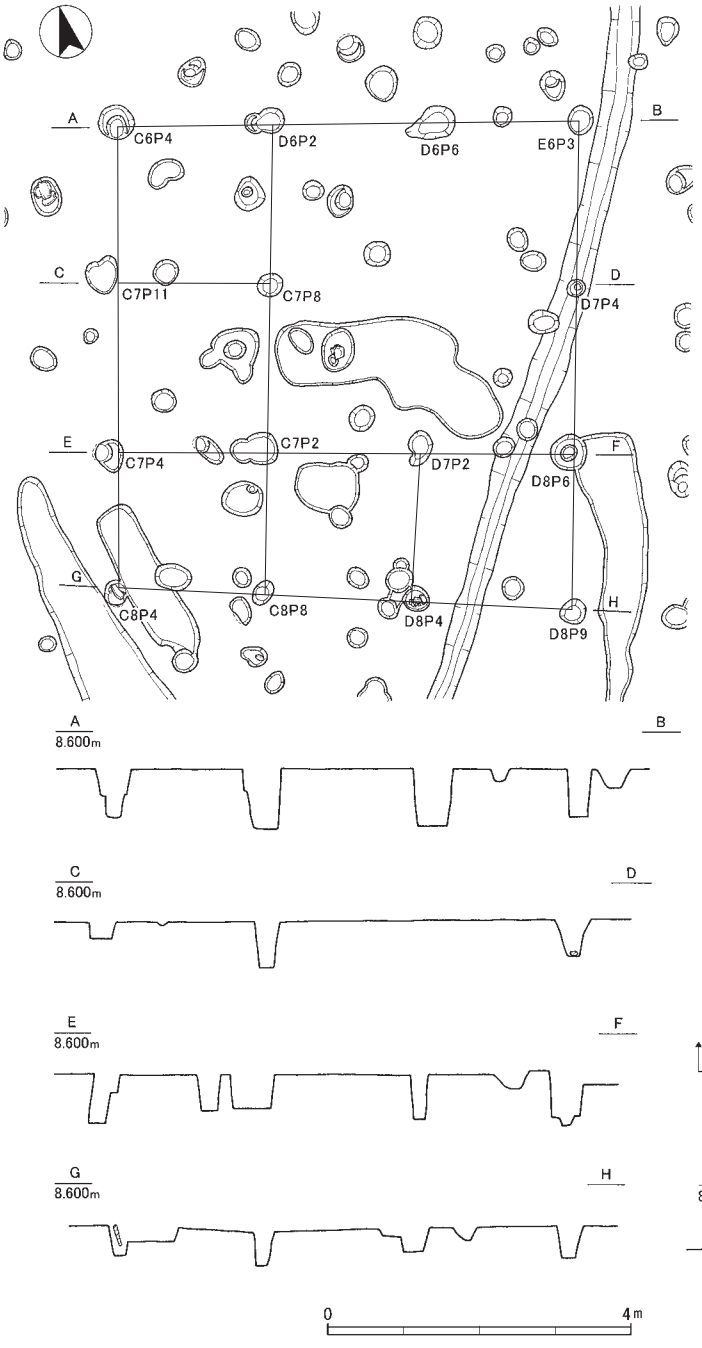
第６図　掘立柱建物ＳＢ49実測図（1：100）

ができ集落と外側を区画する溝と考えられる。また、西側は、やや低くなっており、掘立柱建物群は、微高地になっている。

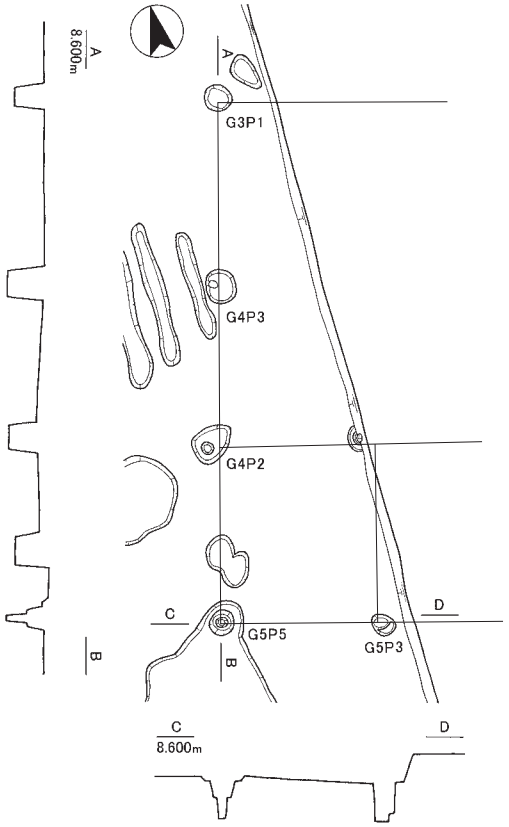
出土遺物は、土師器杯をはじめ山茶椀（222～254）・溝底から馬歯[②]（図示していない）などが出土している。溝の時期は、12世紀後半には埋没したとみられる。

溝ＳＤ27　調査区の中央部Ｄ８区からＦ２区の北東方向に伸びる溝である。ＳＤ20に取り付いており、排水路的な役割を果たしていたものと考えられる。溝の断面形はU字状である。

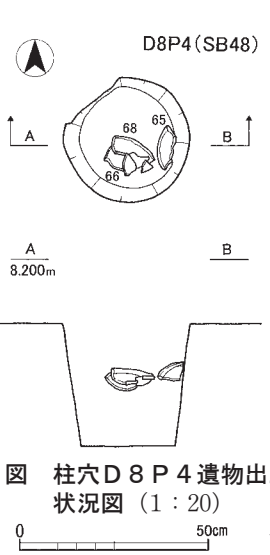
出土遺物には、土師器皿・杯・椀・甕・灰釉陶器椀（369～380）がある。溝の時期は、11世紀前半に埋没したとみられる。



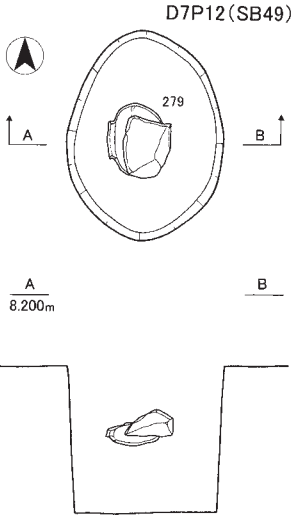
第７図　掘立柱建物ＳＢ48実測図（1：100）



第８図　掘立柱建物ＳＢ51実測図（1：100）



第９図　柱穴Ｄ８Ｐ４遺物出土状況図（1：20）



第10図　柱穴Ｄ７Ｐ12遺物出土状況図（1：20）

火葬墓ＳＸ40　Ｄ３区おいて検出した長楕円形の土坑である。土坑の規模は、短径が0.6ｍ、長径が1.3ｍ、深さ0.06～0.27ｍを測る。四隅には柱穴が４つ確認でき、覆屋的なものが存在したとみられる。ＳＸ40の埋土は炭層であり、古代の火葬墓の可能性が高い。

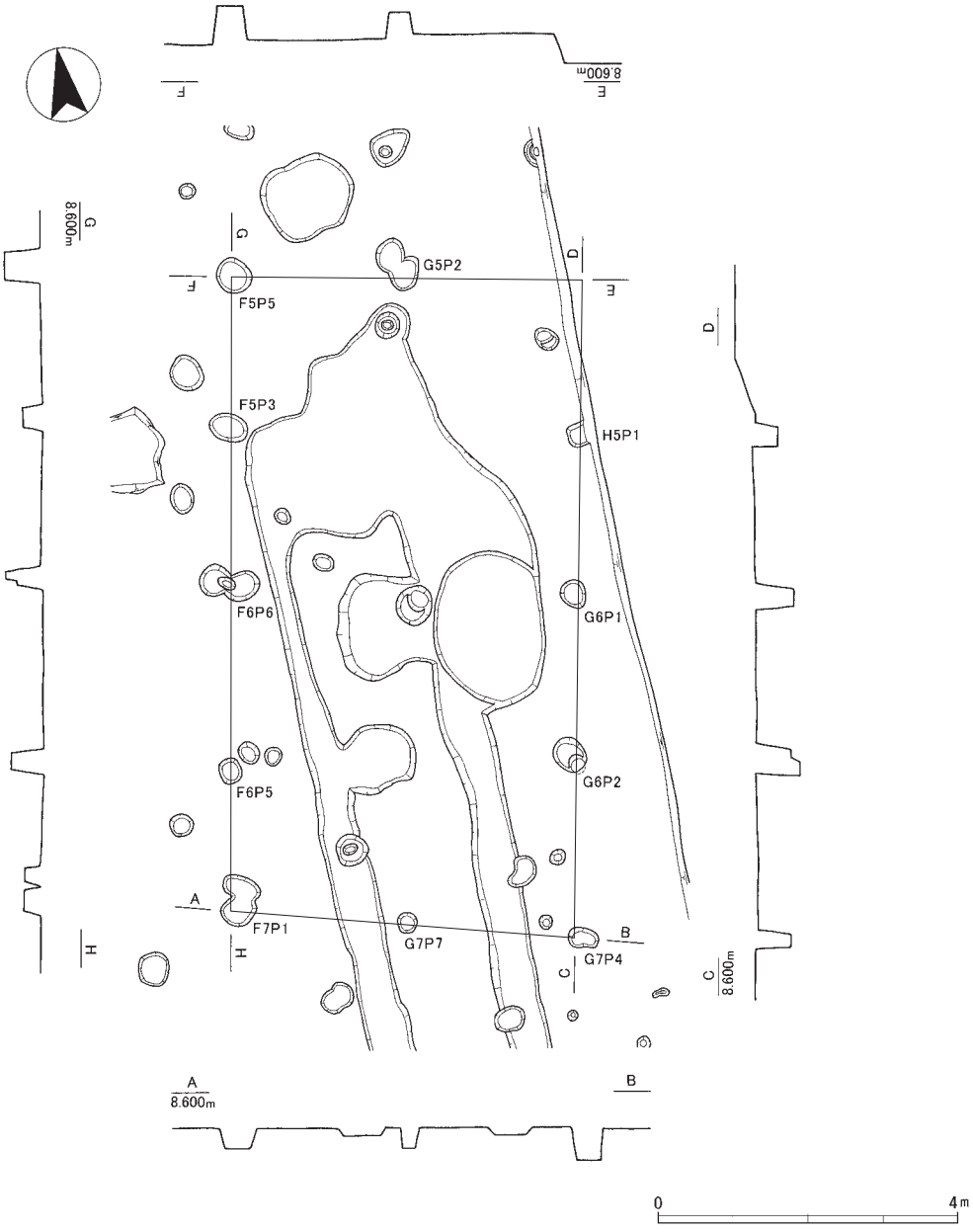
出土遺物には、土師器椀（88）とみられる高台部片が出土している。時期は、10世紀中葉から10世紀後葉の範囲内であろう。

土器溜遺構ＳＺ52　Ｂ12区において検出した土器溜である。素掘溝の可能性も考えられる。遺物には、土師器杯（108・109）があり10世紀代とみられる。

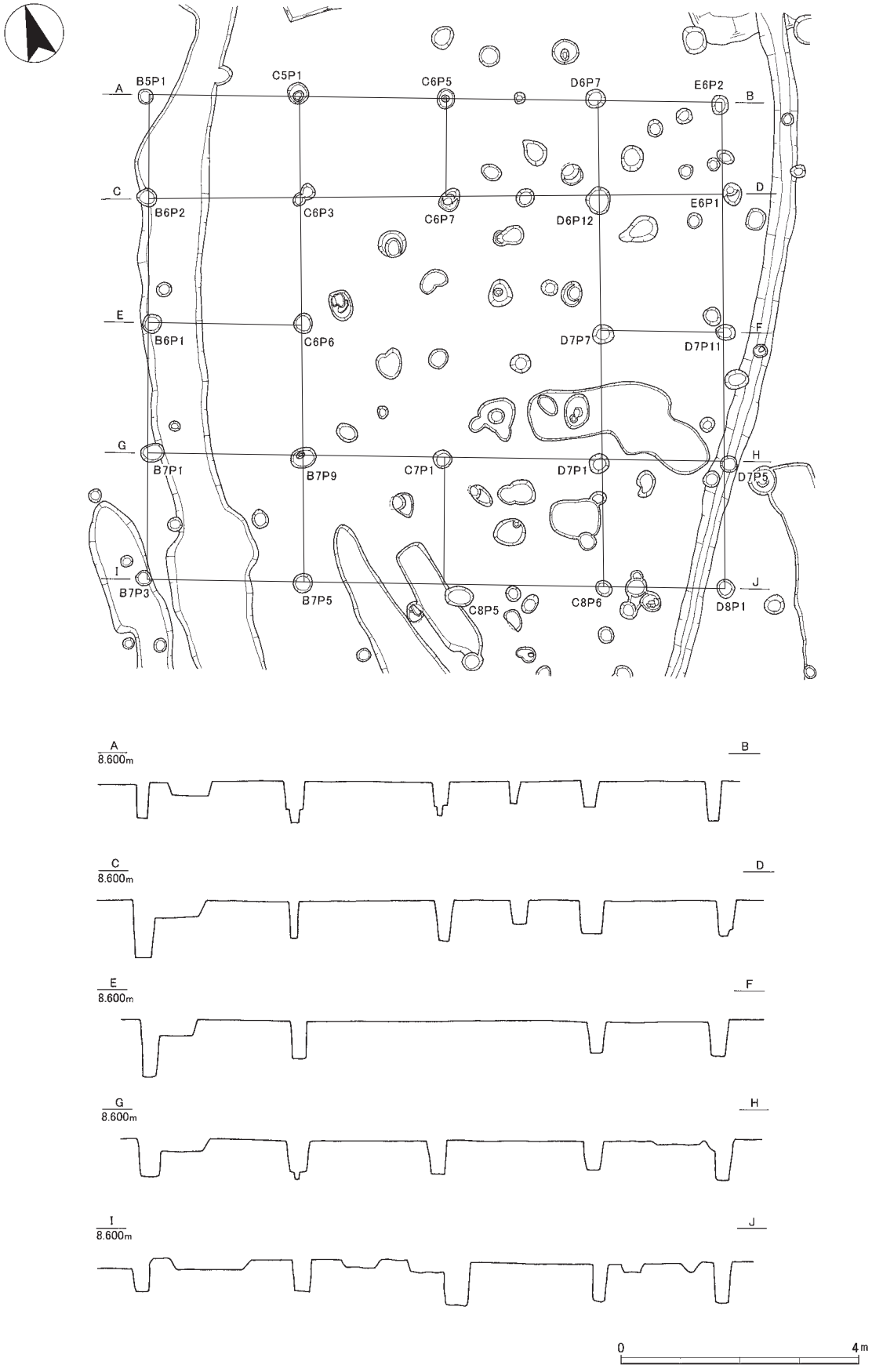
［註］

①建物の規模の尺の単位は、30.3㎝を使用して計算している。

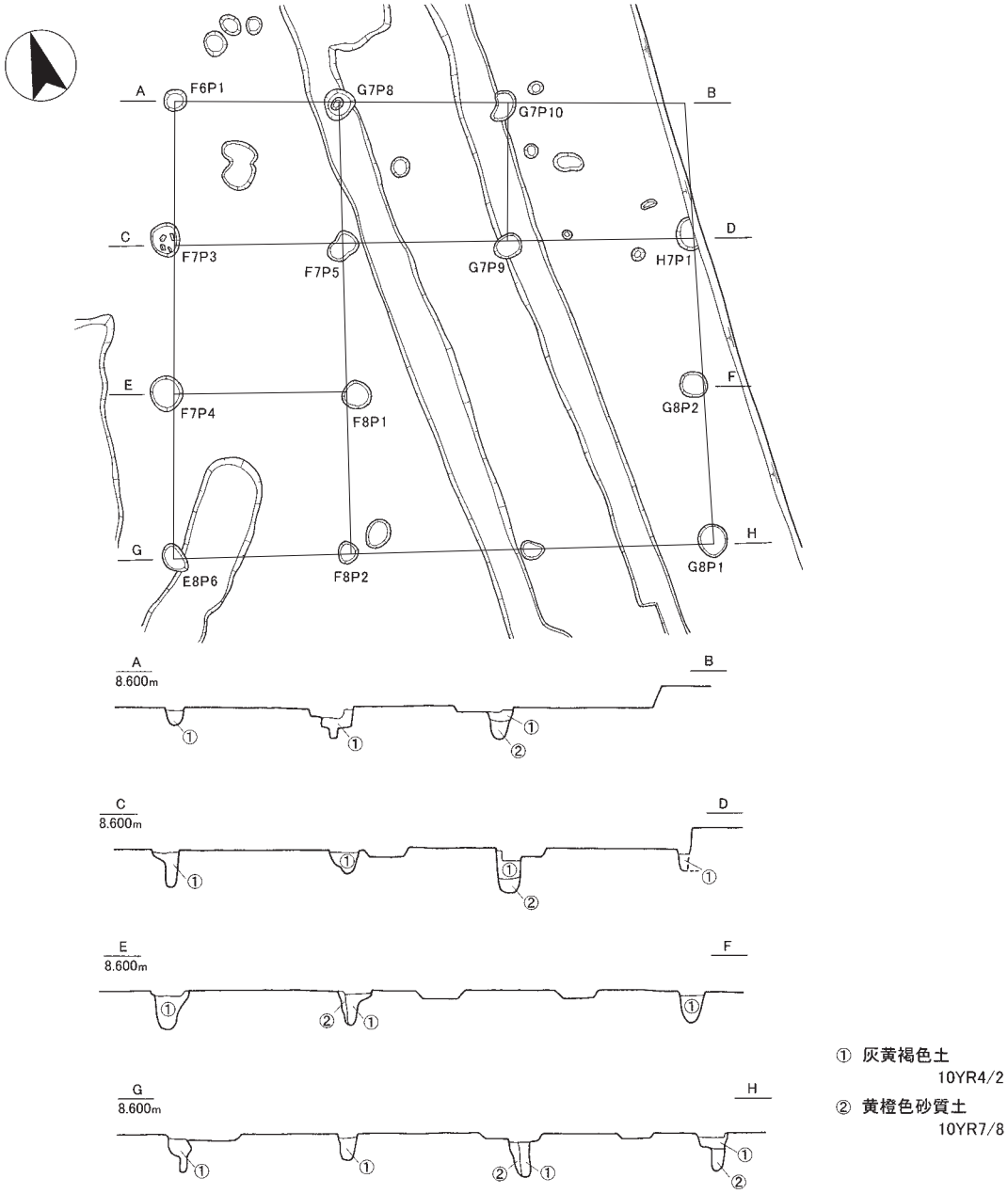
②馬歯については、丸山真史氏に鑑定いただいた。



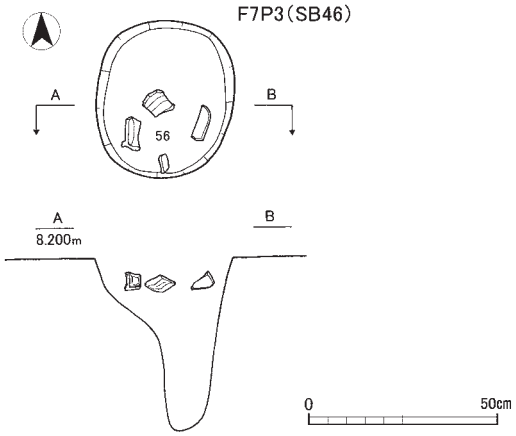
第11図　掘立柱建物ＳＢ50実測図（1：100）



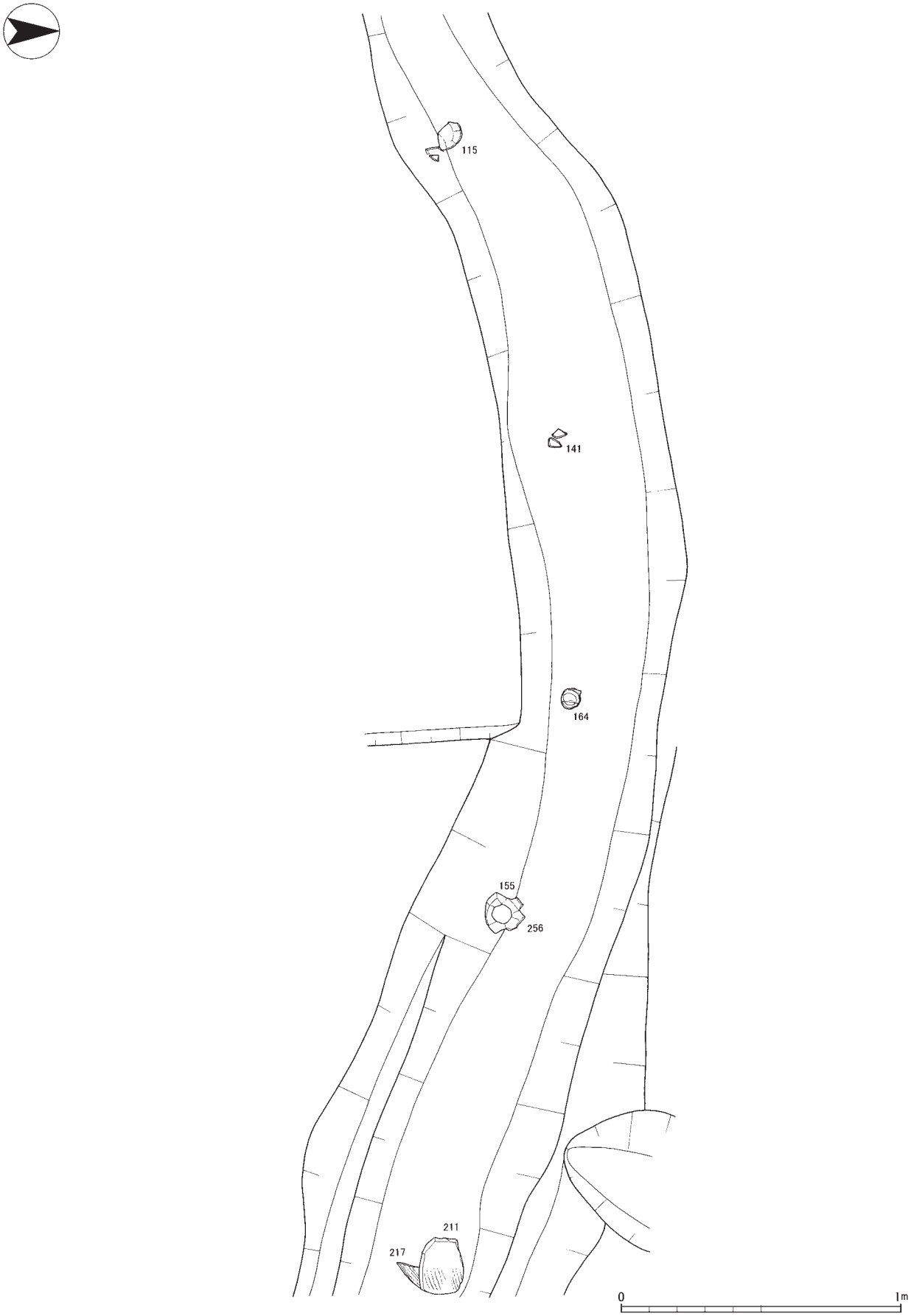
第12図　掘立柱建物ＳＢ47実測図（1：100）



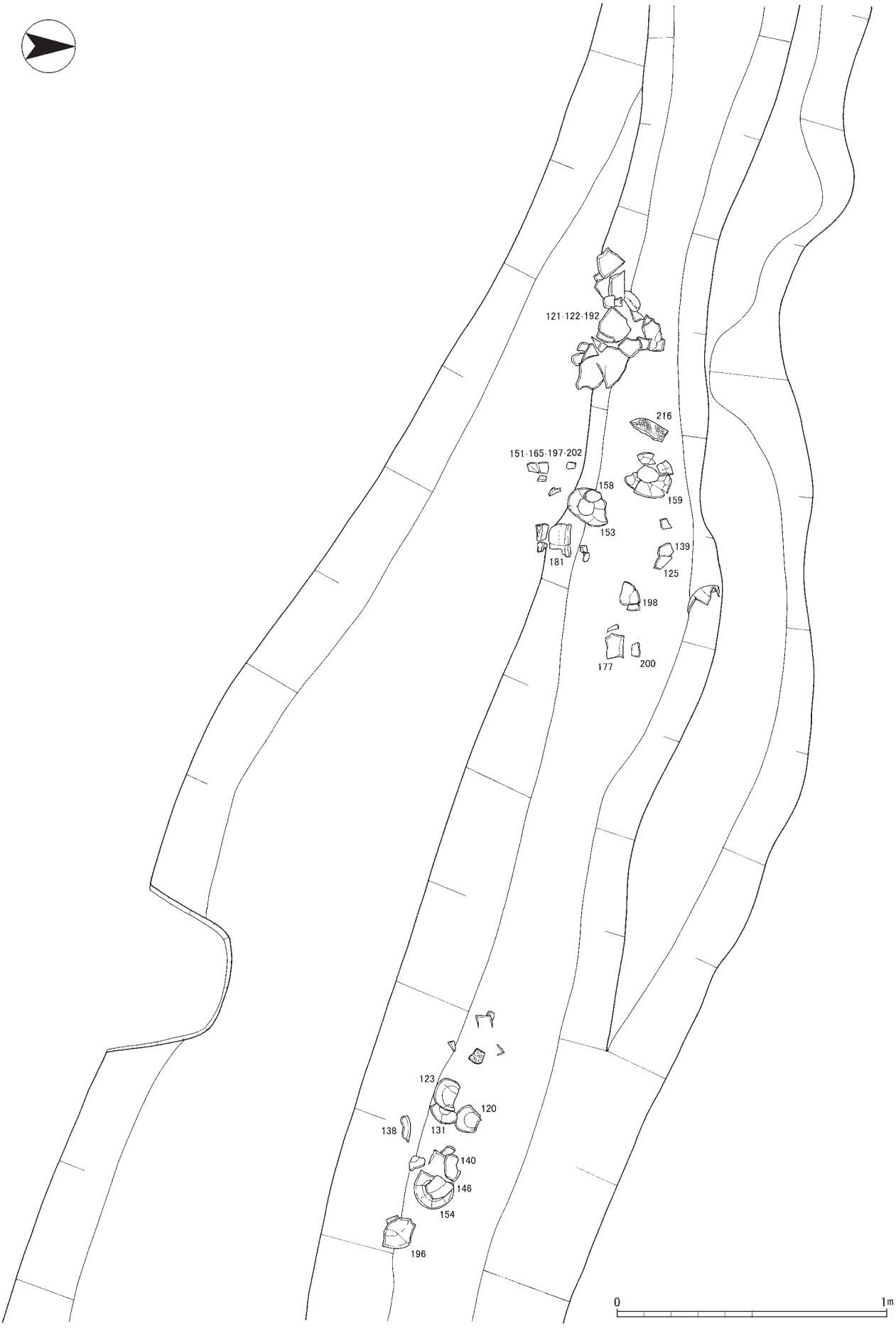
第13図　掘立柱建物ＳＢ46実測図（1：100）



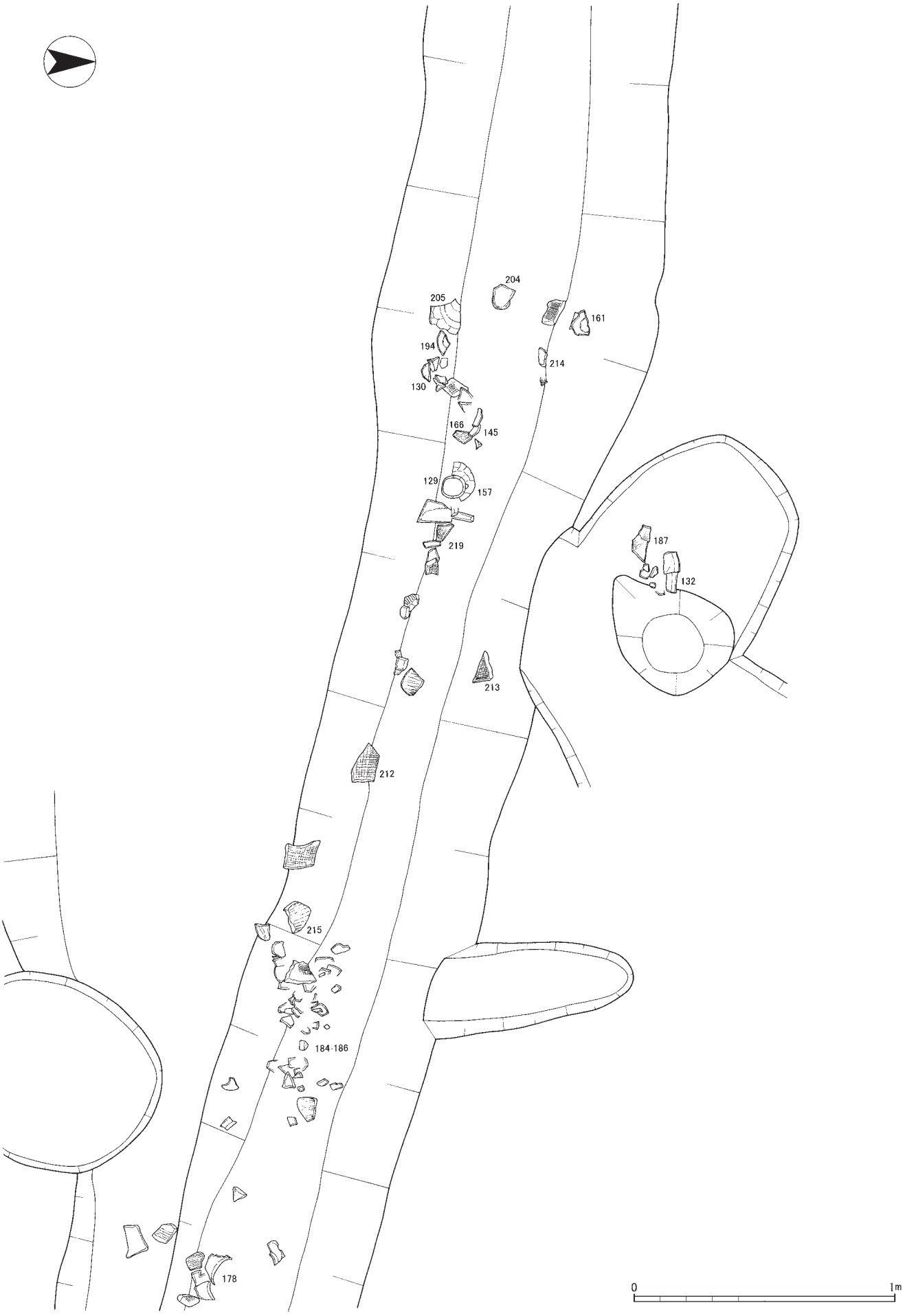
第14図　柱穴Ｆ７Ｐ３遺物出土状況図（1：20）



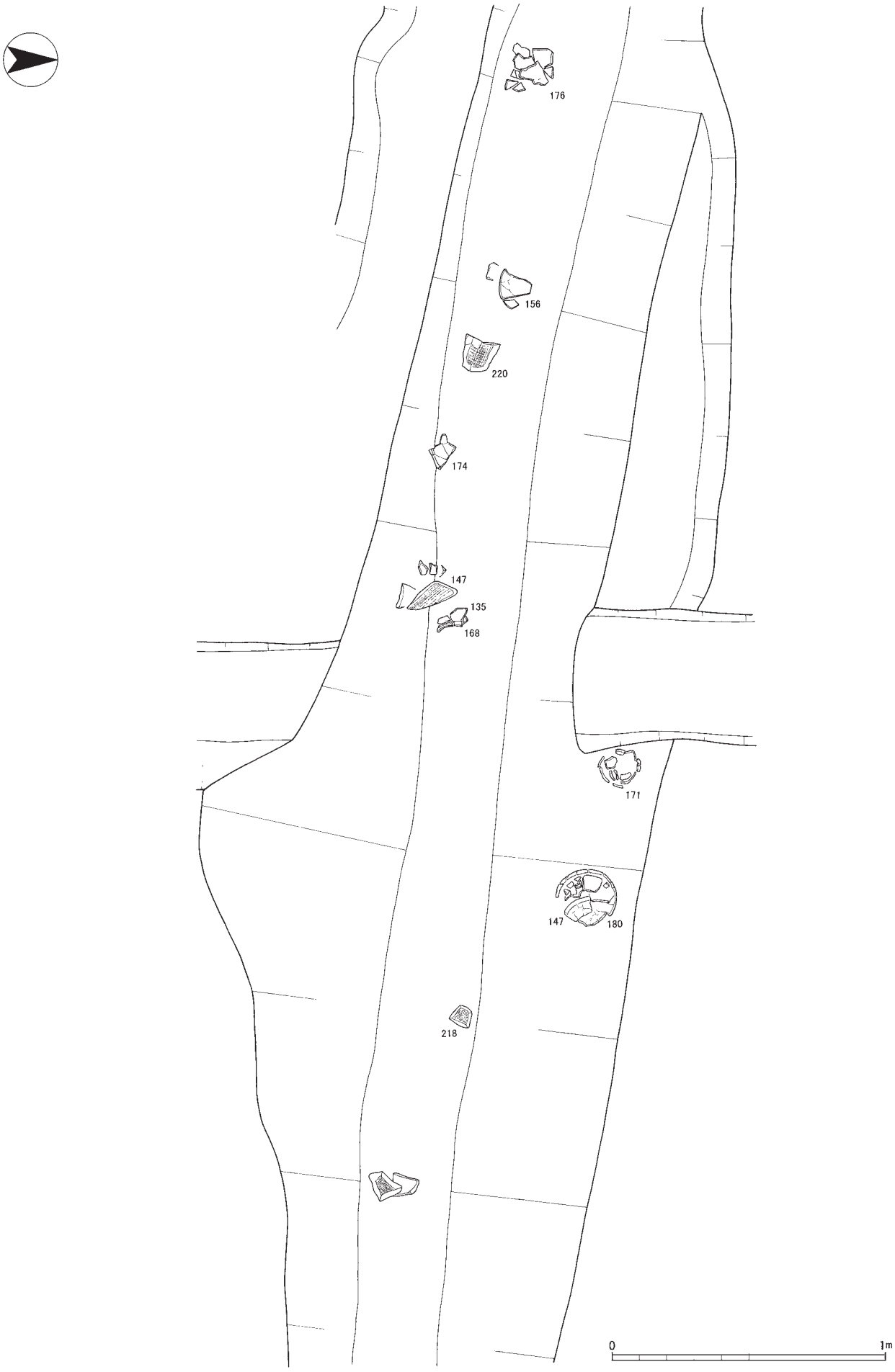
第15図　区画溝ＳＤ20平面図（１）（1：20）



第16図　区画溝ＳＤ20平面図（２）（1：20）



第17図　区画溝ＳＤ20平面図（３）（1：20）



第18図　区画溝ＳＤ20平面図（４）（1：20）

遺構番号	性格	地区名	時期	規模	備考
SD1	溝	A11・12	中世？	幅0.24m・深さ0.06m	素掘溝
SD2	溝	F11・12	中世？	幅0.82m・深さ0.15m	素掘溝
SK3	土坑	G11	中世？	幅0.82m・深さ0.12m	素掘溝
SD4	溝	A11・12	中世？	幅0.4m・深さ0.02m	素掘溝
SD5	溝	A10	中世？	幅0.3～0.44m・深さ0.18m	素掘溝
SD6	溝	G5～10	中世？	幅0.58m・深さ0.11m	素掘溝
SD7	溝	D9～10	中世？	幅0.78m・深さ0.18m	素掘溝
SD8	溝	A11	中世？	幅0.68～1.02m・深さ0.15m	素掘溝
SD9	溝	G5～9	中世？	幅0.56m・深さ0.12m	素掘溝
SD10	溝	E9～10・D10	中世？	幅0.78～1.56m・深さ0.09m	素掘溝
SD11	溝	F11	中世？	幅0.32m・深さ0.13m	素掘溝
SK12	土坑	A10	中世？	一辺0.56×1.2m・深さ0.16m	素掘溝
SK13	土坑	F9	時期不明	一辺0.72×0.84m・深さ0.26m	
SK14	土坑	F9	時期不明	幅0.32m・深さ0.1m	素掘溝？
SD15	溝	B8～9	中世？	幅1.2m・深さ0.13m	素掘溝
SK16	土坑	F10	中世？	幅0.96m・深さ0.11m	素掘溝
SD17	溝	C5・B5～10	中世？	幅0.84～1.52m・深さ0.2m	素掘溝
SD18	溝	A8～9	中世？	幅0.72m・深さ0.13m	素掘溝
SD19	溝	B7～9	中世？	幅0.6～0.94m・深さ0.19m	素掘溝
SD20	溝	B9～G9	平安	幅0.75～2.16m・深さ0.48～0.5m	区画溝
SD21	溝	B2～A7	平安～中世	幅0.64m・深さ0.26～0.34m	区画溝
SD22	溝	E7	中世？	幅0.72m・深さ0.09m	素掘溝
SD23	溝	E8～F8	中世？	幅0.84m・深さ0.08m	素掘溝
SD24	溝	E7～8	中世？	幅0.5～0.8m・深さ0.11m	素掘溝
SK25	土坑	E8	中世？	一辺0.38×0.68m・深さ0.09m	素掘溝
SD26	溝	C8	中世？	幅0.52m・深さ0.22m	素掘溝
SD27	溝	F2～D8	平安	幅0.46m・深さ0.1～0.32m	
SK28	土坑	E9	平安	短辺0.8m・長辺2m・深さ0.4m	不定形・土坑の重複
SD29	溝	D8	中世？	幅0.82m・深さ0.17m	素掘溝
SK30	土坑	C7	平安	一辺0.66×0.84m・深さ0.49m	柱穴
SD31	溝	B3～C3	中世？	幅0.56m・深さ0.1m	
SD32	溝	A2～3	平安～中世？	幅1.38m・深さ0.21m	SD21と同一の溝？
SK33	土坑	B2	中世？	一辺0.82×0.9m・深さ0.12m	
SD34	溝	A2～3	平安～中世？	幅0.32～0.7m・深さ0.05～0.07m	SD21と同一の溝？
SK35	土坑	B3	平安	一辺0.66×1.26・深さ0.08m	
SD36	溝	A2～3	平安～中世？	幅0.4m・深さ0.11m	SD21と同一の溝？
SK37	土坑	D7	中世？	幅0.84m・深さ0.05m	素掘溝
SK38	土坑	E4～5	平安	一辺2.23×2.98m・深さ0.25～0.3m	
SK39	土坑	G4～5	平安	径1.11m・深さ0.18m	四隅に柱穴あり
SX40	土坑	D3	平安	一辺0.6×1.3m・深さ0.06～0.27m	四隅に柱穴あり
SD41	溝	G4	中世？	幅0.3m・深さ0.11m	素掘溝
SK42	土坑	G6	平安	径1.44～2.08m・深さ0.27m	
SD43	溝	G4	中世？	幅0.24m・深さ0.06m	素掘溝
SD44	溝	G4	中世？	幅0.2m・深さ0.06m	素掘溝
SK45	土坑	E2～3	平安	一辺1.73×1.9m・深さ0.31m	四隅に柱穴あり
SZ52	土器溜	B12	平安	規模不明	

第１表　遺構一覧表

遺構番号	グリッド	ピット番号	建物時期	規模	主軸	方位	備考
SB46	E8	Pit1	平安	桁行7.6m 梁行6.3m 建物面積47.07㎡	東西	N18° E	10世紀末
	F6	Pit1					
	F7	Pit3					
		Pit4					
		Pit5					
	F8	Pit1					
		Pit2					
	G7	Pit8					
		Pit9					
		Pit10					
	G8	Pit1					
		Pit2					
		Pit3					
	H7	Pit1					
SB47	B5	Pit1	平安	桁行9.64m 梁行8.2m 建物面積78.12㎡	東西	N18° E	10世紀末
	B6	Pit1					
		Pit2					
	B7	Pit1					
		Pit3					
		Pit5					
		Pit9					
	C5	Pit1					
	C6	Pit3					
		Pit5					
		Pit6					
		Pit7					
	C7	Pit1					
	C8	Pit5					
		Pit6					
	D6	Pit7					
		Pit12					
	D7	Pit1					
		Pit5					
		Pit7					
		Pit11					
	D8	Pit1					
	E6	Pit1					
		Pit2					
SB48	C6	Pit4	平安	桁行6.2m 梁行5.94m 建物面積37.59㎡	南北	N14° E	10世紀後葉
	C7	Pit2					
		Pit4					
		Pit8					
		Pit11					
	C8	Pit4					
		Pit8					
	D6	Pit2					
		Pit6					
	D7	Pit2					
		Pit4					
	D8	Pit4					
		Pit6					
		Pit9					
	E6	Pit3					

第２表　掘立柱建物一覧表（１）

遺構番号	グリッド	ピット番号	建物時期	規模	主軸	方位	備考
SB49	C6	Pit9	平安	桁行7.9m 梁行5.44m 建物面積43.76㎡	南北	N15° E	10世紀中葉
	C7	Pit6					
		Pit10					
	D5	Pit3					
	D6	Pit1					
		Pit11					
		Pit16					
	D7	Pit8					
		Pit12					
		SK30					
	E6	Pit7					
		Pit11					
		Pit13					
	E7	Pit3					
		Pit4					
	E8	Pit9					
SB50	F5	Pit3	平安	桁行8.5m 梁行4.6m 建物面積40.61㎡	南北	N11° E	10世紀後葉
		Pit5					
	F6	Pit5					
		Pit6					
	F7	Pit1					
	G5	Pit2					
	G6	Pit1					
		Pit2					
	G7	Pit4					
		Pit7					
	H5	Pit1					
SB51	G3	Pit1	平安	桁行6.9m以上 梁行2.1m以上	南北	N15° E	12世紀後半
	G4	Pit2					
		Pit3					
	G5	Pit3					
		Pit5					

第３表　掘立柱建物一覧表（２）

第Ⅳ章　遺　物

今回の発掘調査による遺物の出土量は整理をしてコンテナバット57箱で、重量では122.25kgになる。また遺物は平安時代の土師器がおもで、緑釉陶器・灰釉陶器・製塩土器などがある。

以下に、出土遺物の特徴を主に遺構ごとに記述する。遺物の個々の詳細については遺物観察表（第４～11表）を参照されたい。遺物は第19～30図に掲載した。

掘立柱建物ＳＢ47出土遺物（１～８）　１・２は土師器杯、３は土師器台付皿か椀、４は土師器甕、５・６は灰釉陶器椀、７は志摩式製塩土器、８は墨書土器である。８の墨書は２文字であろう。文字は判読できない。

遺物の時期は、灰釉陶器椀の黒笹90号窯式から折戸53号窯式にかけてのものとみられ、９世紀末葉から10世紀前半である。

掘立柱建物ＳＢ49出土遺物（９～52）　９～32は土師器杯、33・34は、土師器鉢、35は墨書土器、36～41は土師器甕、42は緑釉陶器椀、43・44は灰釉陶器椀、45・46は灰釉陶器皿、47～52は志摩式製塩土器である。35の墨書は２文字であろう。文字は判読できない。42は僅かであるが花文及び輪花が残る。47～49の底部に砂粒の痕跡を留める。52は底部にモミガラの痕跡を留める。

遺物の時期は、灰釉陶器椀の折戸53号窯式のものとみられ、10世紀中葉である。

掘立柱建物ＳＢ46出土遺物（53～56）　53は土師器甕、54・55は灰釉陶器椀、56は灰釉陶器壺か瓶である。53は、口縁部が外方に伸びるものである。54は、口縁部、55は底部である。56は底部のみのため壺か瓶か判断がつかない。

遺物の時期は、灰釉陶器椀から東山72号窯式新段階のものとみられ、10世紀末である。

掘立柱建物ＳＢ50出土遺物（57）　57は鉄製品の刀子である。ほかに掘立柱建物ＳＢ50の時期を考えられるよう遺物は、出土していない。

掘立柱建物ＳＢ51出土遺物（58～60）　58は土師器皿、59は無釉陶器（山茶椀）、60は須恵器甕である。

遺物の時期は、山茶椀が渥美４型式のもので、12世紀前半である。60は奈良時代のものでピットへの混じりこみとみられる。

掘立柱建物ＳＢ48出土遺物（61～72）　61・62は土師器皿、63～68は土師器杯、69・70は土師器甕、71は土錘、72は軒平瓦である。69・70は口縁部が内面に折り返される。72は鋸歯文と蓮華文で装飾される。

遺物の時期は、土師器杯・甕から10世紀後半とみられる。瓦は、柱穴の根石替わりに使用していた。

土坑ＳＫ35出土遺物（73～75）　73は土師器杯、74・75は土師器甕である。74の口縁部はつまみあげられ、74は折り返される。遺物の時期は土師器甕から９世紀後半から10世紀前半のものとみられる。

土坑ＳＫ38出土遺物（76～85）　76は土師器丸底壺、77～82は土師器杯、83は志摩式製塩土器、84は灰釉陶器椀、85は灰釉陶器皿である。76は６世紀代のもの、83は、小片のため底部の調整は不明である。84は東山72号窯式新段階のもの。遺物の時期は、灰釉陶器から10世紀後半のものとみられる。

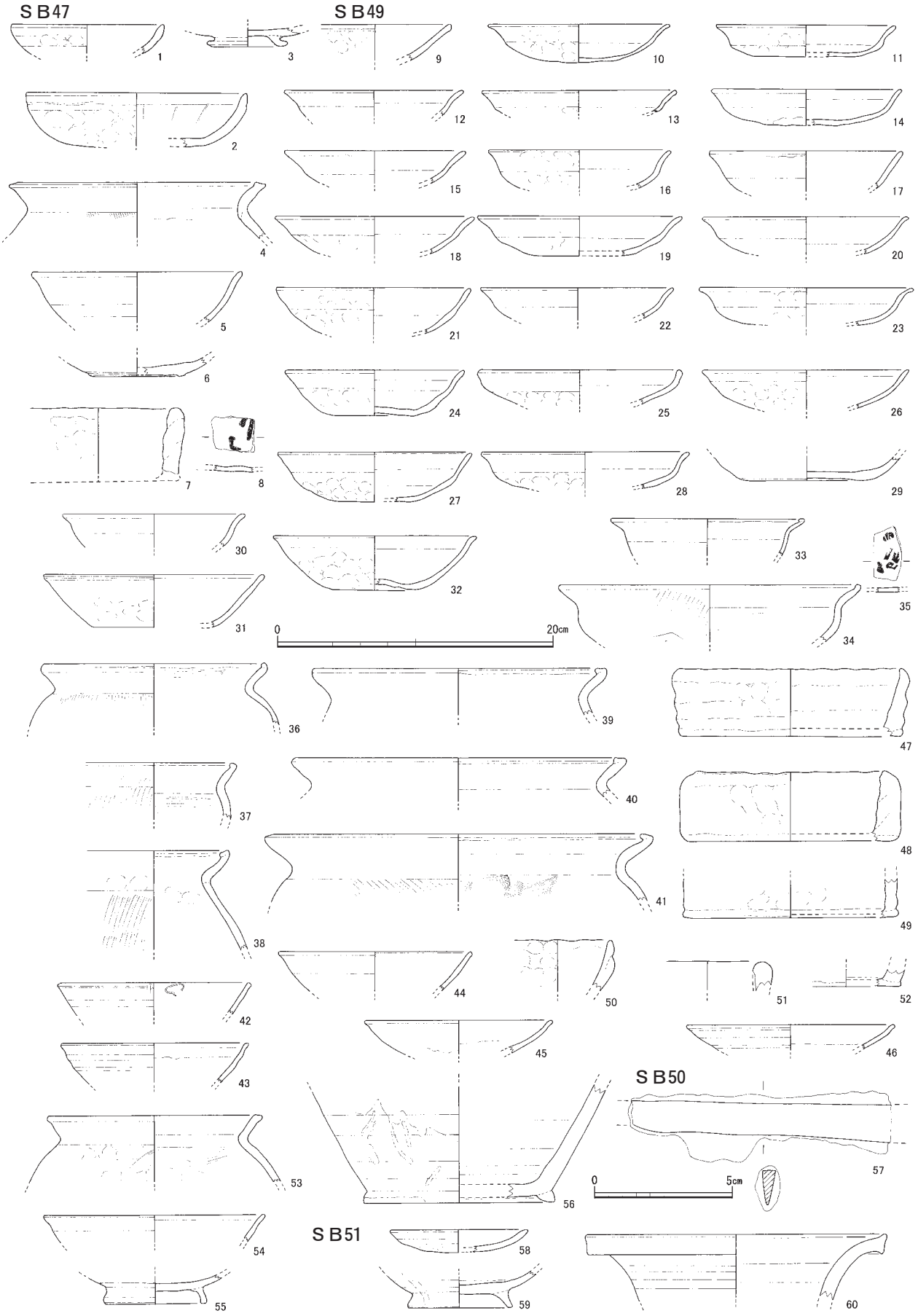
土坑ＳＫ39出土遺物（86・87）　86は土師器皿、87は土錘である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

土坑ＳＫ42出土遺物（89～101）　89～96は土師器杯、97～99は土師器甕、100は志摩式製塩土器、101は灰釉陶器椀である。土師器甕は口縁部が上方につまみあげられるもの。志摩式製塩土器は口縁部の破片、灰釉陶器椀は黒笹90号窯式のもの、遺物の時期は、灰釉陶器から９世紀後半とみられる。

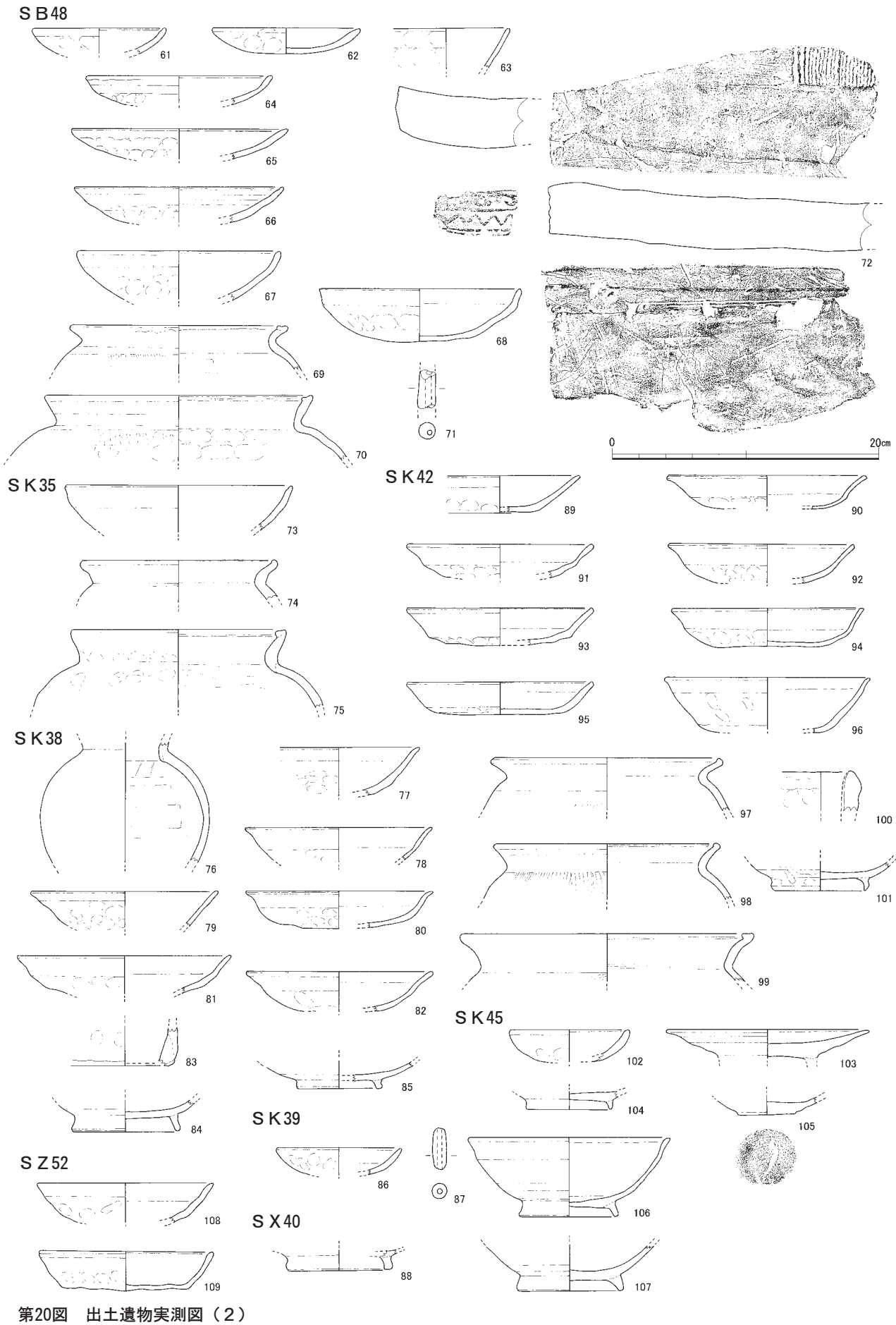
土坑ＳＫ45出土遺物（102～107）　102は土師器皿、103はロクロ土師器皿、104～106は土師器椀、107は灰釉陶器椀である。灰釉陶器椀は東山72号窯式新段階のもの。遺物の時期は灰釉陶器から10世紀後半のものとみられる。

火葬墓ＳＸ40出土遺物（88）　88は土師器椀である。出土したのは高台部分のみである。土師器椀であろうか。遺物の時期は10世紀中葉～後葉にかけてのものである。

土器溜ＳＺ52出土遺物（108・109）　108・109は土師



第19図　出土遺物実測図（１）

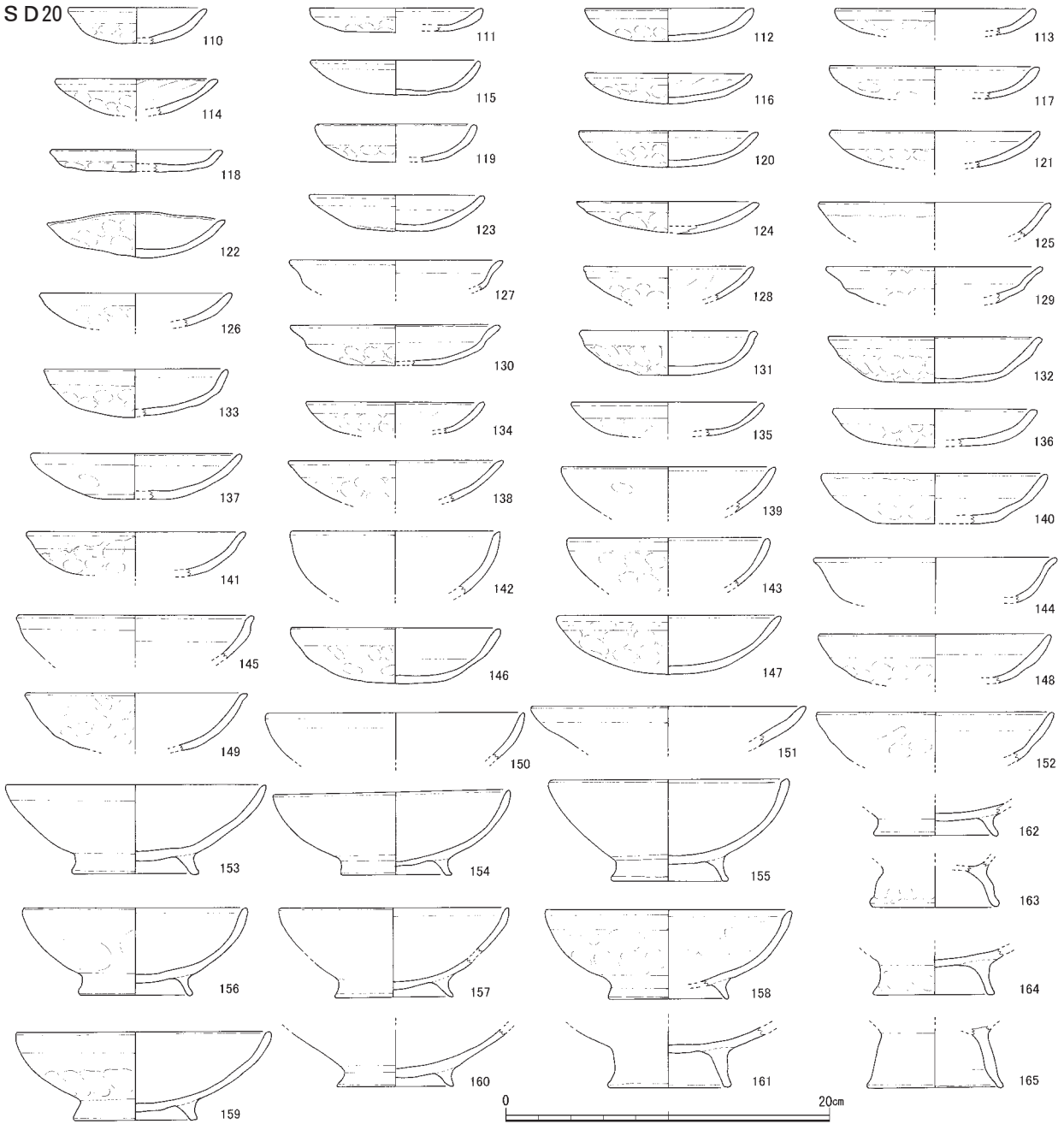


第20図　出土遺物実測図（２）

器杯である。遺物の時期は10世紀前半のもの。

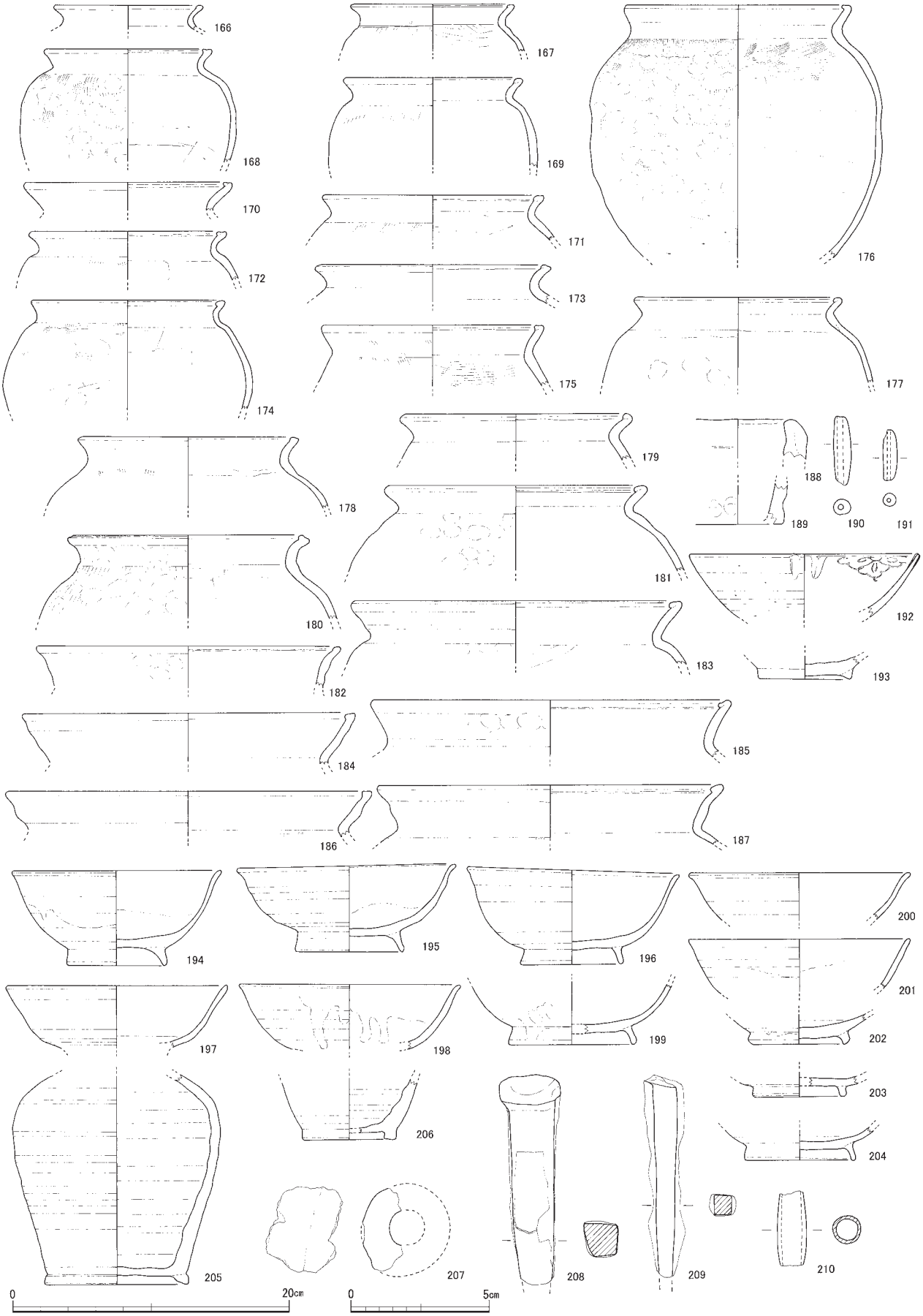
区画溝ＳＤ20出土遺物（110～221）　110～124は土師器皿、125～152は土師器杯、153～165は土師器椀、166～187は土師器甕、188・189は志摩式製塩土器、190・191は土錘、192・193は緑釉陶器椀、194～204は灰釉陶器椀、205は灰釉陶器瓶、206は灰釉陶器壺か瓶、207は鞴羽口、208・209は鉄製品釘、210は筒形青銅製品、211から220は平瓦、221は軒平瓦である。土師器甕は、口縁部を平坦にするもの、つまみあげられるもの、折り返されるものに分かれる。188は口縁部、189は底部の小片である。192は、陰刻花文と輪花を留める。非常に優品である。平瓦・軒平瓦は、内外面に縄目と布目痕が残る。奈良時代後期のもの。遺物の時期は９世紀後半から10世紀後半までのもので区画溝ＳＤ20の存続時期を示しているとみられる。

区画溝ＳＤ21出土遺物（222～255）　遺物は、上層、中層、下層に分けて掲載している。上層遺物は222～233である。222～224は土師器椀、225～227は土師器甕、228は志摩式製塩土器、229は灰釉陶器椀、



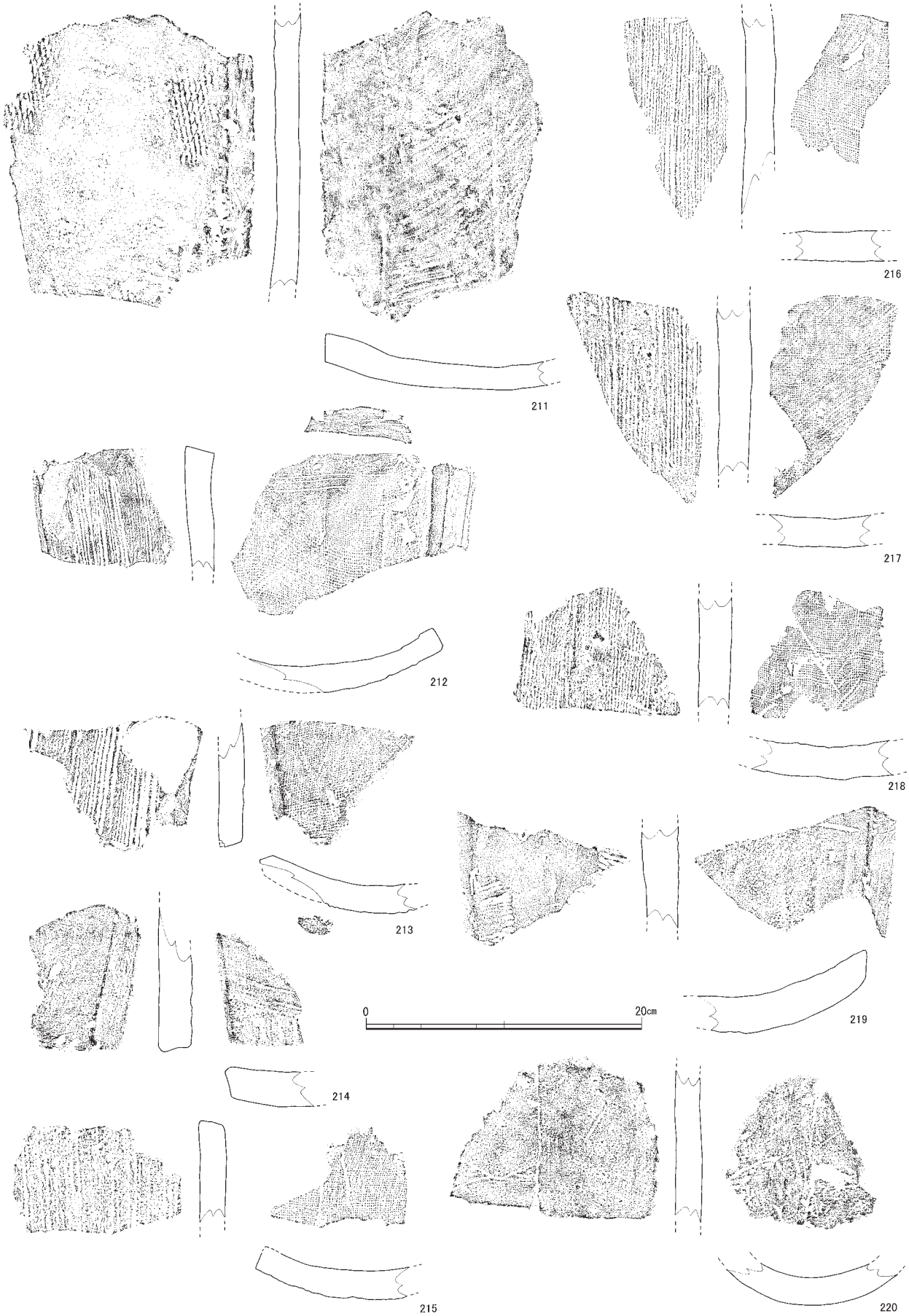
第21図　出土遺物実測図（３）

ＳＤ20



第22図　出土遺物実測図（４）

ＳＤ20



第23図　出土遺物実測図（５）

230は灰釉陶器瓶、231は軒平瓦、232・233は平瓦である。中層遺物は234～239である。234は土師器甕、235は墨書土器、236・237は灰釉陶器椀、238は山茶椀、239は平瓦である。下層遺物は240～255である。240～245は土師器杯、246～248は土師器椀、249は土師器甕、250～254は灰釉陶器椀、255は平瓦である。土師器甕は、口縁部を平坦にするもの、つまみあげられるもの、折り返されるものに分かれる。灰釉陶器は黒笹90号窯式から東山72号窯式まで出土している。228は、口縁部の破片である。体部外面にモミガラ痕跡を留める。小型のものであろうか。235の墨書は２文字であろうか。破片のため判読できない。232・233・239・255の瓦は、内外面に縄目と布目痕が残る。奈良時代後期のもの。

中層遺物に山茶椀が含まれているため、13世紀初頭頃まで区画溝ＳＤ21は機能していたとみられる。

Ａ５Pit１出土遺物（256） 256は緑釉陶器椀である。猿投窯のもので９世紀末葉を前後するものである。

B10Pit４出土遺物（257・258） 257・258は土師器杯である。258は口縁部に油煙の痕跡を留める。遺物の時期は、10世紀代とみられる。

第24図　出土遺物実測図（６）

Ｃ５Pit２出土遺物（259） 259は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｃ６Pit８出土遺物（260） 260は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｃ７Pit７出土遺物（261・262） 261・262は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｃ７Pit８出土遺物（263） 263は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｃ８Pit９出土遺物（264～266） 264・265は土師器杯、266は灰釉陶器椀である。266は底部、黒笹90号窯式から折戸53号窯式のもの。遺物の時期は、灰釉陶器から10世紀前半とみられる。

Ｄ３Pit５出土遺物（267） 267は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｄ３Pit７出土遺物（268） 268は土師器甕である。口縁部が平坦面を持つように成形される。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｄ６Pit４出土遺物（269・270） 269は土師器杯、270は土師器甕である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｄ６Pit８出土遺物（271） 271は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｄ６Pit９出土遺物（272） 272は土師器甕である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｄ６Pit14出土遺物（273） 273は土師器甕である。口縁部が上方に丸みを帯びて立ち上がる。遺物の時期は11世紀前半とみられる。

Ｄ７Pit10出土遺物（274・275） 274・275は土師器甕である。口縁部が内側に向かって尖り気味にまとめられる。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｄ７Pit12出土遺物（276～279） 276・277は土師器杯、278は墨書土器、279は土師器甕である。278は２文字であろうか。破片のため判読できない。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｄ８Pit７出土遺物（280） 280は土師器杯である。口縁部が外反し、内側に尖り気味にまとまる。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｄ９Pit９出土遺物（281） 281は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｅ２Pit１出土遺物（282） 282は灰釉陶器椀である。東山72号窯式新段階のもの。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｅ２Pit３出土遺物（283～287） 283は土師器皿、284は黒色土器椀、285・286は土師器甕、287は軒平瓦である。284は黒色土器Ｂ類、軒平瓦は奈良時代後期後半のもの。遺物の時期は、10世紀後半から11世紀前半のものとみられる。

Ｅ３Pit１出土遺物（288） 288は灰釉陶器皿である。東山72号窯式のもので、遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

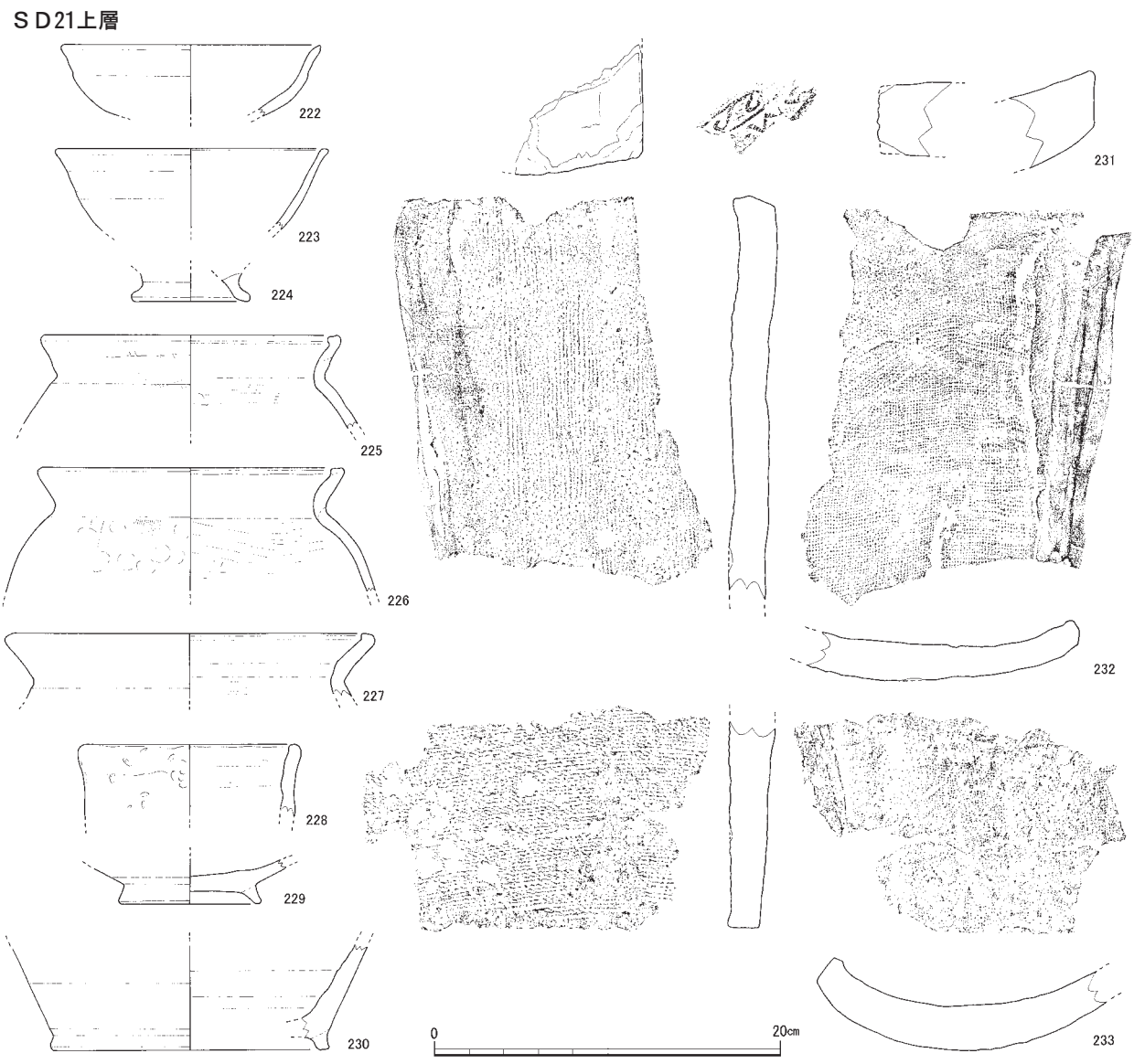
Ｅ３Pit３出土遺物（289） 289は土師器甕である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｅ３Pit８出土遺物（290・291） 290・291は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｅ３Pit11出土遺物（292～296） 292～294は土師器杯、295は墨書土器、296は志摩式製塩土器である。295は１文字であろう。破片のため判読できない。296は底部砂粒である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｅ４Pit１出土遺物（297） 297は灰釉陶器椀である。黒笹90号窯式から折戸53号窯式のもので、遺物の時期は10世紀前半のものとみられる。

Ｅ４Pit２出土遺物（298～300） 298は土師器杯、299・300は志摩式製塩土器である。299は口縁部の小片、300は底部が砂粒で調整される。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。



第25図　出土遺物実測図（７）

Ｅ４Pit５出土遺物（301～307） 301～305は土師器杯、306は土師器鍋、307は志摩式製塩土器である。306は鍋の把手部分、307は、底部にモミガラ痕跡を留める。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｅ４Pit７出土遺物（308～311） 308～311は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｅ４Pit８出土遺物（312） 312は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｅ５Pit２出土遺物（313～325） 313～320は土師器杯、321～325は志摩式製塩土器である。321・322・324は、底部が砂粒によって調整される。325は、底部が普通の粘土板によるものである。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｅ６Pit５出土遺物（326・327） 326は土師器杯、327は灰釉陶器椀である。327は東山72号窯式のもので10世紀後半のもの。

Ｅ６Pit12出土遺物（328・329） 328は土師器皿、329は土師器竈である。遺物の時期は、11世紀前半のものとみられる。

Ｅ５Pit５出土遺物（337） 337は鉄製品釘である。

Ｅ７Pit６出土遺物（330） 330は土師器杯である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

Ｅ８Pit７出土遺物（331～335） 331～334は土師器杯、335は土師器甕である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

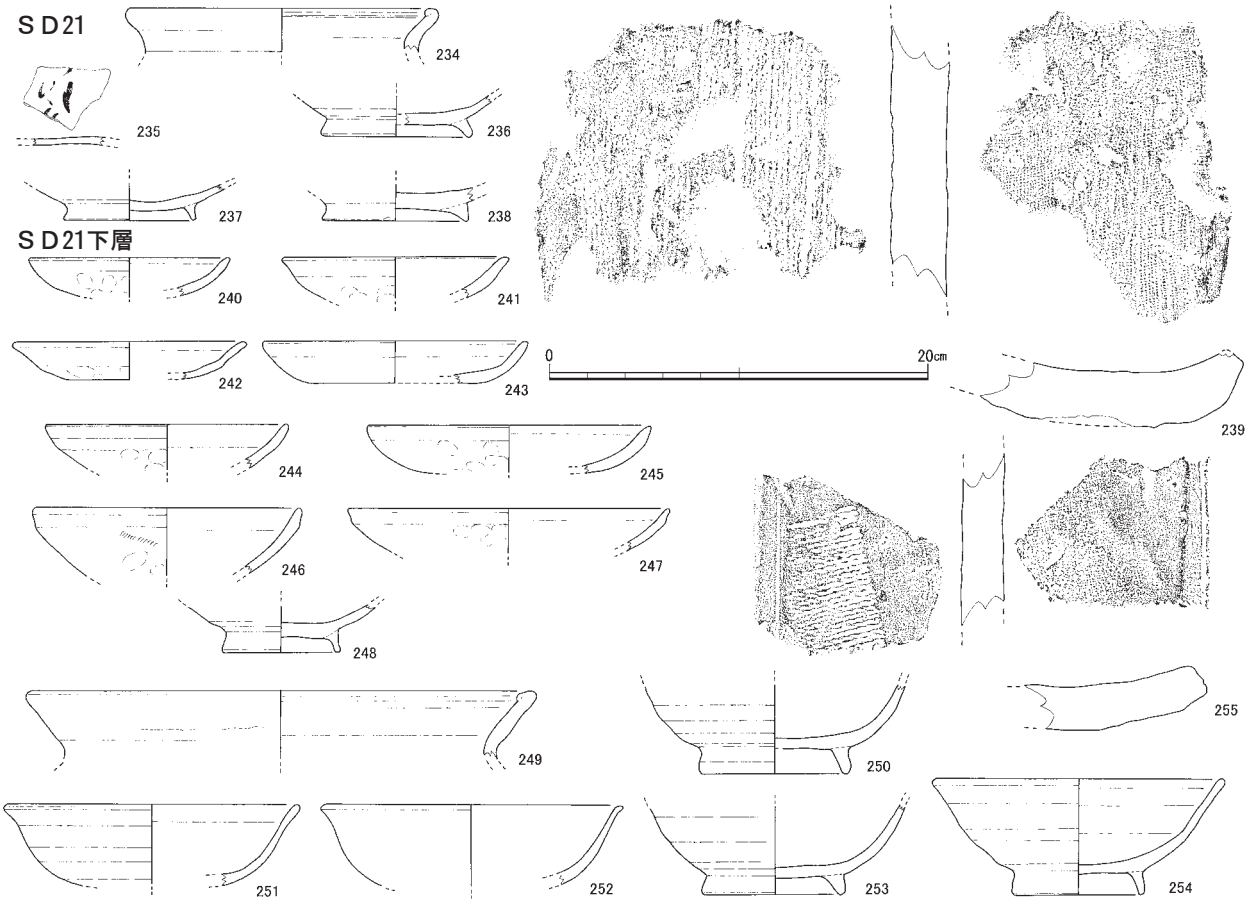
Ｆ６Pit３出土遺物（336） 336は土師器椀である。椀としたが台付皿の可能性もある。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

Ｆ６Pit11出土遺物（338） 338は土師器甕である。遺物の時期は、10世紀前半のものとみられる。

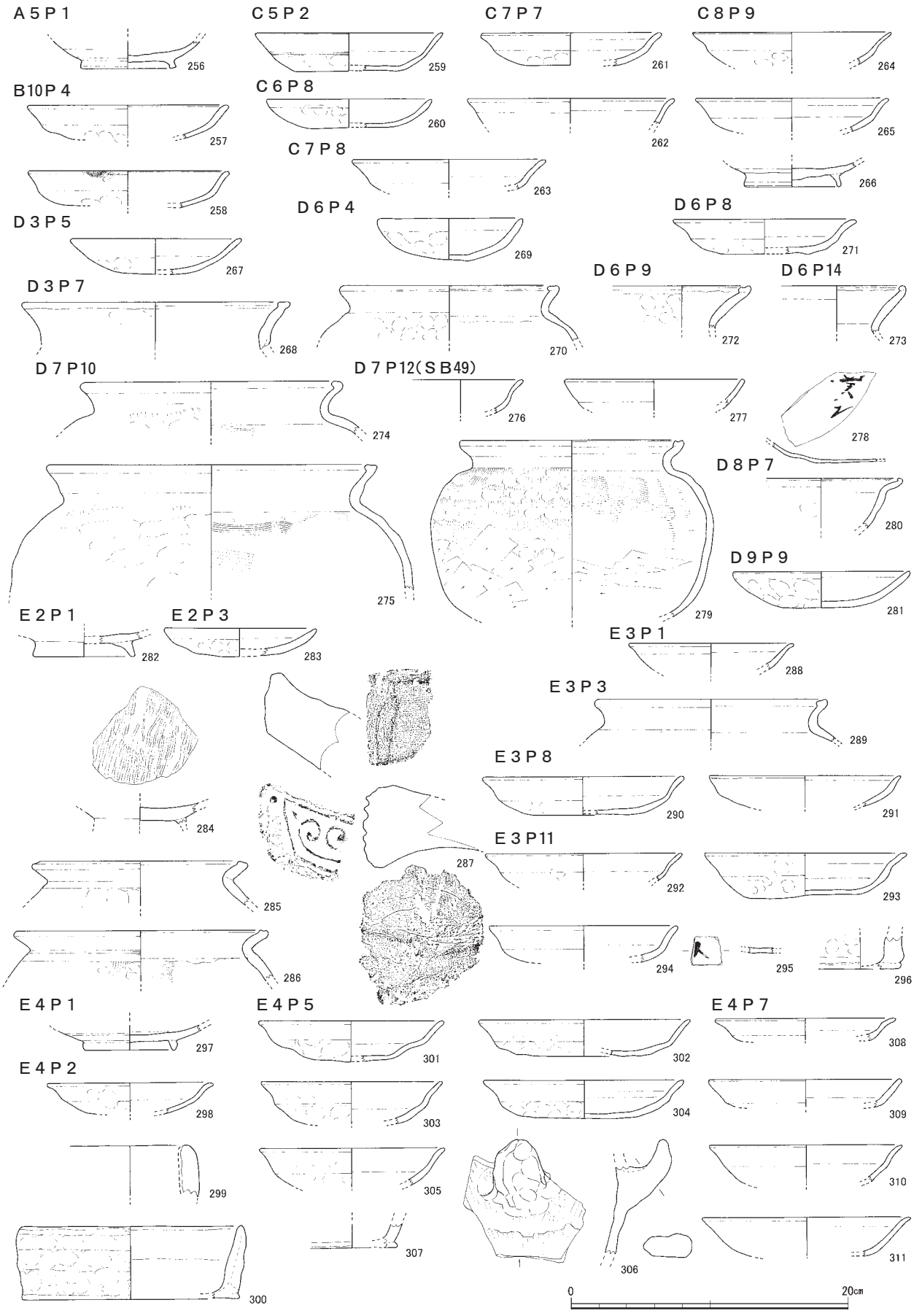
Ｆ11Pit２出土遺物（339） 339は平瓦である。奈良時代後期後半のもの内外面に縄目と布目の痕跡を留める。

Ｇ６Pit４出土遺物（340～345） 340～342は土師器杯、343～345は土師器椀である。遺物の時期は、11世紀前半のものとみられる。

溝ＳＤ９出土遺物（346～352） 346は土師器皿、347は土師器杯、348・349は土師器甕、350は志摩式製



第26図　出土遺物実測図（８）



第27図　出土遺物実測図（９）

塩土器、351は灰釉陶器皿、352は灰釉陶器椀である。351は黒笹14から90号窯式のもの、352は黒笹90号窯式から折戸53号窯式のものである。遺物の時期は幅広い、中世の溝であろう。

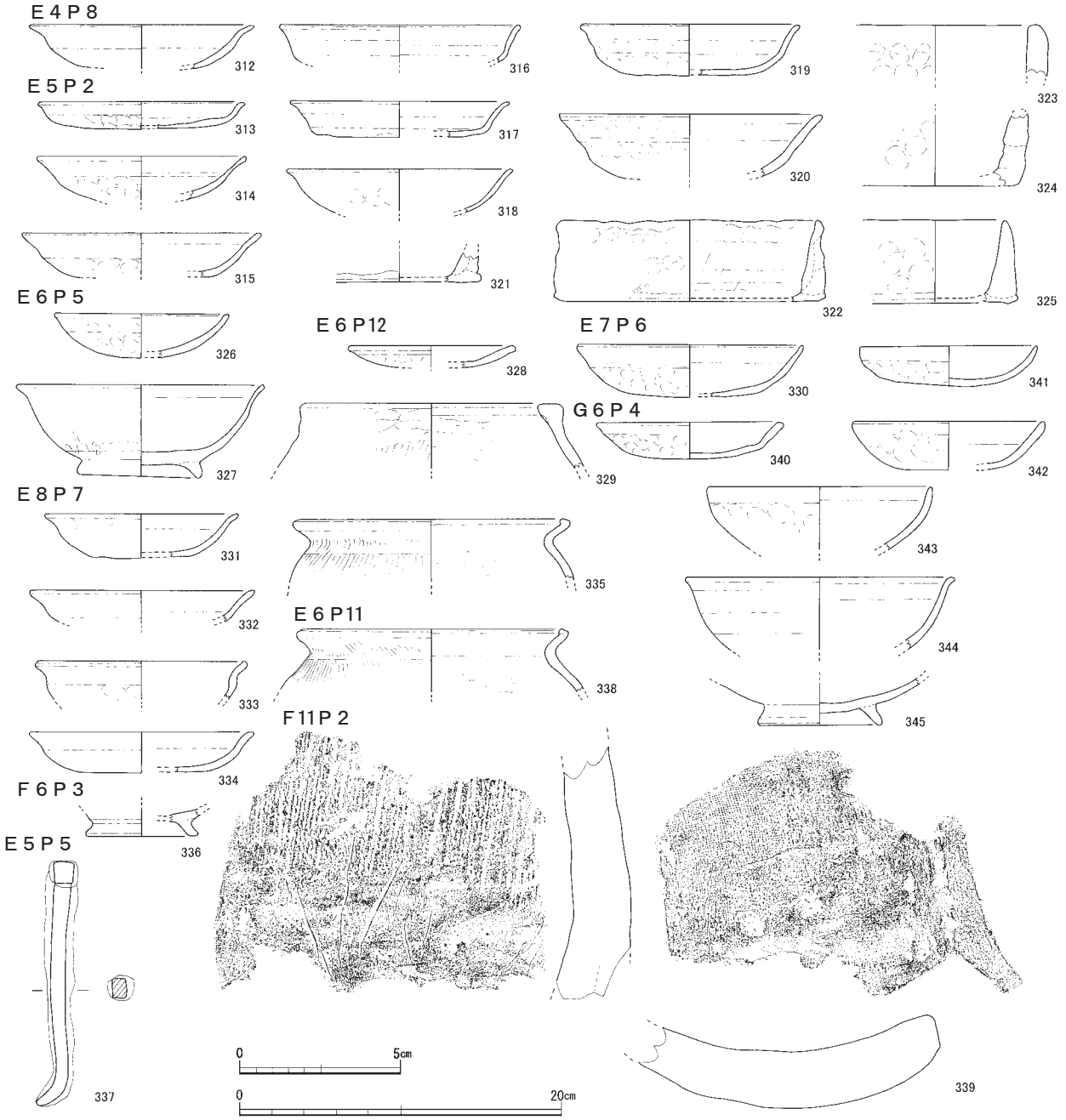
溝ＳＤ10出土遺物（353～357） 353は土師器椀、354は土師器甕、355は土錘、356は灰釉陶器椀、357は磨製石斧である。357は、破片であるが弥生時代のもの。356は黒笹90号窯式のもの。溝ＳＤ９と同様に中世の溝とみられる。

溝ＳＤ15出土遺物（358～360） 358・359土師器皿、360はロクロ土師器椀である。

溝ＳＤ17出土遺物（361～363） 361は土師器杯、362は土師器竈、363は灰釉陶器椀である。363は折戸53号窯式のもの。遺物の時期は10世紀前半を示すものが多い。

溝ＳＤ19出土遺物（364～368） 364は弥生土器細頸壺、365は土師器杯、366は灰釉陶器椀、367は志摩式製塩土器、368は丸瓦である。364は、弥生時代中期後半のもの。366は黒笹90号窯式から折戸53号窯式のもの。367は、底部小片であるが、底部外面の調整は不明。丸瓦は奈良時代後期後半のもの。

溝ＳＤ27出土遺物（369～379） 369・370は土師器



第28図　出土遺物実測図（10）

皿、371～374は土師器杯、375～378は土師器椀、379は土師器甕、380は灰釉陶器椀である。380は東山72号窯式新段階のもの。遺物の時期は、10世紀後半から11世紀前半のものとみられる。

溝ＳＤ29出土遺物（381・382）　381は土師器杯、382は灰釉陶器壺か瓶である。遺物の時期は、10世紀後半のものとみられる。

攪乱溝出土遺物（383）　383は青磁椀である。

包含層出土遺物（384～443）　384～404は土師器杯・皿、405は土師器椀、406～415は土師器甕、416・417は土錘、418～421は志摩式製塩土器、422は墨書土器、423は緑釉陶器皿、424・425は緑釉陶器椀、426は緑釉陶器取手付瓶、427～433は灰釉陶器椀、434・435は鉄製品釘、436は軒丸瓦、437は須恵器硯、438は土師器甕、439は山茶椀、440～442は土師器鍋、443は陶器鉢である。

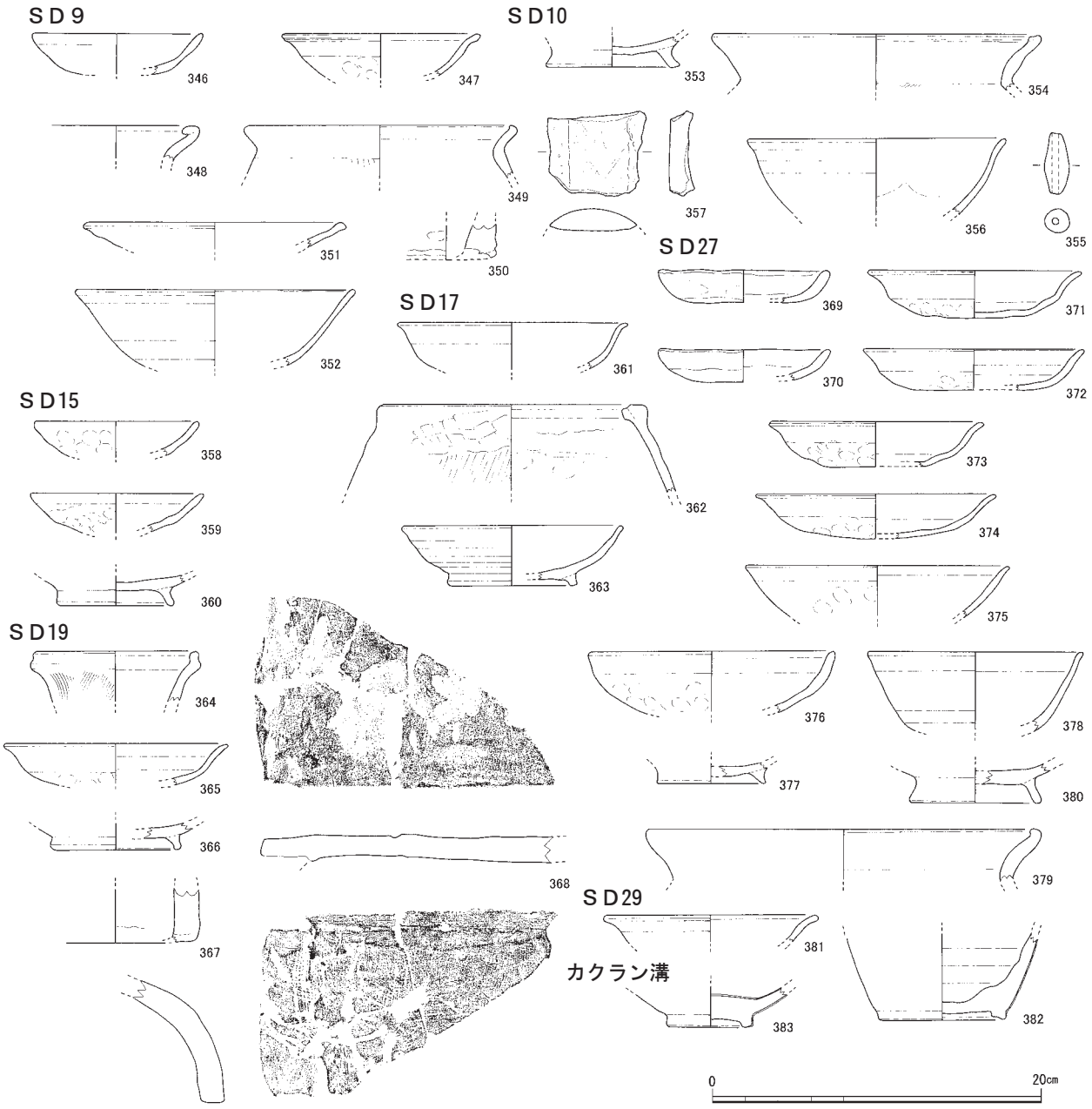
包含層出土遺物は10世紀前半のものから山茶椀及び南伊勢系土師器鍋までで16世紀前半までのものを含んでいる。

［参考文献］

愛知県「愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系」（愛知県史編纂委員会　2007年）

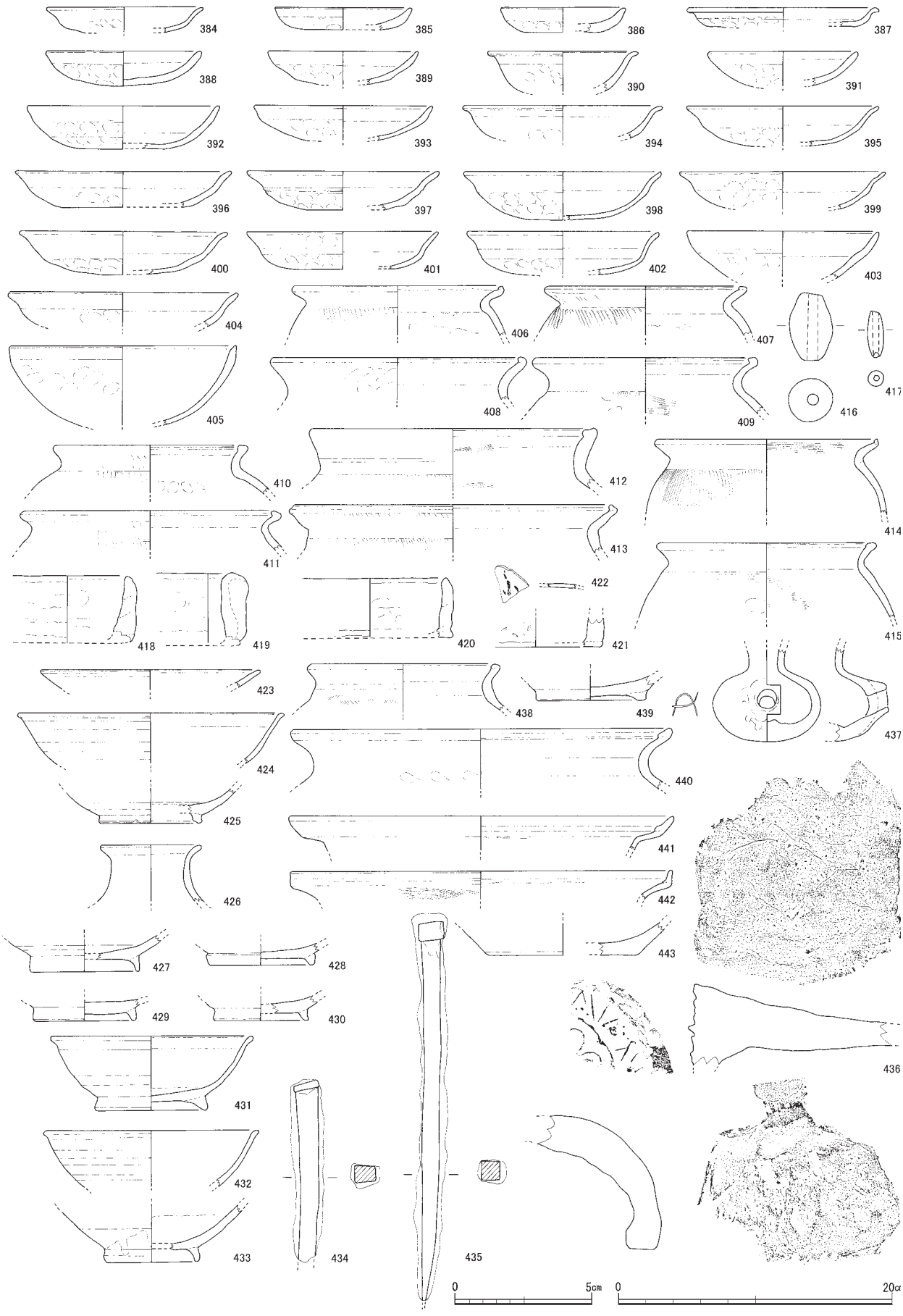
斎宮歴史博物館「斎宮跡発掘調査報告Ⅰ」（2001年）

山本雅靖「志摩式製塩土器考」『考古学論集』Ⅲ（1990年）



第29図　出土遺物実測図（11）

包含層



第30図　出土遺物実測図（12）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	06308	土師器 皿	D7 Pit11	11.0	—	—	ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12残	掘立柱建物ＳＢ47
2	07003	土師器 杯	D6 Pit7	16.0	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/4	口縁部 3/12残	掘立柱建物ＳＢ47
3	06901	土師器 台付皿？ 台付椀？	C7 Pit1	—	—	高台径 5.0	ナデ→貼付後ヨコナデ→ナデ	密(～1.0mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	高台部 4/12残	掘立柱建物ＳＢ47
4	07006	土師器 甕	D7 Pit11	17.2	—	頸部径 16.0	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR6/3,灰黄褐10YR4/2	口縁・頸部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ47
5	07001	灰釉陶器 椀	C6 Pit7	15.0	—	—	ロクロナデ	密(～1.0mmの砂粒含む)	良	内外面共：灰白5Y7/1	口縁部 2/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式・掘立柱建物ＳＢ47
6	06907	灰釉陶器 椀	C6 Pit5	—	—	高台径 7.0	ロクロナデ→ロクロナデ→ヨコナデ→ロクロナデ	密(～1.0mmの砂粒含む)	良	内外面共：灰白7.5Y7/1	高台部 4/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式・掘立柱建物ＳＢ47
7	07004	製塩土器	C6 Pit7	—	—	—	オサエ・ナデ→オサエ・ナデ	密(～4mmの砂粒多く含む)	—	外：にぶい橙5YR6/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	小片	掘立柱建物ＳＢ47
8	07002	土師器 杯？	C6 Pit7	—	—	—	ナデ→ナデ	密(微砂粒含む)	—	内外面共：橙7.5YR7/6	—	墨書土器・掘立柱建物ＳＢ47
9	06304	土師器 杯	D7 Pit8	—	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密	—	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 小片	掘立柱建物ＳＢ49
10	05203	土師器 杯	E6 Pit13	13.0	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(赤い粒を含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
11	06502	土師器 杯	E6 Pit7	13.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(～1mmの砂粒多く含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
12	05606	土師器 杯	E8 Pit9	12.9	—	—	ヨコナデ→工具ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
13	06303	土師器 杯	D7 Pit8	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	密	—	内外面共：にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
14	06005	土師器 杯	E6 Pit11	13.8	2.6	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12以下残	掘立柱建物ＳＢ49
15	05108	土師器 杯	C6 Pit9	13.1	—	—	ヨコナデ→ナデ・指圧痕	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 3/12残	掘立柱建物ＳＢ49
16	05902	土師器 杯	E6 Pit11	13.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母含む)	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 1.5/12残	掘立柱建物ＳＢ49
17	00902	土師器 杯	C7 SK30	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密(雲母含む)	—	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 1/12残	
18	05109	土師器 杯	C6 Pit9	14.5	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・指圧痕	密	—	内外面共：淡橙5YR8/4	口縁部 3/12残	掘立柱建物ＳＢ49
19	05107	土師器 杯	D6 Pit1	14.8	2.9	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・指圧痕	密	—	内外面共：淡橙5YR8/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
20	06207	土師器 杯	E6 Pit11	14.9	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：灰褐7.5YR6/2	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
21	05205	土師器 杯	E6 Pit13	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(赤い粒を含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
22	05608	土師器 杯	E8 Pit9	13.9	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
23	05204	土師器 杯	E6 Pit13	15.4	2.7	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(赤い粒を含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
24	05702	土師器 杯	E6 Pit11	12.8	3.1	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4と褐灰10YR5/1	口縁部 1.5/12残	掘立柱建物ＳＢ49
25	06004	土師器 杯	E6 Pit11	14.6	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
26	06501	土師器 杯	E6 Pit7	15.0	—	—	ナデ？→ヨコナデ→オサエ・ナデ？	やや密(～0.5mmの砂粒を含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
27	05807	土師器 杯	E6 Pit11	13.9	3.5	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～１.5mmの砂粒と雲母含む)	—	外：橙5YR7/8,浅黄橙10YR8/3 内：橙5YR6/8	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
28	05903	土師器 杯	E6 Pit11	15.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母含む)	—	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
29	05602	土師器 鉢	C7 Pit6	—	—	底径 8.3	ヘラケズリ→ヨコナデ→ヘラケズリ→オサエ・ヘラケズリ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	底部 3/12残	56－01と同一個体・掘立柱建物ＳＢ49
30	05607	土師器 杯	E8 Pit9	13.0	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
31	05901	土師器 杯	E6 Pit11	15.9	3.8	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/8	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
32	05701	土師器 椀	E6 Pit11	14.7	3.5	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
33	06301	土師器 甕	D7 Pit8	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	やや密(～0.5mm砂粒含む)	—	外：灰褐7.5YR5/2 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
34	05601	土師器 鉢	C7 Pit6	21.6	—	頸部径 19.2	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
35	05105	土師器 杯？	D6 Pit1	—	—	—	ナデ→ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	—	墨書土器・掘立柱建物ＳＢ49
36	05206	土師器 甕	E6 Pit13	16.0	—	—	ナデ？→ハケメ？→ヨコナデ→沈線？→ハケメ	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	外：灰黄褐10YR5/2 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ49
37	00906	土師器 甕	C7 SK30	—	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(雲母少し含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/4	小片	掘立柱建物ＳＢ49
38	06507	土師器 甕	E6 Pit7	—	—	—	ユビオサエ・ナデ→ヨコナデ→太いハケメ	やや密	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	掘立柱建物ＳＢ49
39	05806	土師器 甕	E6 Pit11	20.0	—	—	ナデ→ヨコナデ	密(細砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残以下	掘立柱建物ＳＢ49
40	05904	土師器 甕	E6 Pit11	23.8	—	—	ヨコナデ	密(雲母含む)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
41	07305	土師器 甕	D7 Pit8	27.0	—	—	ハケメ→ヨコナデ→ハケメ	密	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
42	03303	緑釉陶器 椀	E6 Pit13	13.6	—	—	？→ロクロナデ→施釉	密(砂粒を殆ど含まない)	良	素地：灰白5Y7/1 釉：オリーブ灰10Y6/2に近い	口縁部 1/12残	輪花・花文・掘立柱建物SB49
43	05906	灰釉陶器 椀	E6 Pit11	13.4	—	—	ロクロナデ	密	良	内外面共：灰白5Y7/1	口縁部 1.5/12残	折戸53号窯式・掘立柱建物ＳＢ49
44	06302	灰釉陶器 椀	D7 Pit8	14.0	—	—	ロクロナデ	密	良	内外面共：灰白5Y7/2	口縁部 1/12残	黒笹90号窯式・掘立柱建物ＳＢ49
45	05905	灰釉陶器 皿	E6 Pit11	13.2	—	—	ロクロナデ	密	良	素地：灰白5Y8/1 釉：灰オリ-ブ7.5Y6/2	口縁部 2/12残	黒笹90号窯式・掘立柱建物ＳＢ49
46	06705	灰釉陶器 皿	E7 Pit4	14.8	—	—	ロクロナデ→施釉	密	良	素地：灰白5Y7/1 釉：灰白5Y7/2	口縁部 2/12残	黒笹14号窯式・掘立柱建物ＳＢ49
47	06504	製塩土器	E6 Pit7	16.0	4.9	底径 16.0	オサエ・ナデ	粗(～4mmの小石含む)	—	内外面共：にぶい赤褐5YR5/4	口縁・底部 1/12残	底部砂粒・掘立柱建物ＳＢ49
48	06503	製塩土器	E6 Pit7	13.4	—	底径 14.4	オサエ・ナデ	粗(～2mmの砂粒多く含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部2/12残 底部1/12残	底部砂粒・掘立柱建物ＳＢ49
49	05907	製塩土器	E6 Pit11	15.4	—	—	オサエ・ナデ→オサエ・ナデ	やや粗(6mm大の石と～2mmの小石と砂粒多含む)	—	外：橙5YR6/6 内：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	底部砂粒・掘立柱建物ＳＢ49
50	06505	製塩土器	E6 Pit7	—	—	—	ユビオサエ・ナデ	粗(～3mmの砂粒多く含む)	—	内外面共：橙2.5YR6/6	口縁部 小片	掘立柱建物ＳＢ49
51	00905	製塩土器	C7 SK30	—	—	—	ナデ	やや粗(細砂粒少し含む)	—	内外面共：にぶい橙5YR7/4	小片	掘立柱建物ＳＢ49
52	06506	製塩土器	E6 Pit7	—	—	—	ナデ→ナデ	粗(～5mmの小石含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	底部 小片	底部モミガラ痕・掘立柱建物ＳＢ49
53	06905	土師器 甕	G8 Pit2	15.0	—	頸部径 13.6	工具ナデ→ヨコナデ→工具ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12残 頸部3/12残	掘立柱建物ＳＢ46
54	06801	灰釉陶器 椀	F7 Pit3	15.8	—	—	ロクロナデ→施釉	密(1mm大の砂粒ごく少)	良	素地：灰白5Y7/1 釉：灰白5Y7/2	口縁部 1/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式・掘立柱建物ＳＢ46
55	05609	灰釉陶器 椀	G7 Pit9	—	—	高台径 7.2	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付後ヨコナデ→糸切痕	密(微砂粒含む)	—	内外面共：灰白N7/0	口縁部 2/12残	東山72号窯式新・掘立柱建物ＳＢ46
56	06802	灰釉陶器 壺or瓶	F7 Pit3	13.7	—	—	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→施釉	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	素地：灰白5Y7/1 釉：浅黄5Y7/3	口縁部 2/12残	高台部研磨・掘立柱建物ＳＢ46

第４表　出土遺物観察表（１）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
57	00101	刀子	G6 pit2	9.5	2.4	1.3	—	—	—	—	—	重さ35.58g・掘立柱建物ＳＢ50
58	06804	土師器 皿	G4 Pit3	9.9	—	—	ナデ→ヨコナデ？→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ51
59	06803	陶器 山茶椀	G3 Pit1	—	—	高台径 7.4	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕→施釉	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	素地：灰白5Y7/1 釉：灰白5Y8/1	高台部 11/12残	渥美４型式・掘立柱建物ＳＢ51
60	06805	須恵器 甕	G5 Pit5	21.6	—	—	ロクロナデ	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	外：ｵﾘｰﾌﾞ黒5Y3/1,灰5Y6/1 内：灰白5Y7/1	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ51
61	06902	土師器 皿	D6 Pit2	9.8	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ48
62	05605	土師器 皿	C8 Pit8	10.7	1.9	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4,にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	掘立柱建物ＳＢ48
63	06903	土師器 椀	D7 Pit2	—	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.0mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 小片	掘立柱建物ＳＢ48
64	06904	土師器 杯	D7 Pit2	13.8	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(微砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ48
65	06602	土師器 杯	D8 Pit4	16.1	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：橙7.5YR7/6に近い 内：にぶい橙7.5YR7/4に近い	口縁部 5/12残	掘立柱建物ＳＢ48
66	07204	土師器 杯	D8 Pit4	15.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(細砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/6	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ48
67	06906	土師器 椀	C6 Pit4	15.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～2mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	掘立柱建物ＳＢ48
68	06601	土師器 杯	D8 Pit4	15.0	4.1	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 6/12残	掘立柱建物ＳＢ48
69	06407	土師器 甕	D7 Pit2	16.0	—	—	工具ナデ？→ヨコナデ→ハケメ	やや密(～1mmの砂粒少し含む)	—	内外面共：褐灰7.5YR4/1	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ48
70	06908	土師器 甕	D6 Pit6	19.8	—	頸部径 18.2	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	外：浅黄2.5Y7/4 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部2/12残 頸部1/12残	掘立柱建物ＳＢ48
71	06401	土錘	D7 Pit2	2.9	1.3	1.3	—	やや粗(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白2.5Y8/1	—	重さ5.42ｇ・掘立柱建物ＳＢ48
72	05301	軒平瓦	C8 Pit4	—	—	—	布目後工具によるケズリ→工具によるケズリ	やや密(～2mmの砂粒少し含む)	良	内外面共：灰5Y6/1	—	掘立柱建物ＳＢ48
73	00802	土師器 椀	B3 SK35	17.0	—	—	調整不明→ヨコナデか？→調整不明	やや密(雲母含む)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白10YR8/2	口縁部 2/12残	
74	00803	土師器 甕	B3 SK35	14.3	—	—	ナデ→ヨコナデ→ヨコ線少し残	密(2mmの小石と細砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
75	00901	土師器 甕	B3 SK35	15.8	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒と雲母含む)	—	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 6/12残	
76	00407	土師器 丸底壺	E4 SK38	—	—	頸部径6.4 体部径12.6	板ナデ→貼付後ナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3,灰5Y4/1 内：にぶい橙7.5YR7/4	頸部・体部共 3/12残	
77	00406	土師器 杯	E4・E5 SK38	不明	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：浅黄橙10YR8/3,灰5Y4/1	小片	
78	00404	土師器 杯	E4・E5 SK38	13.9	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	
79	00405	土師器 杯	E4・E5 SK38	13.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：橙7.5YR7/6	口縁部 3/12残	
80	00402	土師器 杯	E4 SK38	13.9	2.7～2.8	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(砂粒を殆ど含まない)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
81	00403	土師器 杯	E4・E5 SK38	15.9	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/4 内：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	
82	00401	土師器 杯	E4・E5 SK38	13.8	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：橙7.5YR7/6 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12残	
83	00503	製塩土器	E4・E5 SK38	不明	—	—	ナデ・オサエ→ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR7/6	小片	
84	00501	灰釉陶器 椀	E4・E5 SK38	—	—	底径 7.8	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	内外面共：灰白5Y7/1	底部 12/12残	東山72号窯式新
85	00502	灰釉陶器 皿？椀？	E4・E5 SK38	—	—	底径 6.1	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	外：灰白2.5Y7/1 内：灰5Y7/1	底部 4/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
86	00504	土師器 小皿	G4・G5 SK39	9.3	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(2～3mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 8/12残	
87	00505	土錘	G4・G5 SK39	3.1	1.1	1.15	ナデ・オサエ	やや密(2mm大の砂粒ごく少)	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	重さ3.38ｇ
88	00604	土師器 台付椀？ 台付皿？	D3 SX40	—	—	高台径 7.4	ナデ→貼付高台ナデ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	高台部 1/12残	
89	00207	土師器 杯	G6 SK42	不明	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密	—	外：橙7.5YR7/6,灰黄褐10YR5/2 内：灰黄褐10YR5/2	小片	
90	00507	土師器 杯	G6 SK42	14.7	2.5	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒少)	—	外：橙5YR6/6,浅黄橙10YR8/3 内：橙5YR6/6	口縁部 5/12残	
91	00508	土師器 杯	G6 SK42	13.8	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
92	00601	土師器 杯	G6 SK42	13.8	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 1/12残	
93	00205	土師器 杯	G6 SK42	13.6	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→沈線→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	
94	00203	土師器 皿	G5 SK42	14.2	2.9	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(2mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3,灰5Y4/1 内：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 9/12残	
95	00506	土師器 杯	G6 SK42	13.8	2.45	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3,にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3,灰黄褐6/3	口縁部 1/12残	
96	00602	土師器 椀	G6 SK42	15.2	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4,にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	
97	00202	土師器 甕	G6 SK42	16.8	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ→ハケメ？	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白10YR8/2	口縁部 2/12残	
98	00201	土師器 甕	G6 SK42	16.4	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ハケメ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：灰白10YR8/2,にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3,灰黄褐10YR5/2	口縁部 3/12残	
99	00603	土師器 甕	G6 SK42	21.7	—	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ハケメ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3,灰黄褐10YR6/2 内：にぶい黄橙10YR7/3,にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12残	
100	00208	製塩土器	G5 SK42	不明	—	—	ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	外：にぶい橙5YR6/4,橙5YR7/6	小片	
101	00206	灰釉陶器 椀	G5 SK42	—	—	底径 6.8	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→ロクロナデ→施釉	密(砂粒を殆ど含まない)	良	素地：灰白5Y8/1 釉：明オリーブ灰2.5Y7/1	底部 6/12残	黒笹90号窯式
102	00305	土師器 皿	E3 SK45	9.0	—	—	ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 1/12残	
103	00301	ロクロ土師器 皿	E3 SK45	14.8	—	—	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	やや密(1～2mm大の砂粒ごく少)	—	外：淡黄2.5Y8/3 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
104	00204	土師器 皿？椀？	E3 SK45	—	—	底径 6.4	ナデ→ナデ→貼付高台ナデ→ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	外：灰白10YR8/2 内：淡黄2.5Y8/3	底部 3/12残	
105	00303	ロクロ土師器 椀	E3 SK45	—	—	底径 4.2	ナデ→ナデ→糸切痕	やや密(1～2mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白10YR8/2	底部 12/12残	
106	00302	ロクロ土師器 椀	E3 SK45	14.9	5.9	—	ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	やや密(1～2mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい黄橙10YR6/3,にぶい黄褐10YR5/3 内：褐灰10YR4/1	口縁部1/12残 底部12/12残	
107	00304	灰釉陶器 椀	E3 SK45	—	—	底径 7.6	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	密(1mm大の砂粒ごく少)	良	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白5Y8/1	底部 12/12残	東山72号窯式新
108	00903	土師器 杯	B12 SZ52土器群	13.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや密(～0.5mmの砂粒と少し含む)	—	外：橙5YR7/6 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 4/12残	
109	00904	土師器 杯	B12 SZ52土器群	13.0	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや密(細砂粒と雲母少し含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
110	03901	土師器 皿	C9 SD20(P5)	8.5	2.2	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 2/12残	
111	04103	土師器 皿	D9 SD20	10.6	1.45	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12残	
112	04102	土師器 皿	D9 SD20	10.4	2.05	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや密(～3mmの小石と～1mm砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 10/12残	

第５表　出土遺物観察表（２）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
113	02705	土師器 皿	E9 SD20(P26)	12.0	—	—	ナデ・オサエ	やや密(0.5～1mm大の砂粒少)	—	内外面共：淡黄2.5Y8/3	口縁部 2/12残	
114	04504	土師器 皿	D9 SD20	9.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 4/12残	
115	03704	土師器 小皿	C9 SD20(P1)	10.3	2.2	—	表面摩滅の為、調整不明	密(～2.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部 5/12残	
116	04509	土師器 皿	G9 SD20	10.2	1.9	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12残	
117	03503	土師器 皿	D9 SD20(P13)	12.8	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	外：浅黄橙10YR8/3､灰黄2.5Y6/2 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12残	
118	04503	土師器 皿	D9 SD20	10.5	1.3	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	
119	04206	土師器 皿	E9 SD20	9.6	2.3	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～2.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12残	
120	03506	土師器 皿	E9 SD20(P18)	11.0	2.2	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒少)	—	外：浅黄2.5Y7/3 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部 6/12残	黒笹90号窯式
121	03401	土師器 杯	D9 SD20(P6)	12.8	—	—	ナデ・オサエ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒少)	—	内外面共：浅黄橙→10YR8/3	口縁部 2/12残	
122	08003	土師器 皿	D9 SD20(P6)	10.9	2.8	—	ナデ→ナデ・オサエ	密	—	内外面共：灰白2.5Y8/2	口縁部 12/12残	
123	07403	土師器 皿	E9 SD20(P16)	10.7	1.8～2.8	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 10/12残	
124	07402	土師器 皿	C9 SD20	11～11.2	1.5～2.4	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：淡黄2.5Y8/3 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 9/12残	
125	03501	土師器 杯	D9 SD20(P13)	14.2	—	—	ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：灰白2.5Y8/2 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部 3/12残	
126	04507	土師器 皿	F9 SD20	11.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12残	
127	04301	土師器 杯	E9 SD20	13.1	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密(～0.5mmの砂粒少し含む)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	
128	04506	土師器 皿	D9 SD20	10.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	
129	02404	土師器 杯	E9 SD20(P27)	13.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ	密	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12残	
130	02704	土師器 杯	E9 SD20(P26)	12.7	2.5	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5～1mm大の砂粒少)	—	外：浅黄橙10YR8/4 内：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12残	
131	07404	土師器 皿	E9 SD20(P17)	10.7	2.6～2.7	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：淡黄2.5Y8/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 8/12残	
132	03507	土師器 杯	E9 SD20(P31)	13.0	2.8	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 3/12残	
133	04104	土師器 杯	D9 SD20	11.2	2.9	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒と雲母含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 8/12残	
134	04505	土師器 杯	D9 SD20	11.0	1.8	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 4/12残	
135	03902	土師器 杯	G9 SD20(P43)	11.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12残	
136	04508	土師器 杯	G9 SD20	12.5	—	—	オサエ・ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12残	
137	04601	土師器 杯	F9 SD20	12.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12残	
138	02403	土師器 杯	E9 SD20(P20)	13.3	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ	密(～2mmの小石含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	
139	03502	土師器 杯	D9 SD20(P13)	13.1	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12残	
140	02703	土師器 杯	E9 SD20(P19)	13.8	3.1	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12残	
141	03705	土師器 杯	C9 SD20(P2)	13.3	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～2mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部 4/12残	
142	04501	土師器 椀	C9 SD20	12.8	—	—	ナデ→ヨコナデ	密(～2mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部 1/12残	
143	04502	土師器 椀	C9 SD20	12.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
144	04511	土師器 杯	G9 SD20	14.8	—	—	表面摩滅の為、調整不明	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12残	
145	02706	土師器 杯？	E9 SD20(P26)	14.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5～1mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12残	
146	02702	土師器 杯	E9 SD20(P19)	12.8	3.4	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1～3mm大の砂粒少)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3に近い	口縁部 3/12残	
147	03702	土師器 杯	G9 SD20 (P45)(P43)	13.7	3.6	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部 7/12残	
148	04101	土師器 杯	D9 SD20	14.2	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12残	
149	04203	土師器 杯	D9 SD20	13.6	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(細砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 1.5/12残	
150	04510	土師器 椀	G9 SD20	16.0	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部 1/12残	
151	03405	土師器 杯	D9 SD20(P11)	16.8	—	—	ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(砂粒を殆ど含まない)	—	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	
152	04207	土師器 椀	E9 SD20	14.6	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(細砂粒少し含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12残	
153	03903	土師器 椀	D9 SD20(P8)	16.0	5.5	—	ナデ→ヨコナデ→貼付後ヨコナデ→ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：淡黄2.5Y8/3	口縁部 5/12残	
154	08005	土師器 椀	E9 SD20(P19)	14.5	5.1	6.6	ロクロナデ→貼付高台ナデ→ナデ	密	—	内外面共：灰白2.5Y8/2	口縁部10/12残 高台部11/12残	
155	08004	土師器 椀	C9 SD20(P4)	14.6	6.3	高台径 7.0	ロクロナデ→貼付高台ナデ→ナデ	密(～3mmの砂粒・小石含む)	—	外：浅黄橙7.5YR8/6 内：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部10/12残 高台部ほぼ 12/12残	
156	02401	土師器 椀	F9 SD20(P40)	13.9	5.4	—	ナデ→貼付高台ナデ→ナデ	粗(5mm以上の小石含む・小石多い)	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部5/12残 高台部4/12残	
157	02402	土師器 椀	E9 SD20(P27)	14.2	—	高台径 8.3	ナデ→貼付高台ナデ→ナデ	密(～2mmの小石含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12残 高台部5/12残	
158	03904	土師器 椀	D9 SD20(P8)	15.0	5.5	高台径 7.4	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ →貼付後ヨコナデ	密(～2mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部3/12残 高台部2/12残	
159	07401	土師器 椀	D9 SD20(P7)	15.7	5.4	高台径 7.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ？→ナデ・オサエ→貼付高台ナデ→ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部8/12残 高台部12/12残	
160	04304	土師器 椀	E9 SD20	—	—	高台径 7.0	ナデ→ナデ→貼付高台ナデ→ナデ	密	—	外：灰白2.5Y8/2 内：浅黄橙7.5YR8/3	高台部 12/12残	
161	02306	土師器 台付皿？ 台付椀？	E9 SD20(P22)	—	—	高台径 7.7	ナデ→貼付高台ナデ→ナデ→工具痕	密	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/4	高台部 9/12残	
162	04105	土師器 台付椀	D9 SD20	—	—	高台径 7.5	ナデ→貼付高台ナデ→ナデ	密(7mmの石と～1.5mm砂粒と含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	高台部ほぼ 12/12残	
163	04407	土師器 台付椀？ 台付皿？	C9 SD20	—	—	台径 7.7	ヨコナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR6/4	台部 2/12残	
164	03706	土師器 台付椀？ 台付皿？	C9 SD20(P3)	—	—	台径 7.3	ナデ→貼付後ヨコナデ→ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10YR8/2､褐灰10YR6/1	台部 12/12残	
165	03406	土師器 台付皿？ 台付椀？	D9 SD20(P11)	—	—	高台径 8.2	ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：浅黄橙10YR8/3	底部 5/12残	
166	02801	土師器 甕	E9 SD20(P26)	10.6	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ→沈線	やや密(0.5～1mm大の砂粒少)	—	外：淡黄2.5Y8/3 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12残	
167	04303	土師器 甕	E9 SD20	11.5	—	—	工具痕→ヨコナデ→ハケメか？	密(～2mmの砂粒含む)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12残	
168	03703	土師器 甕	G9 SD20(P43)	12.0	—	頸部径10.8 体部径15.6	ケズリ→工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部7/12残 体部2/12残	

第６表　出土遺物観察表（３）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
169	04107	土師器 甕	D9 SD20	12.2	—	—	ナデ→ヨコナデ→ハケメか？摩滅の為不明瞭	密（～1mmの砂粒含む）	—	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 2/12残	
170	04405	土師器 甕	C9 SD20	14.8	—	—	ヨコナデ	密（～2mmの砂粒含む）	—	内外面共：にぶい褐7.5YR6/3､灰褐7.5YR4/2	口縁部 2/12残	
171	03603	土師器 甕	G9 SD20(P44)	15.8	—	—	工具ナデ？→ヨコナデ→ハケメ	やや密（0.5mm大の砂粒ごく少）	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12残	
172	04406	土師器 甕	G9 SD20	14.0	—	頸部径 12.8	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密（～1.5mmの砂粒含む）	—	内外面共：にぶい橙2.5Y6/3	口縁・頸部 1/12残	
173	04404	土師器 甕	F9 SD20	16.0	—	頸部径 15.3	ヨコナデ	密（～2.5mmの砂粒含む）	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁・頸部 1/12残	
174	02304	土師器 甕	F9 SD20(P42)	13.8	—	頸部径 13.1	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ→ケズリ	密（砂粒含む～2mmの小石含む）	—	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい橙5YR7/4	口縁・頸部 1/12残	
175	04202	土師器 甕	D9 SD20	15.8	—	—	ハケメ→ヨコナデ→ハケメか	密（細砂粒と雲母含む）	—	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/4と暗灰N3/0	口縁部 2/12残	
176	07701	土師器 甕	F9 SD20(P39)	16.1	—	頸部径15.2 体部径21.1	工具ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ハケメ→工具ナデ→ヘラケズリ	密（～2mm砂粒含む）	—	内外面共：灰白2.5Y8/1、にぶい黄褐10YR5/3、4/3	口縁部11/12 頸部9/12 体部6/12	
177	03504	土師器 甕	D9 SD20(P14)	14.7	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密（0.5mm大の砂粒少）	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12残	
178	02303	土師器 甕	F9 SD20(P37)	15.9	—	頸部径 14.5	ヨコナデ→ハケメ	密（～3mmの小石含む）	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部1/12残 頸部2/12残	
179	04302	土師器 甕	E9 SD20	15.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密（雲母少し含む）	—	外：橙7.5YR7/6 内：灰黄2.5Y7/2	口縁部 1/12残	
180	03701	土師器 甕	G9 SD20(P45)	16.5	—	頸部径 15.6	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密（～1mmの砂粒含む）	—	内外面共：明黄褐10YR7/6	口縁・頸部残 4/12残	
181	03403	土師器 甕	D9 SD20(P10)	18.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密（1mm大の砂粒少）	—	外：橙5YR7/6 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12残	
182	04403	土師器 甕	F9 SD20	21.8	—	—	ヨコナデ	密（～2mmの砂粒含む）	—	内外面共：灰黄褐10YR6/2､褐灰10YR4/1	口縁部 1/12残	
183	04201	土師器 甕	D9 SD20	23.4	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密（～2mmの砂粒含む）	—	内外面共：浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12残	
184	02302	土師器 甕	F9 SD20(P35)	24.0	—	頸部径 20.0	ヨコナデ→ハケメ？	密（～2mmの小石含む）	—	内外面共：灰白7.5YR8/2	口縁・頸部 1/12残	
185	04402	土師器 甕	D9 SD20	25.5	—	頸部径 23.6	ナデ→ヨコナデ	密（微砂粒含む）	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	頸部 1/12残	
186	02301	土師器 甕	F9 SD20(P35)	26.4	—	頸部径 23.0	ハケメ→ヨコナデ→オサエ	密（～2mmの小石含む）	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁・頸部 2/12残	
187	03602	土師器 甕	E9 SD20(P31)	24.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	やや密（1mm大の砂粒少）	—	外：灰黄褐10YR6/2 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 2/12残	
188	04204	製塩土器	D9 SD20	—	—	—	ナデ・オサエ	やや密（～2.5mmの小石と砂粒含む）	—	外：橙2.5YR6/6 内：橙5YR7/6	小片	底部砂粒
189	04205	製塩土器	D9 SD20	—	—	—	オサエ→オサエ・ナデ	密（～3mmの小石と細砂粒含む）	—	外：明赤褐5YR5/8 内：橙5YR6/8	小片	底部砂粒
190	07502	土錘	D9 SD20	5.05	1.3	1.1	ナデ・オサエ	やや密（0.5mm大の砂粒ごく少）	—	内外面共：灰黄2.5Y7/2	—	重さ6.32ｇ
191	07503	土錘	D9 SD20	3.6	1.0	0.9	—	やや密（0.5mm大の砂粒ごく少）	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/3	—	重さ2.98ｇ
192	07903	緑釉陶器 椀	E3・包 D9・SD20 (P6)	16.5	—	—	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉	密（微砂粒含む）	良	素地：灰白N7/0 釉：ｵﾘｰﾌﾞ	口縁部 2/12残	
193	03305	緑釉陶器 椀	C9 SD20	—	—	底径 6.4	施釉（全体的に摩耗激しく､調整不明瞭）	やや密（砂粒を殆ど含まない）	やや不良	素地：浅黄橙7.5YR8/6、10YR8/6 釉：暗緑灰10GY4/1に近い	底部 10/12残	近江Ⅲ新～Ⅳ
194	07802	灰釉陶器 椀	E9 SD20(P25)	15.0	6.8	高台径 7.1	ロクロナデ→貼付ヨコナデ→糸切→施釉	密（～1.0mm砂粒、3.0mm大小砂粒含む）	良	内外面共：灰白5Y8/1	口縁部3/12残 高台部8/12残	東山72号窯式
195	08001	灰釉陶器 椀	D9 SD20	15.7	6.2	高台径 7.6	ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	密（～0.5mmの砂粒含む）	良	内外面共：灰白5Y8/1	口縁部3/12残 高台部12/12残	東山72号窯式
196	08002	灰釉陶器 椀	E9 SD20(P21)	15.2	6.8	高台径 7.1	ロクロナデ→貼付高台ナデ→ロクロナデ	密（細砂粒少し含む）	良	内外面共：灰白5Y8/1	口縁部7/12残 高台部12/12残	東山72号窯式
197	03404	灰釉陶器 深椀	D9 SD20(P11)	15.8	—	—	ロクロナデ→施釉	密（1mm大の砂粒ごく少）	良	素地：灰白5Y8/1に近い 釉：ｵﾘｰﾌﾞ灰10Y6/2	口縁部 2/12残	東山72号窯式
198	03402	灰釉陶器 深椀	D9 SD20(P9)	15.8	—	—	ロクロナデ→施釉	密（1mm大の砂粒少）	良	素地：灰白2.5Y7/1 釉：ｵﾘｰﾌﾞ灰10Y6/2	口縁部 1/12未満残	東山72号窯式
199	04401	灰釉陶器 深椀	D9 SD20	—	—	高台径 9.2	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付後ヨコナデ→糸切痕	密（微砂粒含む）	良	内外面共：灰白5Y7/1	高台部 3/12残	東山72号窯式
200	03505	灰釉陶器 椀	D9 SD20(P14)	15.8	—	—	ロクロナデ→施釉	密（1mm大の砂粒ごく少）	良	素地：灰白2.5Y7/1に近い 釉：ほぼ透明	口縁部 1/12残	
201	04602	灰釉陶器 椀	F9 SD20	15.8	—	—	ロクロナデ→施釉	密（1mm大の砂粒ごく少）	良	素地：灰黄2.5Y7/2､ 釉：灰白2.5Y8/2に近い	口縁部 1/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
202	03407	灰釉陶器 椀	D9 SD20(P11)	—	—	高台径 6.4	ロクロナデ→研磨？→ロクロナデ→貼付高台ナデ→施釉	密（3mm大の砂粒が一つ認められる）	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：ｵﾘｰﾌﾞ灰10Y5/2	高台部 3/12残	黒笹90号窯式～折戸53号窯式
203	04603	灰釉陶器 椀	F9 SD20	6.2	—	—	ロクロナデ→貼付高台ナデ→ロクロナデ→施釉	密（0.5mm大の砂粒ごく少）	良	素地：灰白2.5Y8/1に近い 釉：ｵﾘｰﾌﾞ灰10Y6/2	口縁部 2/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
204	02305	灰釉陶器 椀	E9 SD20(P24)	—	—	高台径 8.1	ロクロナデ→貼付高台ナデ→ロクロナデ	密	良	内外面共：灰白2.5Y8/1	高台部 10/12残	東山72号窯式古
205	08101	灰釉陶器 瓶	E9 SD20(P25)	—	—	高台径10.1 体部径15.0	回転ナデ→回転ナデ→貼付高台ナデ→ナデ	密（～2mmの砂粒と小石含む）	良	外：黄灰2.5Y6/1 内：灰白2.5Y7/1	高台部9/12残 体部5/12残	折戸53号窯式
206	04106	灰釉陶器 壺？瓶？	D9 SD20	6.6	—	—	ロクロナデ→ロクロナデ→ケズリ→削出し高台→ロクロケズリ	密	良	外：灰ｵﾘｰﾌﾞ7.5Y6/2 内：灰白5Y7/1	口縁部 3/12残	猿投産
207	07804	フイゴ 羽口	G9 SD20	—	約6.5	—		密（～6mm砂・小石粒多く含む）	—	内外面共：橙5Y7/6	—	
208	00102	釘	D9 SD20	7.1	2.2	2.0	—	—	—	—	—	重さ52.84g
209	00103	釘	D9 SD20	7.3	1.4	1.1	—	—	—	—	—	重さ17.18g
210	00107	筒形青銅製品	G9 SD20	2.7	1.0	0.1～0.15	—	—	—	—	—	重さ3.74ｇ
211	04001	平瓦	C9 SD20(P5)	—	—	1.8～2.2	布目､コビキ痕→縄目タタキ	密（～4mmの砂粒含む）	良	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	—	
212	02901	平瓦	E9 SD20(P32)	—	—	—	布目→ケズリ→縄タタキ	密（1mm大の砂粒少）	良	内外面共：灰N5/0に近い	—	
213	02802	平瓦	E9 SD20(P30)	—	—	—	ケズリ→布目→縄タタキ	やや不良	—	布：7.5Y5/1 縄：灰N5/0､浅黄2.5Y7/3	—	
214	02405	平瓦	E9 SD20(P23)	—	—	—	布目	密（～2mmの小石多く含む）	—	内外面共：灰白2.5Y8/1	—	
215	02601	平瓦	F9 SD20(P34)	—	—	—	布目→縄目	密（～8mmの小石含む）	良	内外面共：明褐灰7.5YR7/2	—	
216	02701	平瓦	D9 SD20(P12)	—	—	—	布目→縄タタキ	密（1mm大の砂粒少）	良	内外面共：青灰10BG5/1に近い	—	
217	03905	平瓦	C9 SD20(P5)	—	—	2.2	布目→縄目タタキ	密（～4mmの砂粒含む）	良	内外面共：灰N6/0	—	
218	03801	平瓦	G9 SD20(P46)	—	—	—	布目→縄目タタキ		良	内外面共：灰白N7/10	—	
219	03601	平瓦	E9 SD20(P28)	—	—	—	布目→縄タタキ	やや密（1～10mm大の砂粒少）	やや不良	外：橙5YR7/6 内：橙7.5YR7/6	—	
220	02501	丸瓦	F9 SD20(P41)	—	—	—	布目	やや密（～7mm大の小石含む）	良	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	—	
221	07501	軒平瓦	E9 SD20	—	—	—	布目	密（1～2mm大の砂粒少）	良	外：灰N5/0 内：灰10Y5/1	—	
222	00801	土師器 椀	B3 SD21上層 (P3横)	14.8	—	—	ロクロナデ	やや密（細砂粒含む）	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
223	00704	土師器 椀	B3 SD21上層 (P3付近)	15.6	—	—	ロクロナデ	密（～1mmの砂粒少し含む）	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白10YR8/2	口縁部 2/12残	
224	00706	土師器 台付椀？ 台付皿？	B3 SD21上層 (P3横)	—	—	台径 6.6	ロクロナデ	密（～2mmの小石含む）	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	底部 6/12残	

第７表　出土遺物観察表（４）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
225	00804	土師器 甕	B3 SD21上層 (P3付近)	17.0	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ→工具の当たり痕か	密(～1.5mmの砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
226	00805	土師器 甕	B3 SD21上層 (P3付近)	17.3	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ・ハケメ	密(細砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 3/12残	
227	01001	土師器 甕	A2・3/B1・ 2・3 SD21上層西側	20.4	—	—	ハケメ→ナデ→ヨコナデ→ハケメ？	やや密	—	外：浅黄橙10YR8/3,黒褐10YR3/1 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12未満	
228	01002	製塩土器	B3 SD21上層	12.0	—	—	工具ナデ？→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：橙5YR6/6,明赤褐5YR5/6 内：橙5YR6/6	口縁部 2/12残	
229	01003	灰釉陶器 椀	A2・3/B1・ 2・3 SD21上層西側	—	—	高台径 7.8	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ →糸切痕	密(0.5～1mm大の砂粒ごく少)	良	内外面共：灰白2.5Y8/2	高台 2/12残	東山72号窯式
230	00806	灰釉陶器 瓶	B3 SD21上層 (P3付近)	15.6	—	—	ロクロナデ→ロクロナデ後？→貼付高台ナデ	密	やや不良？	内外面共：灰白5Y8/1	底部 1/12残	
231	01004	軒平瓦	B3 SD21上層	—	—	—	ケズリ→ケズリ？	密(1～2mm大の砂粒少)	やや不良	内外面共：浅黄2.5Y7/3,にぶい橙7.5YR7/4	—	
232	01601	平瓦	B2 SD21上層	—	—	—	布目・コビキ痕→ケズリ→縄目	密(裏面に小石(～6mm)多く付着)	良	内外面共：灰N6/10	—	
233	01401	平瓦	B3 SD21上層	—	—	—	布目→ケズリ→縄目	粗(1.8cmの石含む)	良	内外面共：灰N6/6	—	
234	01301	土師器 甕	A4 SD21	16.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→？	やや密(1mm大の砂粒少)	—	内外面共：淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12残	
235	01305	土師器 杯	A6 SD21	—	—	—	ナデ・オサエ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：橙5YR7/6	—	墨書土器
236	01303	灰釉陶器 椀	B1・B2 SD21	—	—	高台径 7.6	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	密(1mm大の砂粒少)	良	外：灰白N7/0 内：灰白5Y7/1	高台部 5/12残	折戸53号窯式
237	01302	灰釉陶器 椀	A6 SD21	—	—	高台径 6.8	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→施釉	密(1mm大の砂粒ごく少)	良	素地：灰白5Y7/1 釉：灰オリーブ5Y6/2	高台部 8/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
238	01304	陶器 山茶椀	B1・B2 SD21	—	—	高台径 7.2	ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	内外面共：灰白5Y7/1	高台部 10/12残	渥美４型式
239	01501	平瓦	A5・A6 SD21	—	—	—	布目→縄目	やや密(1.0cm程度の小石含む)	良	内外面共：橙5YR6/6	—	
240	01101	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	10.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
241	01102	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	11.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
242	01103	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	12.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4,にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12残	
243	01104	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	13.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	やや密(0.5～1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12残	
244	01106	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	12.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	外：浅黄橙10YR8/3,にぶい橙7.5YR7/4 内：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	
245	01105	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	14.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12残	
246	01108	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ→ハケメ？ 板ナデ？	やや密(0.5mm大の砂粒少)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12残	
247	01107	土師器 杯	B1・B2 SD21下層	16.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒少)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12残	
248	00703	土師器 台付椀	B1・B2 SD21下層	—	—	高台径 6.1	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ →ロクロナデ	密(雲母少し含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	高台部 11/12残	
249	01202	土師器 甕	B1・B2 SD21下層	26.4	—	—	ナデ→ヨコナデ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：灰黄褐10YR5/2 内：浅黄橙10YR8/3,にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12残	
250	00702	灰釉陶器 椀	B1・B2 SD21下層	—	—	高台径 7.8	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ →ロクロナデ	密(～0.5mmの砂粒少し含む)	良	内外面共：灰白N8/0	高台部 5/12残	東山72号窯式古
251	01203	灰釉陶器 椀	B1・B2 SD21下層	15.2	—	—	ロクロナデ	密(1～3mm大の砂粒少)	良	内外面共：灰白7.5Y7/1	口縁部 3/12残	東山72号窯式
252	00705	灰釉陶器 椀	B1・B2 SD21下層	16.0	—	—	ロクロナデ	密(細砂粒 少し含む)	良	内外面共：灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12残	東山72号窯式
253	00701	灰釉陶器 椀	B1・B2 SD21下層	—	—	高台径 7.1	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ →糸切痕	密(～1.5mmの砂粒含む)	良	内外面共：灰白5Y7/1	高台部 6/12残	東山72号窯式新
254	01204	灰釉陶器 椀	B1・B2 SD21下層	15.1	—	高台径 6.6	ロクロナデ→貼付高台ナデ→？	密(砂粒を殆ど含まない)	やや良	内外面共：灰白5Y8/1に近い	口縁・高台部 1/12残	東山72号窯式
255	01201	平瓦	B1・B2 SD21下層	—	—	—	布目→縄タタキ	密(1mm大の砂粒少)	やや不良	内外面共：橙7.5YR6/6	—	
256	07901	緑釉陶器 椀	A5Pit1・ C5SD20(P4)	—	—	高台径 7.8	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉	密(微砂粒含む)	良	素地：灰白N7/0 釉：オリーブ	高台部 9/12	
257	05502	土師器 杯	B10 Pit4	14.5	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	
258	05501	土師器 杯	B10 Pit4	14.3	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	油煙痕
259	05101	土師器 杯	C5 Pit2	13.6	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 3/12残	
260	05201	土師器 杯	C6 Pit8	推定 12.0	2.1	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(～0.5mmの砂粒含む)	—	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
261	07207	土師器 杯	C7 Pit7	12.8	2.3	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母含む)	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	
262	07301	土師器 杯	C7 Pit7	14.8	—	—	ヨコナデ	密	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	
263	07005	土師器 杯	C7 Pit8	13.9	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(微砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
264	07303	土師器 杯	C8 Pit9	14.2	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
265	07302	土師器 杯	C8 Pit9	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母含む)	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	
266	07304	灰釉陶器 椀？	C8 Pit9	—	—	高台径 6.8	ロクロナデ→貼付高台ナデ→ロクロナデ	密	良	内外面共：灰白5Y8/1 釉：オリーブ灰10Y6/2	高台部 9/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
267	06206	土師器 杯	D3 Pit5	12.3	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・指圧痕	やや密(砂粒多い)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
268	06104	土師器 甕	D3 Pit7	19.4	—	—	ヨコナデ	密(～1mm程度の小石多く含む)	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12残	
269	07205	土師器 皿	D6 Pit4	10.3	2.9	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(細砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/4	口縁部 11/12残	
270	07206	土師器 甕	D6 Pit4	15.6	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ	密(細砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 4/12残	
271	05104	土師器 杯	D6 Pit8	13.3	2.5	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・指圧痕	密	—	内外面共：淡橙5YR8/3	口縁部 1/12残	
272	06307	土師器 甕	D6 Pit9	—	—	—	ヨコナデ→ユビオサエ	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	
273	06306	土師器 甕	D6 Pit14	—	—	—	ヨコナデ	密	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 小片	
274	06102	土師器 甕	D7 Pit10	19.0	17.9	—	ハケメ→ヨコナデ→ハケメ	密(砂粒含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 2/12残	
275	06101	土師器 甕	D7 Pit10	23.9	—	頸部径 21.5	ハケメ→ヨコナデ→ハケメ・指圧痕	密(～3mmの小石含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁・頸部 2/12残	
276	06402	土師器 杯	D7 Pit12	—	—	—	ナデ?→ヨコナデ→オサエ?・ナデ？	やや粗(～0.5mmの赤い粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 1/12残	掘立柱建物49
277	06405	土師器 杯	D7 Pit12	13.0	—	—	ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12残	掘立柱建物ＳＢ49
278	07803	土師器 杯？	D7 Pit12	—	—	—		密(～1.0mm砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	—	墨書土器・掘立柱建物49
279	07801	土師器 鍋	D7 Pit12	16.0	—	頸部径14.4 体部径20.4	ケズリ→ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ハケメ→ ケズリ	密(～3mm砂粒含む)	—	外：灰黄褐10YR6/2～4/2 内：にぶい褐7.5YR6/3、5/3	口縁部2/12残 頸部3/12残 体部4/12残	掘立柱建物ＳＢ49
280	05110	土師器 甕	D8 Pit7	—	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/3	小片	

第８表　出土遺物観察表（５）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
281	07405	土師器 皿	D9 Pit9	12.4～12.8	2.3～3.0	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：橙2.5YR6/6､にぶい黄橙10YR8/3 内：橙5YR6/6､にぶい黄橙10YR8/3	口縁部 10/12残	
282	06002	灰釉陶器 椀	E2 Pit1	—	—	高台径 7.4	ロクロナデ→貼付ナデ→糸切痕	密	良	内外面共：灰白N8/0	口縁部 4/12残	東山72号窯式
283	06604	土師器 皿	E2 Pit3	10.9	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3に近い 内：浅黄橙10YR8/4に近い	口縁部 2/12残	
284	06605	黒色土器 椀	E2 Pit3	—	—	—	ミガキ→貼付高台ナデ→ナデ→糸切痕	やや密	—	外：灰白2.5Y8/2 内：ｵﾘｰﾌﾞ黒5Y3/1に近い	—	
285	07007	土師器 甕	E2 Pit3	14.4	—	頸部径 13.4	ナデ→ヨコナデ→工具ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁・頸部 1/12残	
286	06603	土師器 甕	E2 Pit3	18.1	—	—	ハケメ?ナデ→ヨコナデ→ハケメ→ナデ・オサエ→沈線	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12残	
287	06701	軒平瓦	E2 Pit3	—	—	—	布目→ケズリ→ケズリ→縄タタキ	密(2mm大の砂粒少)	やや良	内外面共：灰5Y6/1	—	
288	06003	灰釉陶器 皿	E3 Pit1	11.9	—	—	ロクロナデ	密	良	内外面共：灰白N8/0	口縁部 1/12残	東山72号窯式
289	06103	土師器 甕	E3 Pit3	16.8	—	頸部径 15.5	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(～5mmの小石含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁・頸部 1/12残	
290	06008	土師器 杯	E3 Pit8	14.5	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12以下残 底部3/12残	
291	06007	土師器 杯	E3 Pit8	13.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密(砂粒多い)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/2	口縁部 1/12残	
292	06006	土師器 杯	E3 Pit11	14.2	—	—	ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	
293	06702	土師器 杯	E3 Pit11	14.6～14.8	3.3	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 8/12残	
294	06208	土師器 杯	E3 Pit11	13.5	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密(砂粒含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 2/12残	
295	06703	土師器 杯?	E3 Pit11	—	—	—	ナデ・オサエ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：浅黄橙10YR8/3	—	墨書土器
296	06704	製塩土器	E3 Pit11	—	—	—	ナデ・オサエ→ナデ・オサエ→貼付後ナデ	やや密(2～3mm大の砂粒少)	—	外：黄橙7.5YR7/8 内：にぶい橙7.5YR7/4	—	底部モミガラ痕
297	06606	灰釉陶器 椀	E4 Pit1・2	—	—	高台径 6.5	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台ナデ→ロクロナデ→施釉	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	素地：灰白5Y8/1 釉：淡黄5Y8/3	高台部 3/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式古
298	06406	土師器 杯	E4 Pit2	12.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(～0.5mmの砂粒・赤い粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
299	06404	製塩土器	E4 Pit2	—	—	—	ナデ?	粗(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	
300	07702	製塩土器	E4 Pit2	16.0	5.3	底径 15.6	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～7mm砂粒・小石粒多く含む)	—	内外面共：橙5YR6/6	口縁・底部 2/12残	底部砂粒
301	05504	土師器 杯	E4 Pit5	13.2	2.9	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 2/12残	
302	05505	土師器 杯	E4 Pit5	15.3	2.7	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	
303	05506	土師器 杯	E4 Pit5	12.9	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～2mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
304	05503	土師器 杯	E4 Pit5	14.4	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4､褐灰7.5YR4/1	口縁部 4/12残	
305	05507	土師器 杯	E4 Pit5	13.2	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
306	05508	土師器 鍋	E4 Pit5	—	—	—	ヨコハケメ→オサエ・ナデ→タテハケメ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	—	把手部分
307	05509	製塩土器	E4 Pit5	—	—	—	ナデ	密(～2mmの砂粒多く含む)	—	外面：橙5YR6/6 内面：にぶい黄橙10YR7/4	小片	底部モミガラ痕
308	06204	土師器 杯	E4 Pit7	12.8	—	—	ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12残	
309	06203	土師器 杯	E4 Pit7	14.0	—	—	ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	
310	06202	土師器 杯	E4 Pit7	13.9	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：淡橙5YR8/4	口縁部 1/12残	
311	06201	土師器 杯	E4 Pit7	15.1	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	
312	06205	土師器 杯	E4 Pit8	13.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 2/12残	
313	07104	土師器 皿	E5 Pit2	12.4	1.7	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(細砂粒少し含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1.5/12残	
314	06409	土師器 杯	E5 Pit2	13.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(～0.5mmの赤い粒を含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	
315	06607	土師器 杯	E5 Pit2	14.6	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：橙7.5YR7/6に近い	口縁部 2/12残	
316	07103	土師器 杯	E5 Pit2	14.9	—	—	ヨコナデ	密(雲母含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
317	07105	土師器 皿	E5 Pit2	13.4	2.2	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母含む)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：橙7.5YR7/6	口縁部 1/12以下残	
318	06408	土師器 杯	E5 Pit2	14.0	—	—	内面剥離の為､調整不明 ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(～0.5mmの赤い粒を含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	
319	07101	土師器 杯	E5 Pit2	13.3	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 3/12残	
320	07102	土師器 杯	E5 Pit2	16.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：橙5YR7/6､浅黄橙10YR8/3	口縁部 1.5/12残	
321	07107	製塩土器	E5 Pit2	—	—	—	ナデ→ナデ→ナデ	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：橙2.5YR6/8	小片	底部砂粒
322	07106	製塩土器	E5 Pit2	16.0	5.0	—	オサエ・ナデ	やや粗(～1mmの砂粒含む)	—	外：にぶい黄2.5Y6/3 内：橙5YR6/6	口縁部 1.5/12残	底部砂粒
323	07202	製塩土器	E5 Pit2	—	—	—	ナデ→オサエ・ナデ	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	外：橙5YR6/8 内：橙5YR7/6	小片	
324	07203	製塩土器	E5 Pit2	—	—	—	ナデ→オサエ・ナデ	やや粗(～2.5mmの小石・砂粒多く含む)	—	外：淡赤橙2.5YR7/4 内：橙2.5YR7/6	小片	
325	07201	製塩土器	E5 Pit2	—	—	—	ナデ→オサエ・ナデ	やや密(～1mmの砂粒含む)	—	外：橙5YR6/8 内：明赤褐5YR5/8	小片	底部砂粒
326	06305	土師器 皿	E6 Pit5	10.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12残	
327	06001	灰釉陶器 椀	E6 Pit5	15.3	5.7	—	ロクロナデ→貼付ナデ→糸切痕→施釉	密(～5mmの小石含む)	良	内外面共：灰白2.5Y8/1	口縁部6/12残 高台部10/12残	東山72号窯式
328	05610	土師器 皿	E6 Pit12	10.0	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
329	05704	土師器 鍾	E6 Pit12	15.5	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→オサエ→ハケメ	密(細砂粒含む)	—	外：淡橙5YR8/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	底部 1/12残	
330	05202	土師器 杯	E7 Pit6	14.0	3.2	—	内面剥離激しい→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	粗(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 3/12残	
331	05106	土師器 杯	E8 Pit7	12.0	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：にぶい橙5YR7/3	口縁部 2/12残	
332	05103	土師器 杯	E8 Pit7	13.9	—	—	ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12残	
333	05604	土師器 杯	E8 Pit7	12.8	—	—	ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
334	05102	土師器 杯	E8 Pit7	14.0	2.5	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 2/12残	
335	05603	土師器 甕	E8 Pit7	16.2	—	頸部径 15.0	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/4	口縁・頸部 2/12残	
336	06403	土師器 台付椀	F6 Pit3	—	—	高台径 7.0	ナデ?→貼付	やや密	—	内外面共：灰白2.5Y8/2	高台部 8/12残	

第９表　出土遺物観察表（６）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
337	00106	釘	E7 Pit5	7.6	0.8	0.7	—	—	—	—	—	重さ10.78ｇ
338	05703	土師器 甕	E6 Pit11	16.0	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(細砂粒と雲母含む)	—	外：橙2.5YR7/6とにぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	掘立柱建物ＳＢ49
339	05401	軒平瓦	F11 Pit2	—	—	—	布目・工具ナデ→縄目？・工具ナデ	粗(～2mmの砂粒多く含む)	良	内外面共：灰10Y6/1	—	
340	05804	土師器 杯	G6 Pit4	11.2	2.3	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～2mmの砂粒と雲母含む)	—	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 8/12残	
341	07703	土師器 皿	G6 Pit4	10.8	2.5	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ	密(～1.5mm砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 12/12残	
342	05801	土師器 皿	G6 Pit4	11.9	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(雲母と細砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12残	
343	05803	土師器 杯	G6 Pit4	13.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(6mm大の石と2.5mmの砂粒含む)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 4/12残	
344	05802	土師器 椀	G6 Pit4	16.4	—	—	ロクロナデ	密	—	内外面共：灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12残	
345	05805	土師器 台付皿？ 台付椀？	G6 Pit4	—	—	高台径 7.6	ナデ→ナデ→貼付高台ナデ	密(～１mmの砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：浅黄橙10YR8/4	高台部 6/12残弱	
346	02102	土師器 小皿	G6 SD9	10.2	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	内外面共：灰白2.5Y8/2	口縁部 3/12残	
347	02101	土師器 杯	G6 SD9	11.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4,灰黄褐10YR6/2 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 1/12残	
348	01702	土師器 甕	G7 SD9	不明	—	—	ヨコナデ	密(～2mmの砂粒含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	小片	
349	02103	土師器 甕	G6 SD9	15.9	—	—	ウ→ヨコナデ→ハケメ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12残	
350	02105	製塩土器	G6 SD9	—	—	—	ナデ・オサエ→ナデ・オサエ→ナデ・オサエ	やや密(1～2mm大の砂粒少)	—	外：橙5YR7/6 内：浅黄橙10YR8/4	小片	底部砂粒
351	01701	灰釉陶器 皿	G6 SD9	16.0	—	—	ロクロナデ	密(細砂粒含む)	良	内外面共：灰白5Y8/1	口縁部 1/12残	黒笹14号窯式から黒笹90号窯式
352	02104	灰釉陶器 椀	G6 SD9	16.8	—	—	ロクロナデ	密(砂粒を殆ど含まない)	良好	外：灰白2.5Y8/2に近い 内：灰白5Y8/1に近い	口縁部 2/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
353	01704	土師器 台付皿？椀？	D11～F9 SD10	—	—	高台径 7.9	ナデ→貼付高台ナデ→ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	外：淡黄2.5Y8/3 内：灰黄2.5Y7/2	高台部 9/12残	
354	01705	土師器 甕	D11～F9 SD10	19.6	—	—	ハケメ→ヨコナデ	密(～1.5mmの砂粒含む)	—	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12残	
355	02106	土錘	D11～F9 SD10	3.7	1.5	1.35	ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	灰黄2.5Y7/2,黄灰2.5Y5/1	—	重さ5.88ｇ
356	01703	灰釉陶器 椀	D11～F9 SD10	15.4	—	—	ロクロナデ	密(細砂粒含む)	良	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y8/1	口縁部 1.5/12残	黒笹90号窯式
357	01706	磨製石斧	D11～F9 SD10	4.4	5.25	1.3	—	—	—	—	—	重さ 72.21ｇ
358	01707	土師器 皿	C9 SD15	9.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや密(1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白10Y8/2	口縁部 4/12残	
359	01801	土師器 皿	C9 SD15	10.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒と雲母含む)	—	内外面共：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
360	01802	ロクロ土師器 椀？ 台付皿？	C9 SD15	—	—	高台径 6.8	ナデ→貼付高台ナデ→糸切後ナデ	密(細砂粒と雲母含む)	—	外：黄灰2.5Y5/1 内：灰黄褐10YR6/2	高台部 8/12残	
361	01803	土師器 杯	B6 SD17	13.6	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密(1.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12以下残	
362	01901	土師器 甕	B6 SD17	15.7	—	—	工具ナデ・オサエ→ヨコナデ→工具によるオサエ→ハケメ	密(～1mmの砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい橙10YR7/4 内：にぶい橙10YR6/4	口縁部 2/12残	
363	01804	灰釉陶器 椀	B9・B10 SD17	13.2	3.65	高台径 7.5	ロクロナデ→貼付高台ナデ	密(～0.5mmの砂粒含む)	良	内外面共：灰白N8/0	口縁部1/12残 高台部4/12残	折戸53号窯式
364	01805	弥生土器 細頸壺	A9・B9 SD19	9.6	—	—	ヨコナデ→ハケメ	密(～1mmの砂粒と雲母含む)	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 2/12残	
365	01807	土師器 杯	A9・B9 SD19	13.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	—	内外面共：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	
366	01806	灰釉陶器 椀	A9・B9 SD19	—	—	高台径 7.2	ロクロナデ→施釉→貼付高台ナデ→施釉	密	やや良	素地：灰白5Y8/1 釉：灰白5Y7/2	高台部 2/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
367	01808	製塩土器	A9・B9 SD19	不明	—	—	オサエ→ナデ・オサエ	やや粗(～1mmの砂粒含む)	—	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：にぶい橙5YR7/3	小片	
368	02001	丸瓦	B9 SD19	—	—	—	剥離により不明→布目痕	密(～2.5mmの砂粒含む)	やや不良	外：浅黄橙10YR8/4 内：橙7.5YR7/6		
369	02109	土師器 皿	E4 SD27	10.2	1.95	—	ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12残	
370	02108	土師器 皿	E4 SD27	10.3	1.95	—	ナデ・オサエ	やや密(0.5～1mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙7.5YR8/3,灰白2.5Y8/2 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部 5/12残	
371	02204	土師器 杯	F2 SD27	12.6	2.9	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：橙7.5YR7/6	口縁部 2/12残	
372	02203	土師器 杯	E6 SD27	13.2	2.45	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒少)	—	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12残	
373	02205	土師器 杯	E6 SD27	12.6	2.7	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12残	
374	02201	土師器 杯	F2 SD27	14.3	2.7	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12残	22-2と同一個体？
375	02202	土師器 椀	E6 SD27	15.8	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
376	01903	土師器 杯	C8・D8 SD27	14.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密(～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：淡黄2.5Y8/3	口縁部 3/12残	
377	01904	土師器 椀	C8・D8 SD27	—	—	高台径 6.4	ミガキ→貼付高台ナデ→ロクロナデ	密(細砂粒と雲母含む)	—	内外面共：暗灰N3/0	高台部 5/12残	
378	02107	土師器 椀	F2 SD27	12.8	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ→ナデ？	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：灰白2.5Y8/2 内：灰5Y4/1	口縁部 2/12残	
379	02206	土師器 甕	E4 SD27	23.6	—	—	ナデ→ヨコナデ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：灰黄2.5Y7/2 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12残	
380	01902	灰釉陶器 椀	E6 SD27	—	—	高台径 7.6	ロクロナデ→貼付高台ナデ→ロクロナデ	密	良	内外面共：灰白5Y8/1	高台部 2/12残	東山72号窯式新
381	01905	土師器 杯	D8 SD29	12.7	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ	密(微砂粒少し含む)	—	外：橙7.5YR7/6 内：浅黄橙7.5YR8/6	口縁部 1/12残	
382	01906	灰釉陶器 壺	D8 SD29	—	—	高台径 7.3	ロクロナデ→ロクロナデ→削出し高台→ロクロケズリ	密	良	外：ｵﾘｰﾌﾞ黄7.5Y6/3 内：灰白5Y8/1	高台部 4/12残	
383	07406	青磁 椀	B2・B3 ｶｸﾗﾝ溝	—	—	高台径 5.0	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付高台？→施釉	密	良	素地：灰白7.5Y7/1に近い 釉：緑色	高台部 12/12残	
384	03105	土師器 皿	E3 包含層	11.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12残	
385	04703	土師器 皿	D3 包含層	9.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12残	
386	04901	土師器 皿	A12 包含層	9.0	1.8	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	密(雲母少し含む)	—	外：灰白10YR8/2 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12残	
387	03103	土師器 皿	E3 包含層	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(赤い粒を含む)	—	内外面共：橙5YR6/6	口縁部 1/12残	
388	04806	土師器 皿	F5 包含層	11.1	2.55	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 8/12残	
389	03007	土師器 皿	E9 包含層	11.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密	—	内外面共：灰白10YR8/2	口縁部 3/12残	
390	04705	土師器 皿	D6 包含層	10.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：橙7.5YR7/6 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
391	04808	土師器 皿	G3 包含層	10.6	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：浅黄2.5Y7/3に近い 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
392	03006	土師器 杯	E9 包含層	14.0	推定 3.15	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 5/12残	

第10表　出土遺物観察表（７）

報告書番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	最大長 口径 (cm)	最大幅 器高 (cm)	最大厚 その他 (cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
393	03002	土師器 杯	E2 包含層	13.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12残	
394	04801	土師器 杯	D7 包含層	14.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：灰白2.5Y8/2 内：浅黄橙10YR8/3に近い	口縁部 1/12未満残	
395	03003	土師器 杯	E3 包含層	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(赤い粒を少し含む)	—	内外面共：橙5YR6/6	口縁部 3/12残	
396	04704	土師器 杯	D3 包含層	15.8	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4､浅黄橙10YR8/3 内：灰黄褐10YR6/3､浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
397	03104	土師器 杯	E4 包含層	14.0	2.8	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(赤い粒・～0.5mmの砂粒含む)	—	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12残	
398	03005	土師器 杯	D4 包含層	14.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(赤い粒・～1mmの砂粒含む)	—	外：橙2.5YR6/6 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 5/12残	
399	03101	土師器 杯	E3 包含層	15.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(～2mmの砂粒含む)	—	内外面共：にぶい橙5YR7/4	口縁部 4/12残	
400	03001	土師器 杯	E3 包含層	15.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや粗(～1mmの赤い粒多く含む)	—	内外面共：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 5/12残	
401	03102	土師器 杯	E3 包含層	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(赤い粒を含む)	—	外：橙5YR7/6 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12残	
402	03004	土師器 杯	E3 包含層	14.0	—	—	ユビオサエ・ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	やや密(～1mmの砂粒を含む)	—	内外面共：にぶい橙5YR7/4	口縁部 2/12残	
403	03008	土師器 杯	E9 包含層	14.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ユビオサエ・ナデ	密(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12残	
404	04903	土師器 杯	D5 包含層	16.5	—	—	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	密	—	内外面共：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
405	05003	土師器 椀	A5 包含層	16.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ→台部貼付跡	密(～1mmの砂粒含む)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	
406	03202	土師器 甕	E3 包含層	15.0	—	—	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	やや密	—	内外面共：灰黄褐10YR4/2	口縁部 2/12残	
407	04905	土師器 甕	E3 包含層	14.4	—	—	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密	—	外：にぶい黄褐10YR4/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12残	
408	04904	土師器 甕	D5 包含層	18.0	—	—	ヨコナデ→オサエ	密(細砂粒少し含む)	—	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12残	
409	04707	土師器 甕	D7 包含層	15.8	—	—	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→ナデ・オサエ→ハケメ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：橙2.5YR7/8 内：橙5YR7/6	口縁部 1/12残	
410	04802	土師器 甕	D8 包含層	13.6	—	—	ナデ・ハケメ→ヨコナデ→ハケメ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12残	
411	04706	土師器 甕	D6 包含層	18.0	—	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ハケメ	やや密(1mm大の砂粒ごく少)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12残	
412	04701	土師器 甕	D2 包含層	20.6	—	—	ハケメ→ヨコナデ→ハケメ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12残	
413	04908	土師器 甕	D6・D7 包含層	23.0	—	—	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(雲母含む)	—	外：灰黄褐10YR6/2 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 1.5/12残	
414	03201	土師器 甕	E3 包含層	16.0	—	—	工具によるナデ→ハケメ→ヨコナデ→ハケメ	やや密	—	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR7/1	口縁部 3/12残	
415	04807	土師器 甕	G5 包含層	15.6	—	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12残	
416	07704	土錘	A2 包	4.9	3.2	3.2	—	密(～1.0mm砂粒含む)	—	内外面共：灰白2.5Y8/1､黒褐2.5Y3/1	重さ 43g	
417	03204	土錘	E3 包含層	3.4	1.15	1.1	—	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	灰白2.5Y7/1	—	重さ3.45g
418	04909	製塩土器	B6 包含層	—	—	—	ナデ・オサエ	やや粗(～3mmの小石と～1mmの砂粒含む)	—	内外面共：橙5YR6/8	小片	
419	04803	製塩土器	D9 包含層	—	—	—	工具ナデ？→ナデ・オサエ	やや密(1mm大の砂粒少)	—	外：にぶい赤褐2.5YR5/4 内：橙7.5YR7/6	—	
420	05001	製塩土器	D5 包含層	—	—	—	ナデ・オサエ	やや粗(細砂粒少し含む)	—	外：赤褐5YR4/6 内：明赤褐5YR5/6	小片	底部モミガラ痕
421	03203	製塩土器	E3 包含層	—	—	—	ナデ	やや粗(～1mmの赤い粒を含む)	—	内外面共：橙7.5YR6/6	底部小片	底部モミガラ痕
422	04702	土師器 杯？	D2 包含層	—	—	—	ナデ・オサエ→ナデ・オサエ	やや密(0.5mm大の砂粒ごく少)	—	内外面共：橙5YR7/6	—	墨書土器
423	03302	緑釉陶器 皿	B6 包含層	15.8	—	—	ロクロナデ→施釉	密(砂粒を殆ど含まない)	良	素地：灰7.5Y6/1 釉：灰白10Y7/2に近い	口縁部 1/12残未満	
424	03301	緑釉陶器 椀	E3 包含層	19.1	—	—	ロクロナデ→ロクロケズリ？→施釉	密(砂粒を殆ど含まない)	良	素地：灰白5Y8/1 釉：灰白10Y7/2に近い	口縁部 2/12残	
425	03304	緑釉陶器 椀	A11 包含層	—	—	高台径 7.0	ロクロナデ→沈線→ロクロナデ→貼付高台ナデ→施釉	密(砂粒を殆ど含まない)	やや良	素地：灰黄2.5Y7/2 釉：緑色	高台部 2/12残	近江Ⅲ中
426	07902	緑釉陶器 瓶	E3 包	7.0	—	—	ロクロナデ→施釉	密(微砂粒含む)	良	素地：灰白5Y7/1 釉：灰白10Y7/2	口縁部 4/12残	
427	04804	灰釉陶器 椀	D9 包含層	—	—	高台径 7.9	ロクロナデ→ナデ→研磨→貼付高台ナデ→ロクロナデ→施釉	密(1mm大の砂粒ごく少)	良	内外面共：灰白5Y7/1	高台部 3/12残	東山72号窯式新
428	04805	灰釉陶器 椀	E5 包含層	—	—	高台径 7.4	ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕→施釉	密(1mm大の砂粒ごく少)	良	内外面共：灰白5Y7/1に近い	高台部 6/12残	折戸53号窯式
429	04907	灰釉陶器 椀	E4 包含層	—	—	高台径 7.2	ロクロナデ→貼付台ナデ→糸切後ナデ	密(0.5mmの砂粒含む)	良	内外面共：灰白5Y8/1	口縁部 2/12残	黒笹90号窯式から折戸53号窯式
430	05002	灰釉陶器 椀	A5 包含層	—	—	高台径 6.8	ロクロナデ→ロクロナデ→貼付台ナデ→糸切痕	密	良	内外面共：灰白5Y7/1	高台部 3/12残	内面研磨・折戸53号窯式
431	03106	灰釉陶器 椀	E2 包含層	14.6	5.4	高台径 8.0	ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切痕	やや密(～0.5mmの砂粒含む)	—	内外面共：灰白7.5Y7/1	口縁1/12残 高台部6/12残	東山72号窯式新
432	04906	灰釉陶器 椀	E3 包含層	15.2	—	—	ロクロナデ	密	良	外：灰白5Y8/2 内：灰白5Y8/1	口縁部 1/12残	黒笹90号窯式
433	03107	灰釉陶器 椀	E3 包含層	—	—	高台径 6.6	ロクロナデ→貼付高台？→施釉	密	良	内外面共：灰白5Y8/1 釉：灰白7.5Y7/2	高台部 1/12残	黒笹90号窯式
434	00105	釘	D2 包含層	6.6	1.2	0.9	—	—	—	—	—	重さ20.43ｇ
435	00104	釘	E9 包含層	14.1	1.3	1.7	—	—	—	—	—	重さ34.66g
436	07601	軒丸瓦	A8 包含層	—	—	—	—	密(2～10mm大の砂粒やや多)	やや良	外：橙5YR6/6 内：にぶい黄橙10YR6/4	—	
437	07407	須恵器 脚	排土	—	—	—	ロクロナデ→ロクロナデ→線刻？	密(0.5mm大の砂粒ごく少)	良	内外面共：灰白N7/0	全体6/12	
438	05007	土師器 甕	排土	—	—	13.5	工具ナデ→ヨコナデ→ハケメ	密(～1mmの砂粒と雲母含む)	—	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 2/12残	
439	05004	陶器 山茶椀	排土	—	—	高台径 7.6	ロクロナデ→貼付台ナデ	密	良	内外面共：灰白2.5Y7/1	高台部 2/12残	渥美５型式
440	05008	土師器 鍋	排土	—	—	27.2	ナデ→ヨコナデ→オサエ	密(3mm大の黒い小石と細砂粒含む)	—	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12残以下	
441	05006	土師器 鍋	排土	—	—	26.9	ヨコナデ	密(雲母含む)	—	外：灰黄褐10YR5/2 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12残	
442	05005	土師器 鍋	排土	—	—	27.6	ヨコナデ→ハケメ	密	—	外：橙5YR7/6 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12残	
443	04902	陶器 鉢	A12 包含層	—	—	底径 10.7	ロクロナデ→ロクロナデ→糸切り	密	良	外：灰白5Y8/1 内：灰白5Y7/1	底部 2/12残	渥美６型式

第11表　出土遺物観察表（８）

Ⅴ　自然科学分析

日鉄住金テクノロジー（株）
八幡事業所　TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

１．いきさつ

大蓮寺遺跡は三重県松阪市櫛田町に所在する。調査地区からは９世紀後半から10世紀後半にかけての掘立柱建物跡や区画溝、火葬墓などが検出されている。またそれに伴い羽口や鉄滓等の鍛冶関連遺物が出土した。当遺跡周辺での鉄器生産の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

２．調査方法

２－１．供試材

第12表(注1)に示す。出土滓６点の調査を行った。

２－２．調査項目

（１）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

（２）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（３）顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3%ナイタル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

（４）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50gfで測定した。

（５）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

日本電子㈱製JXA-8800RL　波長分散型５チャンネル）にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流2.0×10^{-8}アンペア、ビーム径3μm、補正法はZAFに従った。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性Ｘ線像の撮影も適宜行った。

（６）化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、

酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果

DIR－1：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：やや小形で偏平な椀形鍛冶滓の破片（42.0g）である。側面３面は破面。表面は広い範囲で黄～茶褐色の土砂や錆化鉄が付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。また上面は比較的平坦で、下面は細かい木炭痕による凹凸がある。

（２）マクロ組織：写真１①に示す。まとまった鉄部はないが、滓中には微細な不定形の錆化鉄（青灰色部）が散在する。

（３）顕微鏡組織：写真１②③に示す。②は錆化鉄部の拡大である、微かに初析フェライト（Ferrte：α鉄）の痕跡が残存しており、本来、亜共析組織（C＜0.77%）組織の金属鉄部であったと判断される。また③は白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（４）ビッカース断面硬度：写真１③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は423Hv、427Hv、430Hvであった。ウスタイトの文献硬度値(注2)(450～500Hv)よりやや軟質であるが、結晶の色調と形状、および後述するEPMA調査結果から、ウスタイトに同定される。

（５）EPMA調査：写真1④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性Ｘ線像では鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は100.5%FeO（分析点１）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。淡灰色結晶は特性Ｘ像をみると鉄（Fe）、珪素（Si）、カルシウム（Ca）に反応がある。定量分析値は47.1%FeO－18.1%CaO－1.8%MgO－32.7%SiO_2（分析点２）であった。測定個所はライム（CaO）の割合が高く、キルシュテナイト〔Kirschsteinite：$(Ca,Fe)O \cdot SiO_2$〕と推測される。また微小明白色は特性Ｘ線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は101.7%Fe（分析点３）であった。金属鉄（Metallic Fe）である。

（６）化学組成分析：第13表に示す。全鉄分（Total Fe）54.69%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.16%、酸化第１鉄（FeO）35.36%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）38.67%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は17.34%とやや低めで、塩基性成分（CaO＋MgO）も1.65%と低値である。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.21%、バナジウム（V）が0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.19%、銅（Cu）は＜0.01%と低値である。

当鉄滓は鉄分（FeO）および炉材粘土の溶融物（SiO_2主成分）主体の鉄滓であった。製鉄原料の起源の脈石成分（鉄鉱石：CaO、MgO、MnO、砂鉄：TiO2、Vなど）はいずれも低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

DIR－2：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：ごく小形の椀形鍛冶滓の破片（29.0g）である。側面1面は破面と推測される。表面は広い範囲で黄～茶褐色の土砂や錆化鉄が付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。滓表面は上下面とも微細な凹凸がみられる。

（２）マクロ組織：写真２①に示す。写真左下は滓表面に付着した木炭破片である。木材組織中には発達した導管が分布する。広葉樹材の黒炭であった。また滓中には不定形の微細な錆化鉄（青灰色部）が多数散在する。

（３）顕微鏡組織：写真２②③に示す。②は滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また③は錆化鉄部の拡大である。初析フェライトおよび層状のパーライト（Peralite）組織痕跡が残存する。この金属組織（亜共析組織）痕跡から、炭素含有率は0.2%程度の軟鉄であったと推定される。

（４）ビッカース断面硬度：写真２③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は348Hv、415Hv、428Hvであった。ウスタイトの文献硬度値と比較すると軟質であるが、結晶の色調と形状、および後述するEPMA調査結果から、ウスタイトに同定される。

（５）EPMA調査：写真２④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性Ｘ線像では鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は96.3%FeO（分析点２）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。また淡灰色結晶は特性Ｘ線像では、鉄（Fe）、珪素（Si）に反応がみられる。定量分析値は38.6%FeO－41.2%SiO_2－9.1%Al_2O_3－5.2%CaO－1.7%MgO－1.8%Na_2O（分析点５）であった。淡灰色結晶はファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）であるが、結晶が非常に微細なため、測定値は周囲のガラス質滓部分の影響を受けている。素地の暗色部の定量分析値は48.6%SiO_2－16.9%Al_2O_3－7.6%CaO－2.9%Na_2O－19.0%FeO（分析点６）であった。非晶質珪酸塩である。また中央の微小明白色粒の定量分析値は101.8%Fe（分析点２）であった。金属鉄（Metallic Fe）である。

（６）化学組成分析：第13表に示す。全鉄分（Total Fe）44.70%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.08%、酸化第１鉄（FeO）17.96%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）43.97%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は26.21%で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は1.88%と低値である。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.34%、バナジウム（V）が0.02%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.13%、銅（Cu）も＜0.01%と低値であった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓（DIR－1）と同様、鉄分（FeO）および炉材粘土の溶融物（SiO2主成分）主体の鉄滓であった。製鉄原料の起源の脈石成分は低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

DIR－３：含鉄鉄滓

（１）肉眼観察：やや細長い形状の含鉄鉄滓の破片（94.0g）である。側面の多くは破面と推測される。表面は全体が淡褐色の土砂で覆われるが、部分的に黒灰色の滓部が観察される。また特殊金属探知器のＬ（●）で反応があり、下面表層には錆化に伴う放射割れが生じているため、内部には金属鉄が残存するものと判断される。

（２）マクロ組織：写真３①に示す。表層側は暗灰色の滓部であるが、内部には不定形の金属鉄部が確認された。金属鉄中にも不定形の微細な気孔が多数散在しており、鍛打加工前のものと推測される。

（３）顕微鏡組織：写真３②③に示す。②の左上は滓部で、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。金属鉄部の酸化に伴うものといえる。また②の明色部および③は金属鉄で、3%ナイタルで腐食した組織を示している。ほとんど炭素を含まないフェライト単相に近い組織から、亜共析組織（C＜0.77%）が確認された。この金属組織の観察結果から、鉄中の炭素含有率は0.1%以下～0.4%前後と推測される。

（４）ビッカース断面硬度：写真３②の金属鉄部の硬度を測定した。白色多角形状のフェライト結晶の硬度値は91Hv、フェライトおよび黒色層状のパーライトが析出する個所の硬度値は144Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。

また滓中の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は469Hv、488Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。

（５）EPMA調査：写真３④に粒状の鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。特性Ｘ線像では珪素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）に反応がある。定量分析値は49.7%SiO_2－12.1%Al_2O_3－9.3%CaO－1.6%MgO－1.4%Na_2O－16.8%FeO（分析点11）であった。非晶質珪酸塩である。

もう１視野、滓部の調査を実施した。白色粒状結晶の定量分析値は96.6%FeOであった（分析点７）。ウスタイト（Wustite:FeO）に同定される。また暗色微結晶の定量分析値は59.0%FeO－44.5%Al_2O_3－1.2%MgOであった（分析点８）。ヘルシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）で、少量マグネシア（MgO）を固溶する。淡灰色柱状結晶の定量分析値は60.1%FeO－4.4%CaO－3.2%MgO－32.3%SiO_2（分析点９）であった。ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）で少量ライム（CaO）、マグネシア（MgO）を固溶する。さらに素地の暗色部の定量分析値は50.0%SiO_2－28.4%Al_2O_3－5.0%CaO－2.2%Na_2O－3.2%P_2O_5－2.7%FeO（分析点10）であった。非晶質珪酸塩である。

（６）化学組成分析：第13表に示す。全鉄分（Total Fe）が59.10%と高値傾向を示す。このうち金属鉄（Metallic Fe）は5.50%、酸化第１鉄（FeO）18.03%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）56.60%の割合である。金属鉄部

やその錆化物を反映した値といえる。一方造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）11.56%と低めで、塩基性成分（CaO＋MgO）も0.82%と低値である。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.15%、バナジウム（V）が0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.05%と極低値。銅（Cu）は<0.01%と低値である。

当鉄滓中の金属鉄内の気孔や非金属介在物には、鍛打に伴って展伸した痕跡がないため、鍛打作業前の遺物と判断される。一方付着滓は鍛錬鍛冶滓と同様、鉄素材の酸化に伴って生じたと考えられる鉱物組成（ウスタイト・ファヤライト）であった。この結果から当含鉄鉄滓は鍛冶原料鉄の炭素含有率の調整後、鍛打作業前の鍛冶関連遺物と推定される。銑（鋳鉄）の脱炭を行った可能性が考えられる。また金属鉄部の炭素含有率は部位によりばらつきがあるが、0.1%以下～0.4%程度の鋼と推定される。

DIR－4：鍛冶滓

（１）肉眼観察：やや小形で不定形の鍛冶滓（37.0g）である。側面１面は破面と推定される。また表面全体は黄褐色の土砂で覆われ、着磁性もあるが、まとまった鉄部はみられない。部分的に暗灰色で細かい気孔のある滓部が観察される。

（２）マクロ組織：写真４①に示す。滓中にまとまった鉄部はないが、不定形の微細な錆化鉄（青灰色部）が多数散在する。

（３）顕微鏡組織：写真４②③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）、白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。

（４）ビッカース断面硬度：写真４②の滓部の硬度を測定した。硬度値は529Hvであった。ウルボスピネルとしてはやや軟質であるが、測定時の亀裂の影響を受けたためと考えられる。後述のEPMA調査結果からも、ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）組成に近い結晶と判断される。また白色粒状結晶の硬度値は489Hv、498Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトと推定される。

（５）EPMA調査：写真４④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。淡茶褐色多角形結晶は特性Ｘ線像では鉄（Fe）、チタン（Ti）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は66.9%FeO－24.1%TiO_2－4.1%Al_2O_3（分析点12）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）で、少量アルミナ（Al_2O_3）を固溶する。また白色粒状結晶の周囲や内部の淡茶褐色微結晶の定量分析値も71.3%FeO－20.3%TiO_2－3.0%Al_2O_3（分析点13）、68.1%FeO－21.5%TiO_2－3.6%Al_2O_3（分析点14）であった。やはりウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）で、少量アルミナ（Al_2O_3）を固溶する。

（６）化学組成分析：第13表に示す。全鉄分（Total Fe）55.10%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.09%、酸化第１鉄（FeO）22.16%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）54.03%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は11.59%と低めで、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）も0.64%と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は1.21%、バナジウム（V）0.10%であった。当出土鉄滓中では高値傾向が顕著である。また酸化マンガン（MnO）は0.09%、銅（Cu）は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響が明瞭に残る。この特徴から砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓に分類される。〔ただし精錬鍛冶滓としては、チタン含有率はかなり低め（TiO_2：1.21%）であり、多少不純物の影響が残っていても、熱間での鍛打加工が始まっていた可能性も考えられる。〕

DIR－5：銅滓

（１）肉眼観察：小形で不定形の鉱滓破片（24.0g）である。微細な気孔が点在するガラス質部分と淡灰色の滓部とが混在する。滓部には弱い着磁性がある。また表面には茶色の錆化物が薄く広範囲に付着しているが、極めて局所的に淡緑色部が観察される。銅関連遺物の可能性も考慮する必要がある。

（２）マクロ組織：写真５①に示す。上下面はガラス質滓である。特に下側部分には熱影響を受けた微細な岩石片が混在しており、炉材粘土中の混和物と推測される。また中央には滓部が観察される。

（３）顕微鏡組織：写真５②③に示す。②は上側のガラス質滓部分の拡大である。滓中の非常に微細な淡橙色粒は金属銅（Cu）と推定される。一方、③は中央の滓部の拡大である。灰褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：$FeO{\cdot}Fe_2O_3$）と推定される。さらに白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶

ファヤライトが晶出する。

（４）ビッカース断面硬度：写真５③の淡灰色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は620Hv、640Hvであった。マグネタイトの文献硬度値（500～600Hv）より、やや硬質の値を示す。これは後述のEPMA調査結果から、アルミナ（Al_2O_3）を微量固溶するためと判断される。また白色樹枝状結晶の硬度値は357Hv、464Hvであった。前者は異常値であるが、後者はウスタイトの文献硬度値の範囲内である。EPMA調査結果からもウスタイトと推定される。

（５）EPMA調査：写真５④にガラス質滓の反射電子像（COMP）を示す。滓中の微細な金属粒は特性Ｘ線像をみると銅（Cu）に強い反応がある。定量分析値は77.5%Cu（分析点５）、83.7%Cu（分析点６）であった。金属銅（Metallic Cu）と推定される。〔他の元素については周囲のガラス質滓部分の影響を受けた値と考えられる。〕素地部分の定量分析値は73.2%SiO_2－19.0%Al_2O_3－3.1%Na_2O－2.5%FeO（分析点22）であった。非晶質珪酸塩である。

もう１視野、滓部の調査を実施した。写真５⑤に滓部の反射電子像（COMP）を示す。淡灰色柱状結晶は特性Ｘ線像では、鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は60.0%FeO－5.6%CaO－2.7%MgO－33.1%SiO_2（分析点19）であった。ファヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）で、少量ライム（CaO）、マグネシア（MgO）を固溶する。また灰褐色多角形結晶と白色粒状結晶は、特性Ｘ線像ではともに鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は前者が90.0%FeO－4.6%Al_2O_3（分析点20）であった。マグネタイト（Magnetite：$FeO\cdot Fe_2O_3$）で、少量アルミナ（Al_2O_3）を固溶する。後者の定量分析値は103.6%FeO（分析点21）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。

（６）化学組成分析：第13表に示す。全鉄分（Total Fe）は35.24%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.18%、酸化第１鉄（FeO）32.61%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）13.89%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は46.77%と高値で、塩基性成分（CaO＋MgO）も7.74%と高めである。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.41%、バナジウム（V）が0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）は0.19%、銅（Cu）は0.04%と高めであった。

ガラス質滓中に微細な金属銅が複数確認されたことから、当鉱滓は銅小物などの製作に関わる遺物（銅滓）と推測される。

DIR－６：鍛冶滓

（１）肉眼観察：非常に小形の鍛冶滓破片（9.0g）である。破面以外は全体が黄褐色の土砂で覆われる。また表面には錆化に伴う弱い放射割れがあり、破面（１面）も錆化に伴う剥離面の可能性があるが、素地部分は灰褐色の風化が進んだ滓部であり、まとまった鉄部を含むものではない。

（２）マクロ組織：写真６①に示す。まとまった鉄部ではないが、滓中に広い範囲で不定形の錆化鉄（青灰色部）が観察される。

（３）顕微鏡組織：写真６②③に示す。②および③右下は滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。また③左側は錆化鉄部の拡大である、微かに初析フェライトの痕跡が残存しており、本来、亜共析組織（C＜0.77%）組織の金属鉄部であったと判断される。

（４）ビッカース断面硬度：写真６②の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は385Hv、455Hvであった。前者は周囲の風化が進んでいるための異常値と判断される。後述のEPMA調査結果からもウスタイトに同定される。

（５）EPMA調査：写真６④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性Ｘ線像では、鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は100.3%FeO（分析点23）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。淡灰色柱状結晶は特性Ｘ線像では、鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は52.9%FeO－2.2%CaO－1.4%MgO－36.8%SiO_2（分析点24）であった。ファヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）で、少量ライム（CaO）、マグネシア（MgO）を固溶する。また中央の微小明白色部の定量分析値は102.9%Fe(分析点７）であった。金属鉄（Metallic Fe）である。

（６）化学組成分析：第13表に示す。全鉄分（Total Fe）47.58%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.10%、酸化第１鉄（FeO）20.41%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）45.20%

の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は21.02%で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は1.15%と低値である。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.24%、バナジウム（V）が0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）も0.08%、銅（Cu）＜0.01%と低値である。

当鉄滓は椀形鍛冶滓（DIR－1、2）と同様に、鉄分（FeO）および炉材粘土の溶融物（SiO_2主成分）主体の鉄滓であった。製鉄原料の起源の脈石成分は低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

４．まとめ

10世紀後半以降の集落跡である大蓮寺遺跡（第２次）から出土した滓を調査した結果、次の点が明らかになった。

〈１〉鍛冶滓（DIR－4）は精錬鍛冶工程末期（または鍛錬鍛冶工程のごく初期）の反応副生物と推定される。滓中にはウルボスピネル（Ulvösopinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）結晶が晶出しており、鍛冶原料鉄の始発原料が砂鉄であることが明らかとなった。

現在の三重県内では、製鉄原料となる資源〔砂鉄や塊状の鉄鉱石（磁鉄鉱など)〕が乏しいため、近代以前も基本的には交易によって鉄素材を入手してきたものと推察される。これまで古代以降の出土鉄滓の分析調査も多数実施されてきたが、ほぼ鍛錬鍛冶滓〔チタン（TiO_2）含有率が1%以下の鍛冶滓〕であり、いわゆる砂鉄系精錬鍛冶滓の確認事例としては初例といえる。

古代の近畿～東海地域では、特に近江で塊状の鉄鉱石（磁鉄鉱）を製鉄原料とした鉄生産が盛んに行われていたことが知られている。しかし10世紀には近江では製鉄遺跡がほとんどみられなくなる。10世紀後半には砂鉄製錬でつくられた鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）が流通していたことを示すものとしても非常に注目される。

〈２〉また椀形鍛冶滓（DIR－1、2)、鍛冶滓（DIR－6）は鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄素材を熱間で鍛打加工して、鉄器を製作していたことを示す遺物である。

〈３〉含鉄鉄滓（DIR－3）中には、鍛打作業前の不定形の金属鉄部が確認された。炭素含有率は部位によってばらつきがあり、0.1%以下から0.4%前後と推定される。この金属鉄部をさらに加工する場合、鍛錬によってさらに炭素含有率は下がると予測されるため、柔らかさと加工性を要求される地金（軟鉄材）に向いた性状と考えられる。

また付着滓は鍛冶滓（DIR－4）のようなウスボスピネル結晶はなく、鍛錬鍛冶滓（DIR－1、2、6）と同様の鉱物組成であった。鉄素材の酸化によるものと判断される。銑（鋳鉄）の脱炭処理後の遺物の可能性も考えられる。

〈４〉銅滓（DIR－5）は滓中に非常に微細な金属銅が多数含まれており、銅小物の製作に伴う遺物と判断される。やや時期は下がるが、近接する朝見遺跡（第2次）においても鍛冶関連遺物とともに坩堝が出土している。地域周辺では鍛造鉄器の製作とともに銅（青銅）小物の製作も実施していたと推定される。

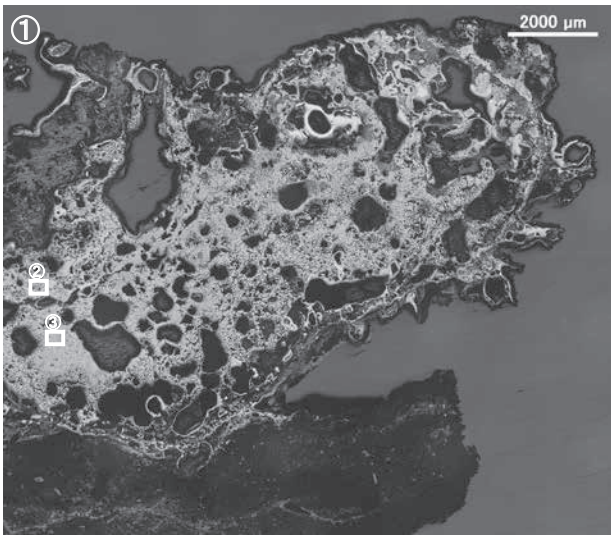
［註］

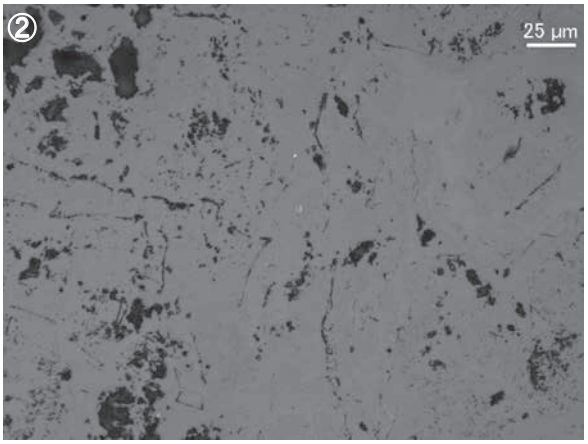
（１）穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題－鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について－」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム　鉄関連遺物分析評価研究グループ　2005[メタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を、非破壊で推定するため調整された、特殊金属探知機を使用した判定法のことを指す。感度は三段階〔H：high（○)、M：middle（◎)、L：low（●)〕に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。]

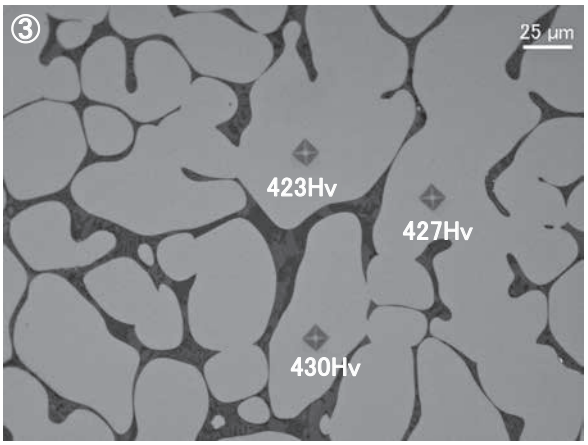
（２）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

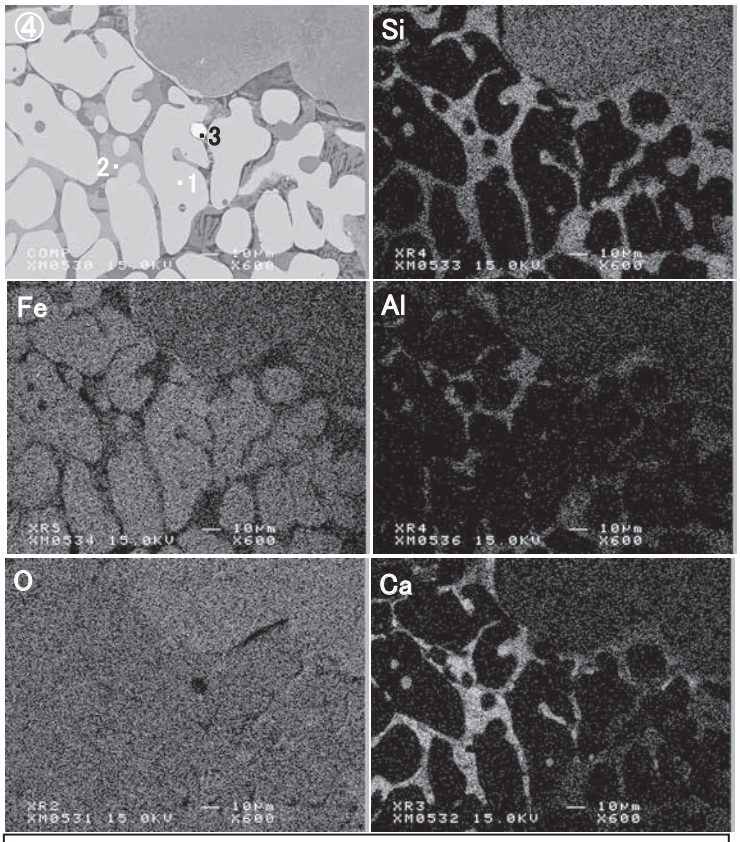
ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ（Al）が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘルシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

DIR-1
椀形鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②錆化鉄部拡大、亜共析組織痕跡
③滓部拡大、ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、硬度:50gf









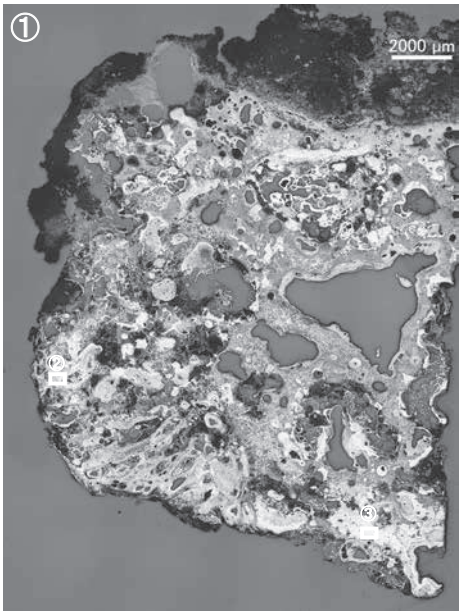
滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

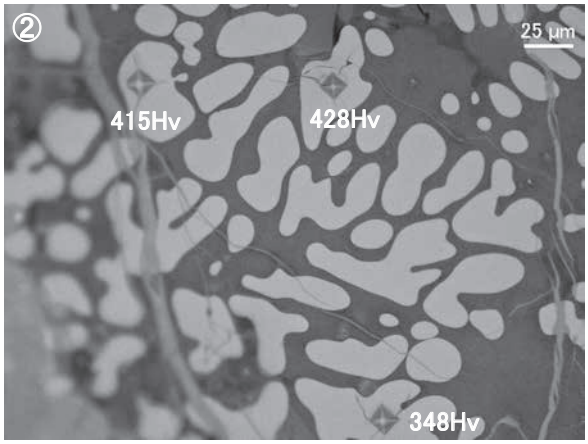
定量分析値

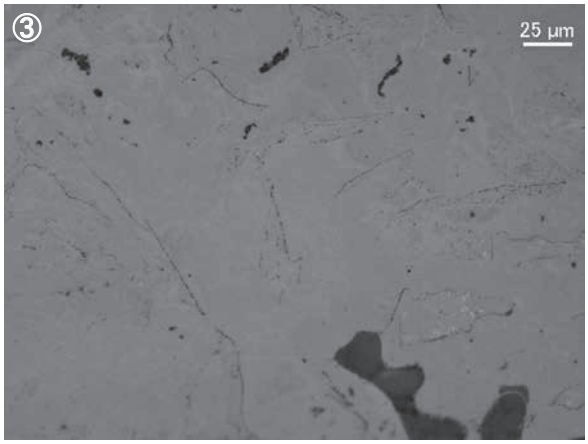
Element	1	2	Element	3
Na_2O	0.037	0.218	P	0.050
MgO	0.469	1.753	S	0.009
Al_2O_3	0.466	0.010	Ti	0.170
SiO_2	0.183	32.723	Fe	101.733
P_2O_5	–	0.260	Cu	0.021
S	–	0.002	Sn	0.033
K_2O	–	–	Total	105.016
CaO	–	18.083		
TiO_2	0.199	–		
Cr_2O_3	–	–		
MnO	0.125	0.228		
FeO	100.549	47.116		
As_2O_5	0.026	–		
V_2O_3	–	–		
PbO	0.048	–		
CuO	–	–		
SnO_2	–	–		
Total	102.102	100.393		

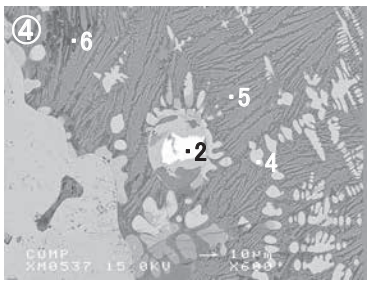
写真１　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果

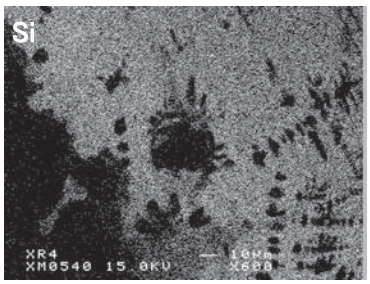
DIR-2
椀形鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織、左下木炭:破片、広葉樹材
②滓部拡大、ｳｽﾀｲﾄ、硬度:50gf
③錆化鉄部拡大、亜共析組織痕跡

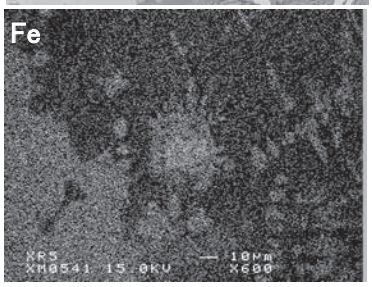


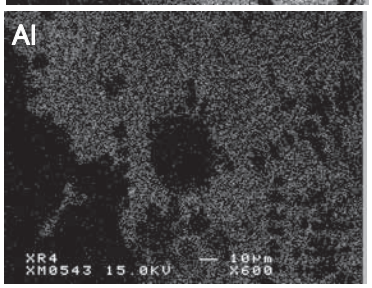


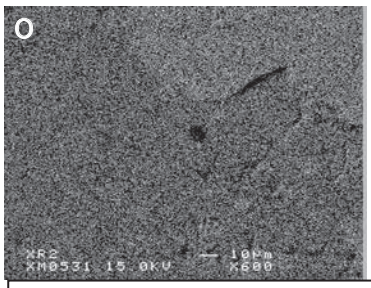


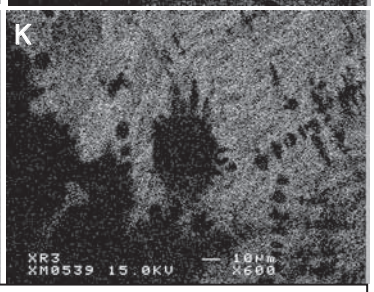












滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

定量分析値

Element	4	5	6
Na_2O	–	1.797	2.926
MgO	0.416	1.692	0.169
Al_2O_3	0.479	9.137	16.904
SiO_2	0.302	41.157	48.589
P_2O_5	0.030	0.417	0.858
S	0.002	0.007	0.102
K_2O	–	0.105	0.207
CaO	0.100	5.191	7.625
TiO_2	0.570	0.209	0.833
Cr_2O_3	0.011	0.028	0.015
MnO	0.125	0.187	0.047
FeO	96.322	38.566	18.993
As_2O_5	0.073	–	–
V_2O_3	0.056	–	0.019
PbO	0.094	–	–
CuO	–	0.028	–
SnO_2	0.021	–	–
Total	98.601	98.521	97.287

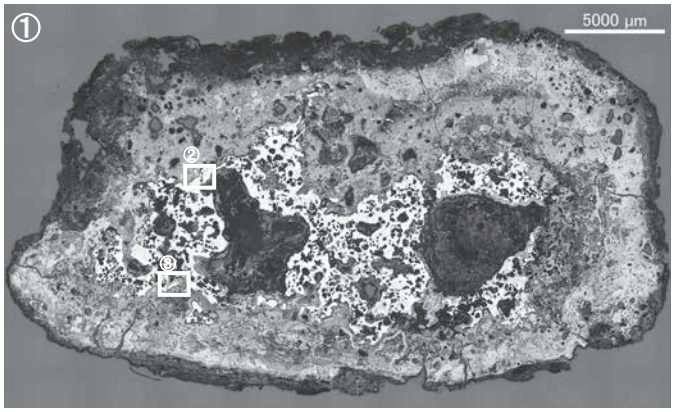
Element	2
Na	0.060
Al	0.010
Si	0.017
K	0.012
Ti	0.109
Cr	0.043
Mn	0.009
Fe	101.760
Total	102.020

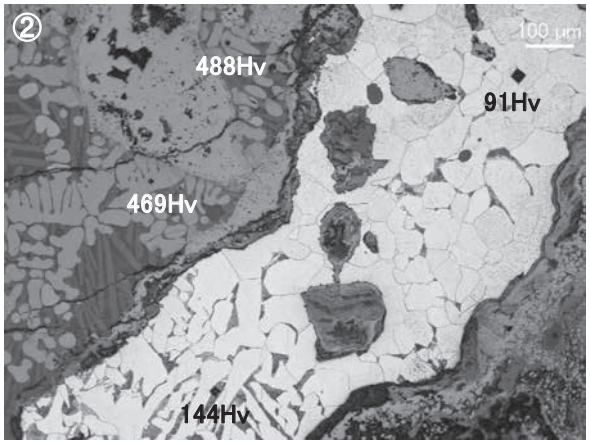
写真２　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果

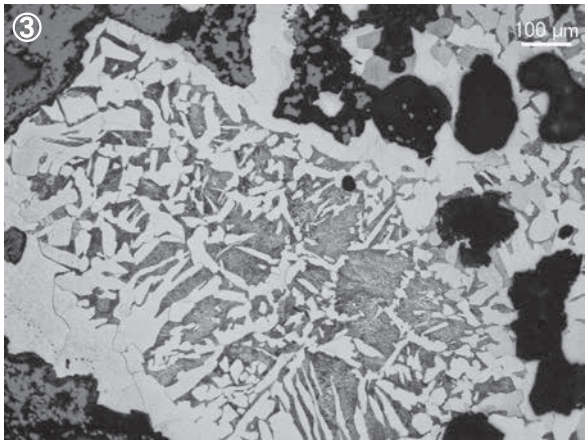
DIR-3

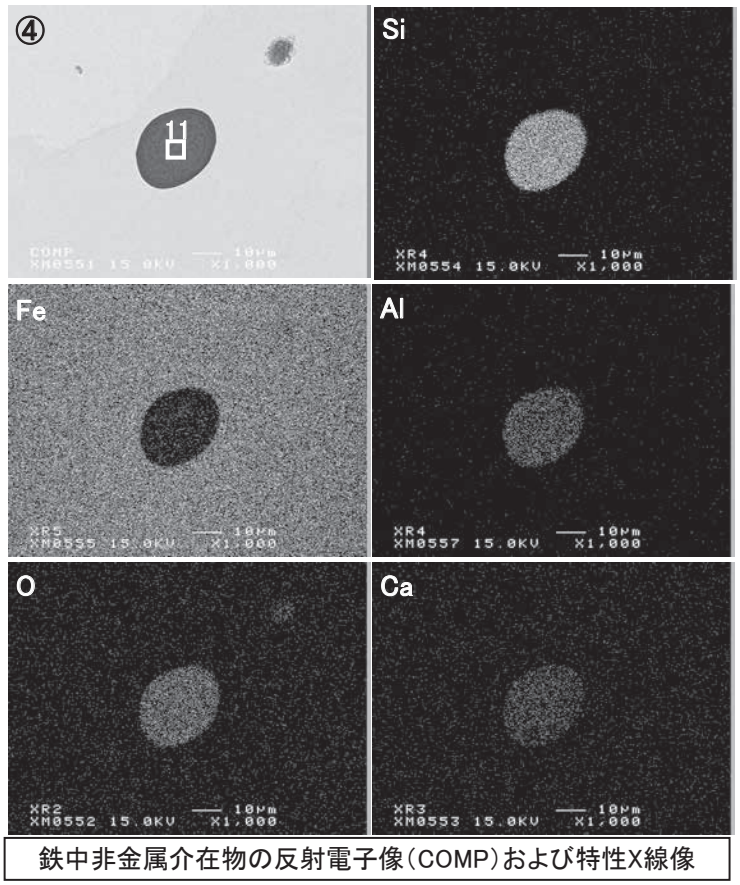
含鉄鉄滓

①ﾏｸﾛ組織、金属鉄部:ﾅｲﾀﾙetch ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織、
②滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、金属鉄部亜共析組織、硬度:50gf
③金属鉄部:亜共析組織

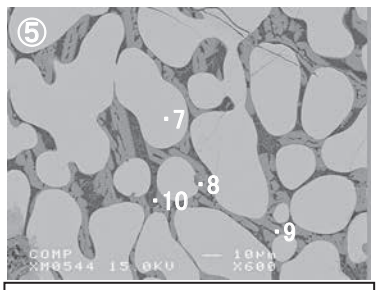








鉄中非金属介在物の反射電子像(COMP)および特性X線像



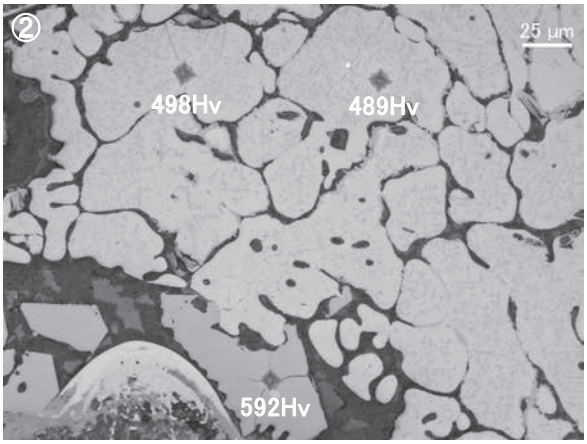
滓部の反射電子像(COMP)

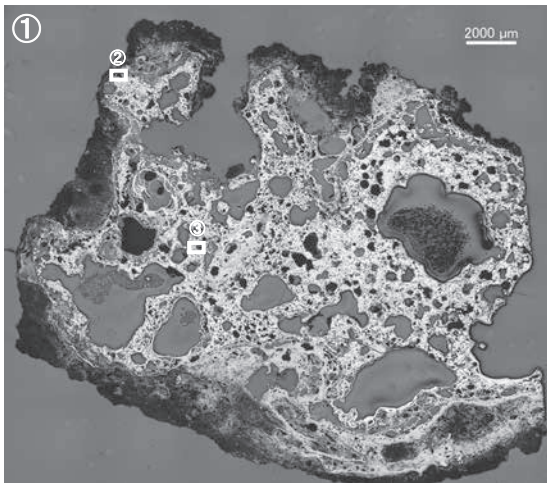
定量分析値

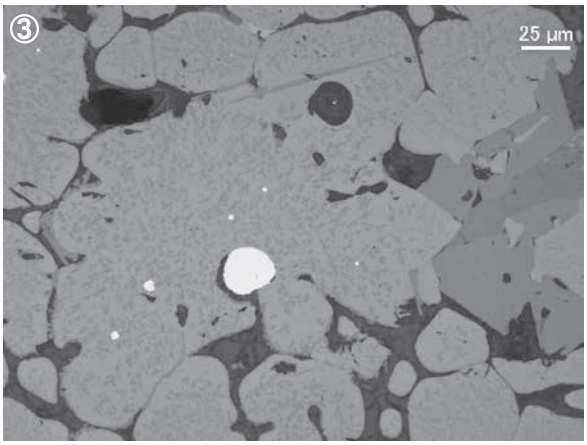
Element	7	8	9	10	11
Na_2O	–	–	0.215	2.193	1.409
MgO	0.424	1.215	3.231	0.050	1.589
Al_2O_3	0.776	44.546	0.373	28.389	12.131
SiO_2	0.278	0.525	32.321	49.969	49.673
P_2O_5	0.008	0.010	0.160	3.215	0.562
S	0.013	0.012	–	0.012	0.002
K_2O	–	–	–	0.510	0.110
CaO	–	0.101	4.352	5.002	9.343
TiO_2	0.260	0.600	0.016	–	0.668
Cr_2O_3	0.034	0.114	–	–	0.020
MnO	0.234	0.179	0.463	0.022	0.536
FeO	96.582	59.001	60.088	2.737	16.849
As_2O_5	–	0.026	0.054	–	0.036
V_2O_3	0.041	0.117	0.014	–	–
PbO	–	–	0.007	–	–
CuO	–	0.031	–	–	–
SnO_2	–	0.064	–	–	–
Total	98.650	106.541	101.294	92.099	92.928

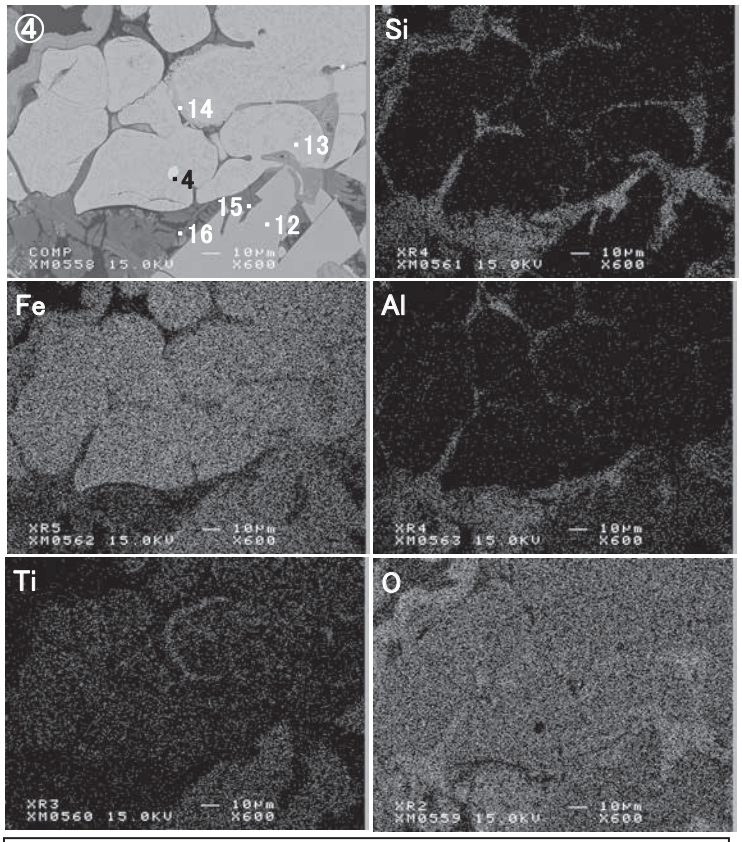
写真３　含鉄鉄滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果

DIR-4
鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②③滓部:ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ･ｳｽﾀｲﾄ、硬度:50gf









滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

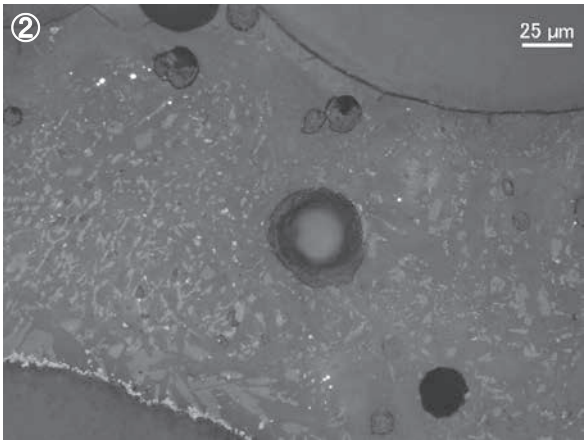
定量分析値

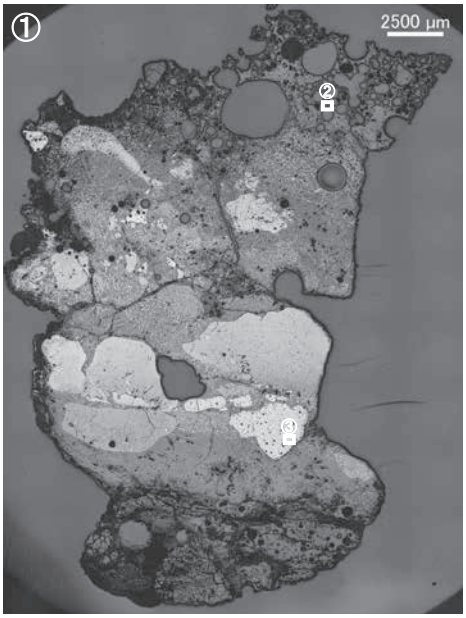
Element	12	13	14
Na_2O	–	0.034	0.027
MgO	0.439	0.460	0.396
Al_2O_3	4.062	2.980	3.564
SiO_2	0.059	0.109	0.219
P_2O_5	–	0.006	0.021
S	–	0.007	–
K_2O	–	–	–
CaO	–	–	–
TiO_2	24.132	20.272	21.525
Cr_2O_3	0.993	0.769	0.590
MnO	0.321	0.471	0.442
FeO	66.852	71.297	68.066
As_2O_5	–	–	–
V_2O_3	0.930	0.771	0.694
PbO	0.084	0.035	0.017
CuO	–	0.092	–
SnO_2	–	0.034	–
Total	97.872	97.337	95.561

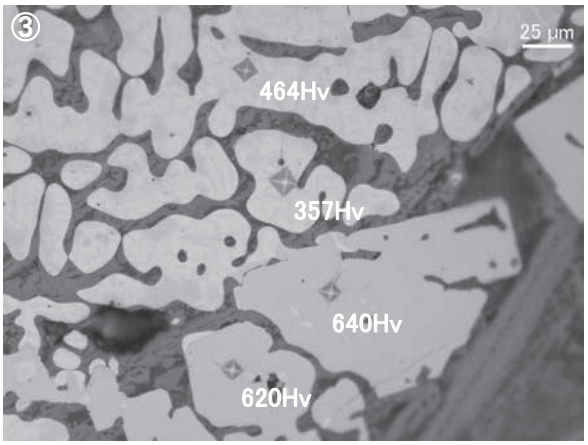
Element	4
Na	0.005
Si	0.014
P	0.019
S	0.003
Ti	0.448
Cr	0.013
Mn	0.060
Fe	101.904
Cu	0.003
As	0.049
O	0.025
Total	102.543

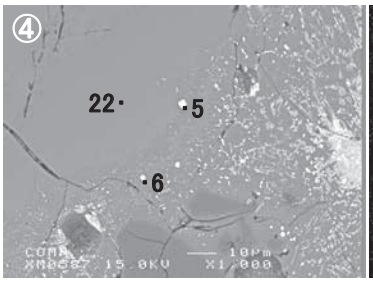
写真４　鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果

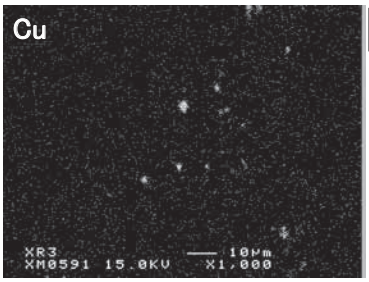
DIR-5
銅滓？
①ﾏｸﾛ組織
②滓部拡大、ｳｽﾀｲﾄ･ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ

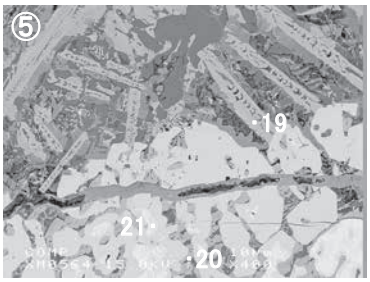


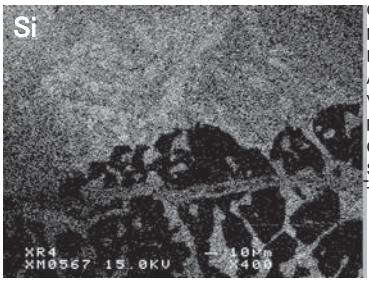


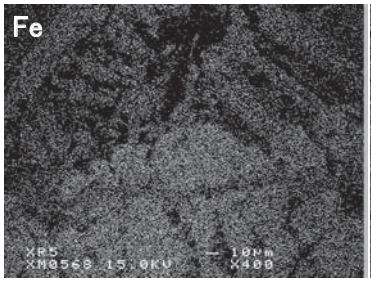


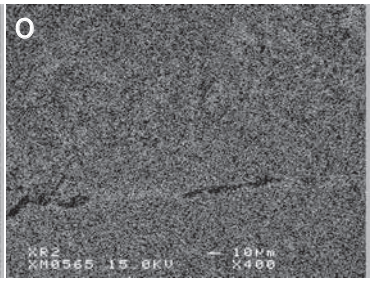












定量分析値

Element	19	20	21
Na_2O	0.018	0.014	–
MgO	2.722	0.148	0.333
Al_2O_3	0.047	4.639	0.176
SiO_2	33.075	0.275	0.213
P_2O_5	0.053	–	–
S	–	–	0.002
K_2O	–	–	–
CaO	5.625	–	–
TiO_2	0.062	0.728	0.078
Cr_2O_3	–	–	0.008
MnO	0.446	0.145	0.125
FeO	60.044	90.015	103.572
As_2O_5	0.103	–	0.042
V_2O_3	0.004	0.013	0.005
PbO	0.025	–	0.059
CuO	–	–	–
SnO_2	–	–	0.094
Total	102.224	95.977	104.707

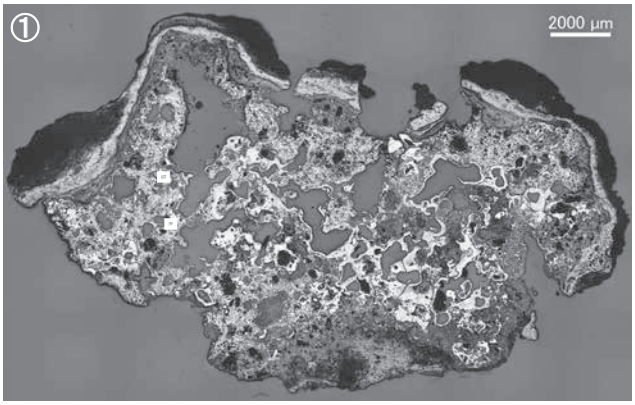
Element	22
Na_2O	3.085
MgO	0.261
Al_2O_3	18.973
SiO_2	73.183
S	0.013
K_2O	0.124
CaO	0.810
FeO	2.544
V_2O_3	0.001
Total	98.994

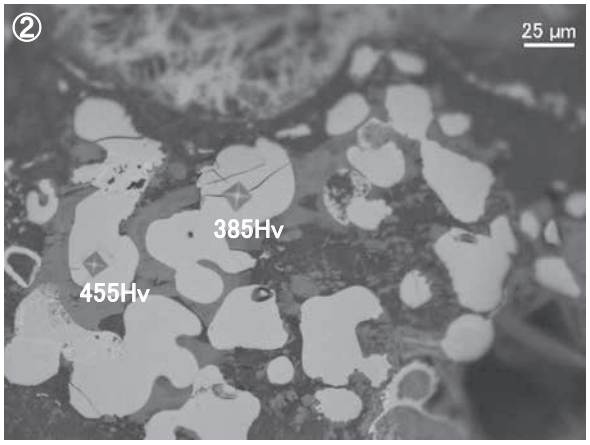
Element	5	6
Na	0.240	0.821
Mg	0.012	0.142
Al	1.639	2.424
Si	5.207	6.542
P	0.022	0.039
S	0.005	0.005
K	1.258	1.114
Ca	0.312	0.153
Ti	0.192	0.286
Mn	–	0.026
Fe	0.628	1.201
Zr	0.059	–
Cu	77.478	83.690
As	0.017	0.033
Sn	0.009	0.022
Pb	0.015	0.024
O	–	3.493
Ag	0.205	0.178
Total	87.298	100.193

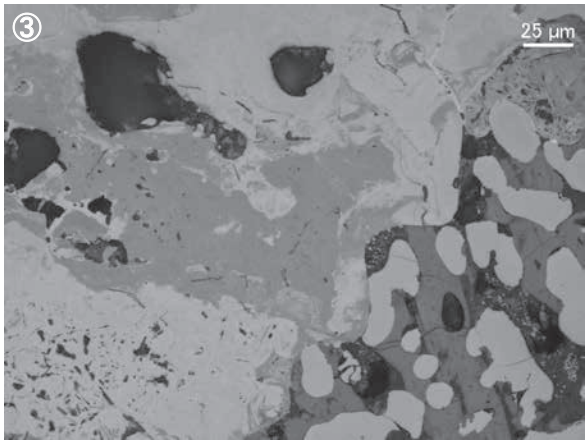
滓部の反射電子像（COMP）および特性X線像

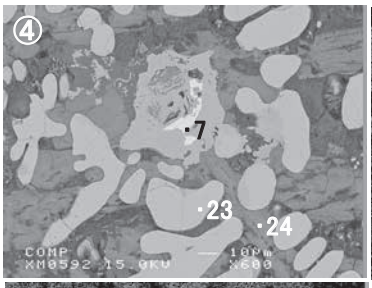
写真５　銅滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果

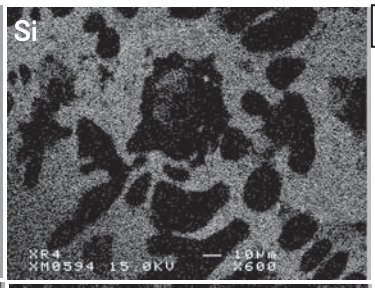
DIR-6
鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②滓部拡大、ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、硬度:50gf
③左上銹化鉄、亜共析組織痕跡

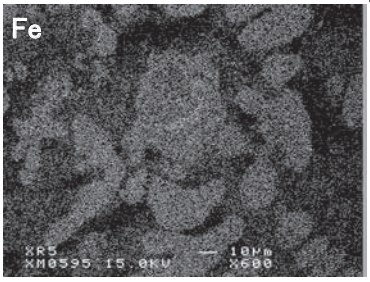


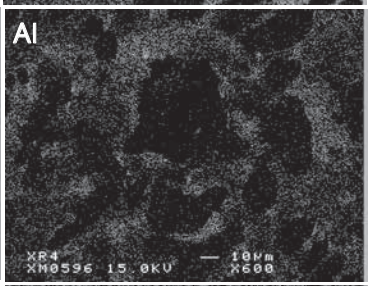


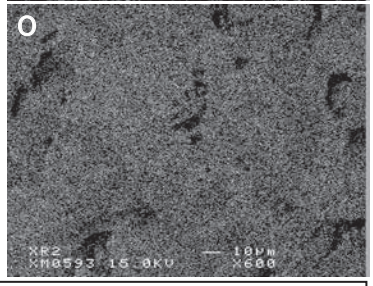












定量分析値

Element	23	24
Na_2O	–	0.058
MgO	0.073	1.408
Al_2O_3	0.742	3.003
SiO_2	0.273	36.758
P_2O_5	0.040	0.191
S	0.002	0.008
CaO	–	2.244
TiO_2	0.446	0.054
Cr_2O_3	0.030	–
MnO	0.059	0.163
FeO	100.325	52.852
As_2O_5	–	0.026
PbO	–	0.049
Total	101.990	96.814

Element	7
Si	0.011
Fe	102.889
Cu	0.010
Pb	0.026
Total	109.936

滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

写真６　鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ結果

第12表　供試材の履歴と調査項目

符号	地区名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目									備考
						大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー		
DIR-1	大蓮寺（第2次）	C9 SD20	1	椀形鍛冶滓	9C後半～10c後半	44×38×20	42.0	なし	○	○	○		○	○				
DIR-2		C6 Pit7	2	椀形鍛冶滓		31×32×18	29.0	なし	○	○	○		○	○				
DIR-3		G8 Pit3	3	含鉄鉄滓		63×35×22	94.0	L(●)	○	○	○		○	○				
DIR-4		G3 Pit1	4	鍛冶滓		50×32×23	37.0	なし	○	○	○		○	○				
DIR-5		G6 SD9	5	銅滓（緑青付？）		30×25×25	24.0	なし	○	○	○		○	○				
DIR-6		F7 Pit4	6	鍛冶滓		28×22×16	9.0	錆化（△）	○	○	○		○	○				

第13表　供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	＊二酸化珪素 (SiO_2)	＊酸化アルミニウム (Al_2O_3)	＊酸化カルシウム (CaO)	＊酸化マグネシウム (MgO)	＊酸化カリウム (K_2O)	＊酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	Σ＊造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
DIR-1	大蓮寺（第2次）	C9 SD20	椀形鍛冶滓	9C後半～10c後半	54.69	0.16	35.36	38.67	11.13	3.59	1.13	0.52	0.68	0.29	0.19	0.21	0.01	0.040	0.51	0.51	0.01	<0.01	<0.01	17.34	0.317	0.004
DIR-2		C6 Pit7	椀形鍛冶滓		44.79	0.08	17.96	43.97	17.31	5.73	1.19	0.69	0.97	0.32	0.13	0.34	0.01	0.071	0.66	0.67	0.02	<0.01	0.01	26.21	0.585	0.008
DIR-3		G8 Pit3	含鉄鉄滓		59.10	5.50	18.03	56.60	7.98	2.21	0.40	0.42	0.35	0.20	0.05	0.15	0.01	0.13	0.53	0.29	0.01	<0.01	<0.01	11.56	0.196	0.003
DIR-4		G3 Pit1	鍛冶滓		55.10	0.09	22.16	54.03	8.10	2.40	0.25	0.39	0.27	0.18	0.09	1.21	0.06	0.079	0.48	0.86	0.10	<0.01	0.01	11.59	0.210	0.022
DIR-5		G6 SD9	銅滓（緑青付？）		35.24	0.18	32.61	13.89	27.84	7.82	6.05	1.69	2.45	0.92	0.19	0.41	0.04	0.020	0.80	0.50	0.01	0.04	0.01	46.77	1.327	0.012
DIR-6		F7 Pit4	鍛冶滓		47.58	0.10	20.41	45.20	15.41	3.94	0.69	0.46	0.31	0.21	0.08	0.24	0.01	0.036	1.59	0.79	0.01	<0.01	<0.01	21.02	0.442	0.005

第14表　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
DIR-1	大蓮寺（第2次）	C9 SD20	椀形鍛冶滓	9C後半～10c後半	滓部:W+F、錆化鉄部:亜共析組織痕跡	54.69	38.67	1.65	0.21	0.01	0.19	17.34	<0.01	鍛錬鍛冶滓
DIR-2		C6 Pit7	椀形鍛冶滓		木炭破片:広葉樹材、滓部:W+F、錆化鉄部:亜共析組織痕跡	44.79	43.97	1.88	0.34	0.02	0.13	26.21	<0.01	鍛錬鍛冶滓
DIR-3		G8 Pit3	含鉄鉄滓		滓部:W+F、金属鉄部:ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織	59.10	56.60	0.82	0.15	0.01	0.05	11.56	<0.01	鍛打作業前の不定形な金属鉄（鋼、C:0.1～0.4%程度）を含む含鉄鉄滓。銑鉄の脱炭を行った可能性も考えられる。
DIR-4		G3 Pit1	鍛冶滓		滓部:U+W	55.10	54.03	0.64	1.21	0.10	0.09	11.59	<0.01	精錬鍛冶末期〔または鍛錬鍛冶のごく初期〕の反応副生物（始発原料:砂鉄）
DIR-5		G6 SD9	銅滓（緑青付？）		滓部:ｶﾞﾗｽ質滓、微小銅粒、滓部:W+M+F	35.24	13.89	7.74	0.41	0.01	0.19	46.77	0.04	銅小物の製作に関わる滓
DIR-6		F7 Pit4	椀形鍛冶滓		滓部:W+F、錆化鉄部:亜共析組織痕跡	47.58	45.20	1.15	0.24	0.01	0.08	21.02	<0.01	鍛錬鍛冶滓

W:Wustite（FeO）、M:Magnetite（$FeO \cdot Fe_2O_3$）、F:Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）、U:Ulvöspinel（$2FeO \cdot TiO_2$）

第Ⅵ章　まとめ

1　遺構から

集落の様相から　今回の発掘調査の成果は、掘立柱建物６棟・区画溝２条・土坑４基を検出したことである。とりわけ、平安時代の掘立柱建物と区画溝で区切られた集落跡を確認したことは、県内の発掘調査例においても重要な成果である。

県内の発掘調査例からすると平安時代（９世紀～12世紀前半）の集落跡を確認した成果は、少ない。

過去の調査例には、奈良時代後期（８世紀後半）から室町時代前半（14世紀中頃）までの亀山市糀谷垣内遺跡、９世紀前半から10世紀前半・13世紀前半の鈴鹿市国分東遺跡、11世紀前半の津市位田遺跡、平安時代の掘立柱建物が逆Ｌ字形の計画的配置が成されている津市六大Ｂ遺跡、10～11世紀の松阪市堀町遺跡がある。

しかしながら、今回のような区画溝を伴う整然とした掘立柱建物群の集落を検出した例はない。そういった点からするとこの時期の集落の様相を確認できたことは、重要なことである。また、調査区の東側にまで掘立柱建物が検出できたことから、大蓮寺遺跡は、東側に広がることが想定される。第１次調査では、奈良時代の遺構・遺物が確認していることから、東側の中心時期は、奈良時代かもしれない。

そして、大蓮寺遺跡は、櫛田川左岸域沖積平野の中で微高地に立地するとみられる。おそらく、大蓮寺遺跡から朝見遺跡にかけての集落は、櫛田川が氾濫しても水に浸からないような箇所、つまり南の丘陵地帯から延びてきている微高地（櫛田川浸食作用によって形成された）の各所に集落が営まれたと推測できよう。

掘立柱建物の変遷　次に掘立柱建物の変遷[①]についてみておきたい。出土遺物から掘立柱建物ＳＢ46（10世紀末）・掘立柱建物ＳＢ47（10世紀末）・掘立柱建物ＳＢ48（10世紀後葉）・掘立柱建物ＳＢ49（10世紀中葉）・掘立柱建物ＳＢ50（10世紀後葉）・掘立柱建物ＳＢ51（11世紀後半）に区分される。

掘立柱建物は、掘立柱建物ＳＢ49から始まり掘立柱建物ＳＢ48と50、掘立柱建物ＳＢ46と47、掘立柱建物ＳＢ51へと続く。掘立柱建物ＳＢ50は、時期不明だが建物の並びにおいて掘立柱建物ＳＢ48と同時期と考えられる。

掘立柱建物と区画溝の位置関係[②]　ここで掘立柱建物群と区画溝の位置関係についてみておく。10世紀中葉の掘立柱建物ＳＢ49と区画溝ＳＤ20の南北間は、15尺で、ＳＢ49と区画溝ＳＤ21の東西間は35尺である。

10世紀後葉の掘立柱建物ＳＢ48とＳＢ50はそれぞれの北側と南側の梁行を揃えてある。ＳＢ48と区画溝ＳＤ20の南北間は10尺で、ＳＢ48と区画溝ＳＤ21の東西間は28尺である。

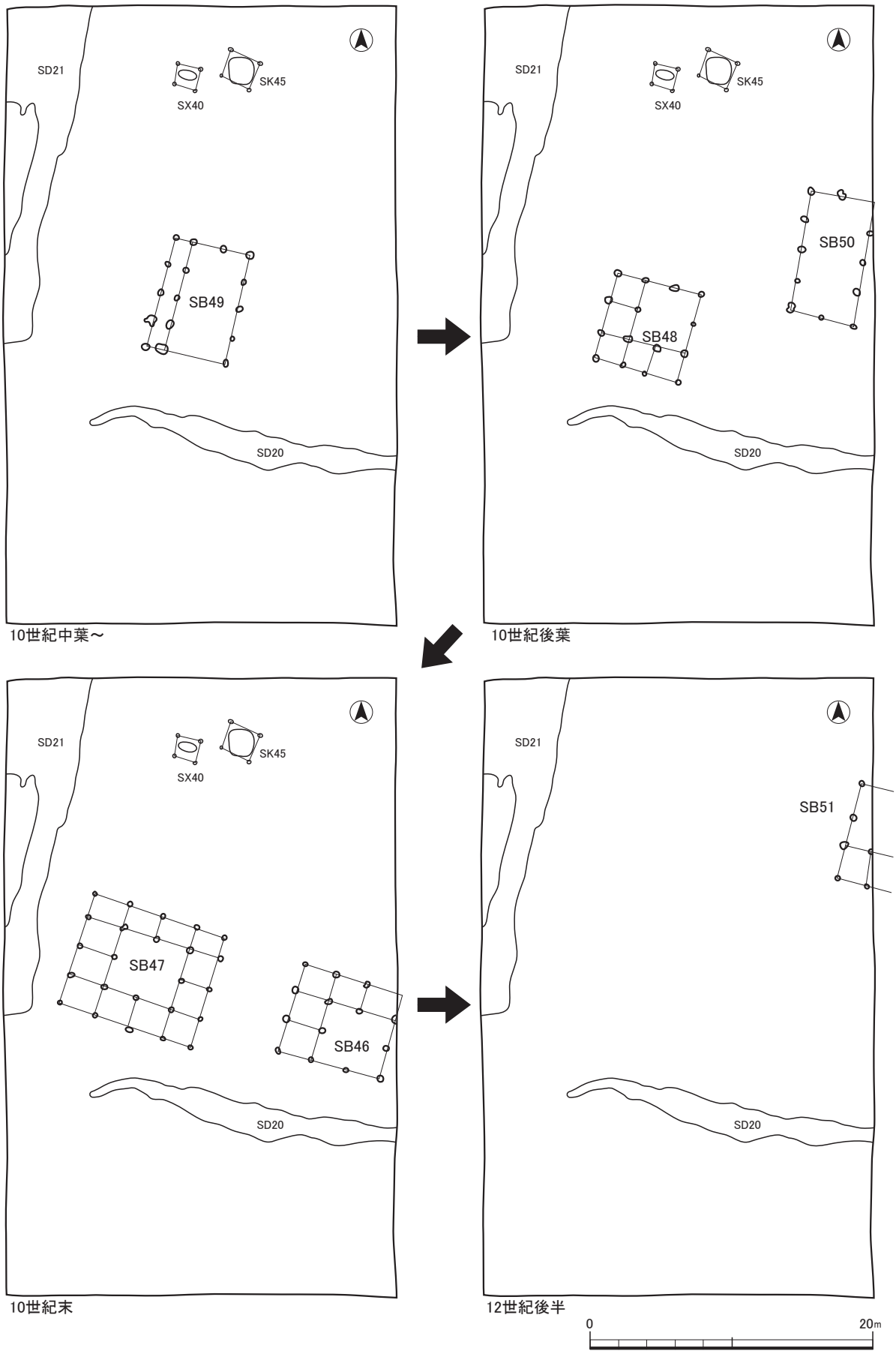
10世紀末の掘立柱建物ＳＢ46と47は、共に桁行の方向を揃えている。建物間は20尺である。区画溝ＳＤ20との南北間は、それぞれ15尺と12尺である。区画溝ＳＤ21と東西間は、それぞれ70尺と16尺である。

掘立柱建物・区画溝の方位　掘立柱建物ＳＢ46が、Ｎ18°Ｅ、掘立柱建物ＳＢ47が、Ｎ18°Ｅ、掘立柱建物ＳＢ48が、Ｎ14°Ｅ、掘立柱建物ＳＢ49が、Ｎ15°Ｅ、掘立柱建物ＳＢ50が、Ｎ11°Ｅ、掘立柱建物ＳＢ51が、Ｎ15°Ｅを示している。また区画溝ＳＤ20はＥ12～14°Ｎ、区画溝ＳＤ21はＮ15°Ｅを示す。掘立柱建物や区画溝はＮ11～18°Ｅの範囲内に収まっている。

つまり、掘立柱建物や区画溝は、一定の方向（条里方向）に揃えられたとみられる。

多気・飯野郡条里との関係　本遺跡は多気郡に位置しているが、錯綜する地域である。そして、この地域の多気郡の条里方向は、隣接する飯野郡と同じくＮ15°Ｅである。掘立柱建物ＳＢ46から51は、Ｎ11～18°Ｅの振れであり、全ての掘立柱建物が方向を合わせている。区画溝ＳＤ21も条里方向のＮ15°Ｅを示し、同一基軸で掘削されており、条里溝である一方、屋敷地の区画溝の役割を果たしたと考えられる。

また、区画溝ＳＤ20は、区画溝ＳＤ21に対して垂直に区画するように掘削されている。屋敷地と外側



第31図　掘立柱建物変遷図（1：400）

を南北に分断するように掘削されたと考えられ、水田地域と集落を区画するものであろう。従って本遺跡は、条里が完成した後か条里により区画されることを前提に集落が形成されたと考えられ、多気郡の中の条里集落とみられる。

なお多気郡には櫛田郷が存在しており、櫛田郷の中心集落であった可能性もあろう。

そして、10世紀中葉から集落を形成することを考えるとこの時期から条里の施工が始まったと考えることもできるのではなかろうか。

四面庇付建物について　掘立柱建物ＳＢ47は、身舎が２間×２間で四面に庇を持つ建物である。また、調査区内の掘立柱建物群の中で一番格式の高いものである。

ここでこの建物の性格を考えておきたい。三重県内において四面庇付建物は斎宮跡を除けば、５世紀代の伊賀市城之越遺跡や７世紀代以降の四日市市菟上遺跡、伊勢国府跡、伊勢国分寺跡、鈴鹿市平田遺跡、同市郡山遺跡群、伊賀国府跡、松阪市打田遺跡、平安時代末葉の菰野町六谷遺跡など確認例は限られている。これらの四面庇付建物は大型で国衙を中心としたものが主である。ＳＢ47は、身舎の規模が小さく、庇部分を加えた面積でも約78㎡である。調査区内では正殿として考えることができるが遺跡全体では、異なる可能性もあろう。

たとえば斎宮跡の第152次調査において３時期にわたる３間×２間の四面庇付建物が確認され、遺物には、鉄製品をはじめ金属滓、製塩土器が出土しており正殿といった儀礼の性格の空間であろうと検討されている。

本遺跡では斎宮跡や他の遺跡と異なり、規模の小さいものである。しかし、遺物的にみて斎宮跡第152次調査に似かよる。正殿の性格を持つと考えられるが断定はできない。また、朝見遺跡の青銅鏡出土箇所（第２図参照）から非常に近いため、祭祀に関わる建物である可能性も存在する。

第32図　遺跡周辺小字図

字名から　本遺跡の遺跡名は、大蓮寺遺跡である。大蓮寺は、字名から付けたものである。調査区自体の字名は「塔ノ本」であり、寺院関連の字名の可能性が考えられていた。寺院関連の字名は、「大蓮寺」をはじめ周辺域一帯から「塔ノ本」「雨寺」「閑浄寺」「堂ノ後」「三日坊」「庵ノ前」などを拾うことができる。奈良時代後期において当地域に大雷寺廃寺が存在したことが知られ、これらが関係していたと想定できる。

また、調査地西側には南北方向に「一ノ堰」「二ノ堰」「三ノ堰」が連続して並んでいることがわかる。櫛田川から取水するような井関が上流に存在し、用水の流れをコントロールする井関が存在していたと考えられる。そのため、このような字名が付いたとみられる。調査地のすぐ近傍であることや出土遺物の豊富さなどのことを考慮すると大蓮寺遺跡の掘立柱建物群は、用水路の管理を行うような集落であった可能性も考えられよう。

さらに調査地から東南東の櫛田川川岸に「東浦」「北浦」「西浦」の字名が存在する。可能性の問題ではあるがこの付近に港関連の遺跡の存在が考えられるのではなかろうか。

そして、字名「槻本（つきもと）」が調査地から東方に存在する。延喜式内社に櫛田郷周辺には「櫛田神社」「櫛田槻本神社」が記されている。槻本の字名は、その名残であろうことが想定できよう。

2　出土遺物から

遺物の内訳は、緑釉陶器をはじめとして灰釉陶器・土師器椀・杯・皿・鉢・甕・竈・墨書土器（土師器杯片？）・ロクロ土師器椀・皿・志摩式製塩土器・鉄製品（刀子・釘）・筒形青銅製品・鞴羽口・鉄滓・銅滓・馬歯が出土している。

緑釉陶器③　重要なポイントは、陰刻花文緑釉陶器椀や緑釉陶器取手付瓶などが出土していることである。県内において斎宮跡を除けば出土点数が多いのは、津市六大Ｂ遺跡、津市位田遺跡、松阪市朝見遺跡、伊賀市伊賀国府跡がある。本遺跡では、出土点数が少ないものの上記した遺物が出土している。とりわけ陰刻花文緑釉陶器椀は、斎宮跡、六大Ｂ遺跡、朝見遺跡といった限られた遺跡である。そして本遺跡もその限られた遺跡のうちの１遺跡である。つまり、緑釉陶器からみて本遺跡は、限定的な集落であることを指し示している。

また、産地別にみてみると猿投産、近江産、近江か美濃産に分類することができる。時期別にみると９世紀後葉から10世紀、10世紀前葉から中葉、10世紀後葉に分けられる。緑釉陶器の産地及び時期は、隣接する朝見遺跡出土緑釉陶器の資料に似通っていることが判明している。おそらく、朝見遺跡と一連の遺跡であると考えられる。そして、集落の形成は10世紀中葉だが優品は伝世することを示しているか９世紀後半に何らかの施設があった可能性も示している。

灰釉陶器④　区画溝ＳＤ20及び掘立柱建物ＳＢ46～49の出土したものついてみてみると、おおよそ４時期に区分できる。黒笹90号窯式、黒笹90号窯式から折戸53号窯式、折戸53号窯式、東山72号窯式新である。実年代では、９世紀後葉から10世紀末葉に位置する。灰釉陶器の出土点数もこの時期を中心に従って多い。遺跡の中心時期はこのころと考えてよいのではなかろうか。

また、今後の課題であるが黒笹90号窯式から折戸53号窯式の間に１型式存在するとみられる。

墨書土器　全部で６点出土している。破片のため不明な部分も多いが土師器杯の底面に書かれたとみられる。また、文字は、部分的な残存であるため判読するのは難しい。

しかしながら、墨書土器が出土していることから識字層を含む人々の集落であったことは言えよう。

志摩式製塩土器　破片であるが個体数25点出土した。製塩土器と考えられていたものであるが、実際は塩の保存容器と考えられる。なぜなら、土器の底部に着目しておきたい。底部の厚みは、薄さ２～４㎜程度のものであり、底部外面の円盤部に砂粒、モミガラを付着させているものが認められる。仮定であるが底部にモミガラを付着したままで固形塩を製作した場合、モミガラの燃えた痕跡が残るのではなかろうか。また土器自体が被熱痕跡を留めるものが多いのではなかろうか。しかしながらそのような痕跡を残した出土例はない。従って固形塩製作にさえ使用されたものでないことは、自明であろう。よって、

志摩式製塩土器と呼ぶより志摩式土器として呼ぶほうが妥当ではなかろうか。

さてここで、大まかに３分類しておきたい。土器自体底部の接地面の調整から１類を底部に砂粒を付着させた粘土板、２類を底部にモミガラを付着させた粘土板、３類をただの粘土板としておく、１～３類は、現状で時期差というよりも土器自体の産地を示している可能性が考えられ、今後の課題としたい。

鉄製品・筒形青銅製品・鞴羽口・鉄滓・銅滓　遺構で工房跡を確認できなかったが、鍛冶が行われていたことは間違いない。そして、鉄製品・鉄滓だけでなく自然科学分析から銅滓や筒形青銅製品も出土していることから青銅製品も製作されていたと考えられる。さらに2014年の朝見遺跡の第５次発掘調査から青銅鏡が出土しており、本遺跡で生産された可能性も存在する。つまり本遺跡は、一側面であるが工房的な要素を持っていることは間違いなかろう。

また、自然科学分析から鉄滓の原材料についてチタンが含まれていることが判明した。チタンは、砂鉄を原料とする場合に含まれている。これまで三重県内の古代の原材料は、磁鉄鉱が全てであり、10世紀後半までに原材料の転換を示した初出のこととみられる。

ロクロ土師器　今回の調査で出土したロクロ土師器には、椀・皿が出土している。ロクロ土師器は、回転台土師器をはじめ土師質土師器など様様な名称でよばれているものである。これらは、先学の研究から言われているように土師器・陶器両方の性質を持つものである。そして、成立は９世紀後半とみられ、終焉は12世紀中葉とされている。

ロクロ土師器は、陶器の中でも「灰釉陶器」を模倣したものと考えられる。伊勢地域において灰釉陶器の土器製作に携わる工人が土師器によるものを製作したと考えられる。

馬歯　区画溝ＳＤ21から出土している。歯そのものは１頭分に満たないものであるが出土したことに意味があろう。そして近傍に所在する朝見・堀町遺跡で牛馬の骨や歯が出土しており、家畜ないし食用として飼育されていたことは間違いない。多気郡・飯野郡では、畜力を労働力等として利用している先進的な地域であったことが想定される。あるいは食用としての場合は、古代に肉食文化があったことを示している可能性もあろう。

さらにもう一方では、馬の骨などを利用した祭祀が考えられる。それは当遺跡の西方に用水路の井関の可能性を示唆したことと関連する。牛馬が日本に渡来して以降、牛馬を殺して雨を乞う儀式が存在し、神に牛馬の生贄を献じていた可能性もあろう。

居住者像について　調査面積は、約1100㎡と少ないが東西方向に広がる遺跡の西側部分にあたる。推定の域であるが東側にも掘立柱建物群が広がるとみると一般農民層の集落と考えることは、面積的に無理があろう。それにプラスして出土遺物の多彩さからも、一般集落とは、異なる集落である。つまり集落を形成した人々は、整然とした区画溝を伴う掘立柱建物群・陰刻花文緑釉陶器椀などを確認できたことから地域の有力者や富裕層をはじめとして斎宮に関わり合いの深い官人層、飯野・多気郡の条里の開発者層が考えられよう。

３　小結

ここまでに主だった地理・遺構・遺物について考察を行った。その結果、単純な集落遺跡と考えられない。以下に箇条書きで記す。１、条里集落であること。２、四面庇付掘立柱建物のような格式のある建物を備えていること。３、用水路の管理的な要素をもつ可能性があること。４、工房的な側面を持っていること。５、識字層の階層の集落であること。６、家畜（馬）を労働力として動員できること。７、殺牛殺馬の祭祀を行う可能性のある場であること。８、出土品は多彩であること。これらの複合的な要素を持つ拠点的な遺跡であることが言えよう。

そして、本遺跡近域の小字名の中で港の存在する可能性を述べている。つまり櫛田川・祓川流域内において港が複数存在したことを示しているのではなかろうか。たとえば斎宮の「津」「市」すなわち斎宮に物資を供給するような港や市場が存在しているのではなかろうか。それは、「斎宮津」「斎宮市」と呼べるようなものが存在し、そこから周辺域に遺物が拡散しているために当遺跡や近傍遺跡が斎宮跡出土遺物に近似値的な遺物の様相を示しているのではなかろうか。

なお、本遺跡は、調査地東方の櫛田神社付近の奈良時代後期の大雷寺廃寺と関連づけられる遺跡であるが平安時代の集落跡の様相を示しており、寺院跡と時期が異なるだけでなく、性格の違う遺跡であることが判明した。さらに、調査区内の柱穴には、瓦を再利用して礎板にしており、大雷寺廃寺の廃絶後に大雷寺廃寺が縮小ないし分散された後に形成された集落跡と考えられる。

最後に今後の周辺域の調査によってさらにこの遺跡を含め、歴史の解明に繋がることを期待したい。

［参考文献］

亀山市教育委員会・三重県埋蔵文化財センター「糀谷垣内遺跡発掘調査報告」（1994年）

三重県埋蔵文化財センター「国分東遺跡（第１・３次）発掘調査報告」（2005年）

三重県埋蔵文化財センター「位田遺跡発掘調査報告」（1999年）

三重県埋蔵文化財センター「堀町遺跡発掘調査報告」（2000年）

三重県埋蔵文化財センター「朝見遺跡（第１・２次）発掘調査報告」（2014年）

三重県埋蔵文化財センター「六大Ｂ遺跡（Ｂ～Ｉ地区）発掘調査報告」（2006年）

斎宮歴史博物館「史跡斎宮跡　平成19年度発掘調査概報」（2009年）

三重県埋蔵文化財センター「堀町遺跡（第５次）現地説明会資料」（2012年）

三重県埋蔵文化財センター「堀町遺跡（第６次）現地説明会資料」（2013年）

三重県埋蔵文化財センター「伊賀国府（第４次）発掘調査報告」（1992年）

三重県埋蔵文化財センター「朝見遺跡（第５次）現地説明会資料№１」（2014年）

三重県埋蔵文化財センター「朝見遺跡（第５次）現地説明会資料その２」（2014年）

松阪市「松阪市史」（1978年）

三重県埋蔵文化財センター「菟上遺跡発掘調査報告」（2005年）

三重県埋蔵文化財センター「松阪市岡本町　打田遺跡」『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』（1992年）

三重県教育委員会「打田遺跡」『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』（1992年）

鈴鹿市教育委員会「伊勢国府跡２」（2000年）

鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館「伊勢国府跡３」（2001年）

鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館「伊勢国府跡４」（2002年）

鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡　第３次発掘調査概要報告」（1991年）

鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡７」（2009年）

鈴鹿市考古博物館「平田遺跡（２次～５次）」『鈴鹿市考古博物館年報第７号　平成16年度版』（2006年）

鈴鹿市考古博物館「平田遺跡（18次）」『鈴鹿市考古博物館年報第10号　平成19年度版』（2008年）

鈴鹿市遺跡調査会「鈴鹿市郡山町末野Ｂ遺跡調査概報」（1978年）

上野市教育委員会「城之越遺跡（第２次）発掘調査報告」（1998年）

三重県埋蔵文化財センター「城之越遺跡」（1992年）

上野市教育委員会・上野市遺跡調査会「追越遺跡発掘調査報告」（1996年）

奈良文化財研究所編「四面廂建物を考える　報告編」（奈良文化財研究所報告第９冊　2012年）

原田信男「神と肉」（平凡社　2014年）

桃崎祐輔「古墳に伴う牛馬供犠の検討」（古文化談叢　第31集　1993年）

平林章仁「神々と肉食の古代史」（吉川弘文館　2007年）

斎宮歴史博物館「斎宮跡発掘調査報告Ⅱ」（2014年）

［註］

①掘立柱建物の時期については、柱穴の遺物をはじめ、埋土や建物配置を考慮して決めた。

②尺の単位については、30.3㎝で計算している。

③緑釉陶器については、尾野善裕氏に指導を受けた。

④灰釉陶器については、藤澤良祐氏に指導を受けた。

写　真　図　版

写真７　調査地遠景（右下よりが大蓮寺遺跡）　三重県農林水産部提供

調査前風景（南から）

調査前風景（北から）

写真図版２

完掘状況（南から）

完掘状況（北から）

掘立柱建物ＳＢ46完掘状況（南から）

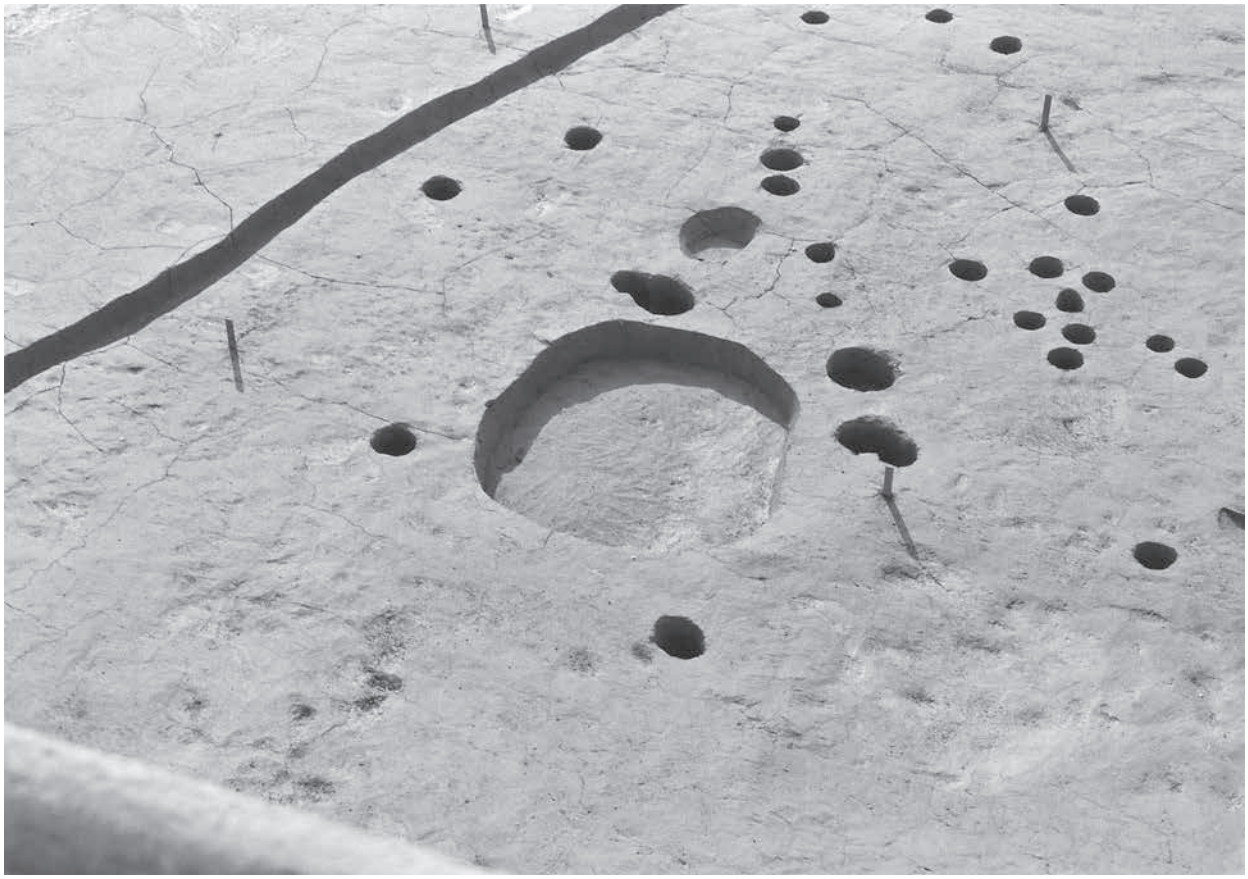
掘立柱建物ＳＢ47・48・49完掘状況（南から）

写真図版４

掘立柱建物ＳＢ50完掘状況（東から）

掘立柱建物ＳＢ51完掘状況（東から）

火葬墓ＳＸ40完掘状況（東から）



土坑ＳＫ45完掘状況（北から）

写真図版６

区画溝ＳＤ20遺物出土状況（東から）

区画溝ＳＤ20遺物出土状況（西から）

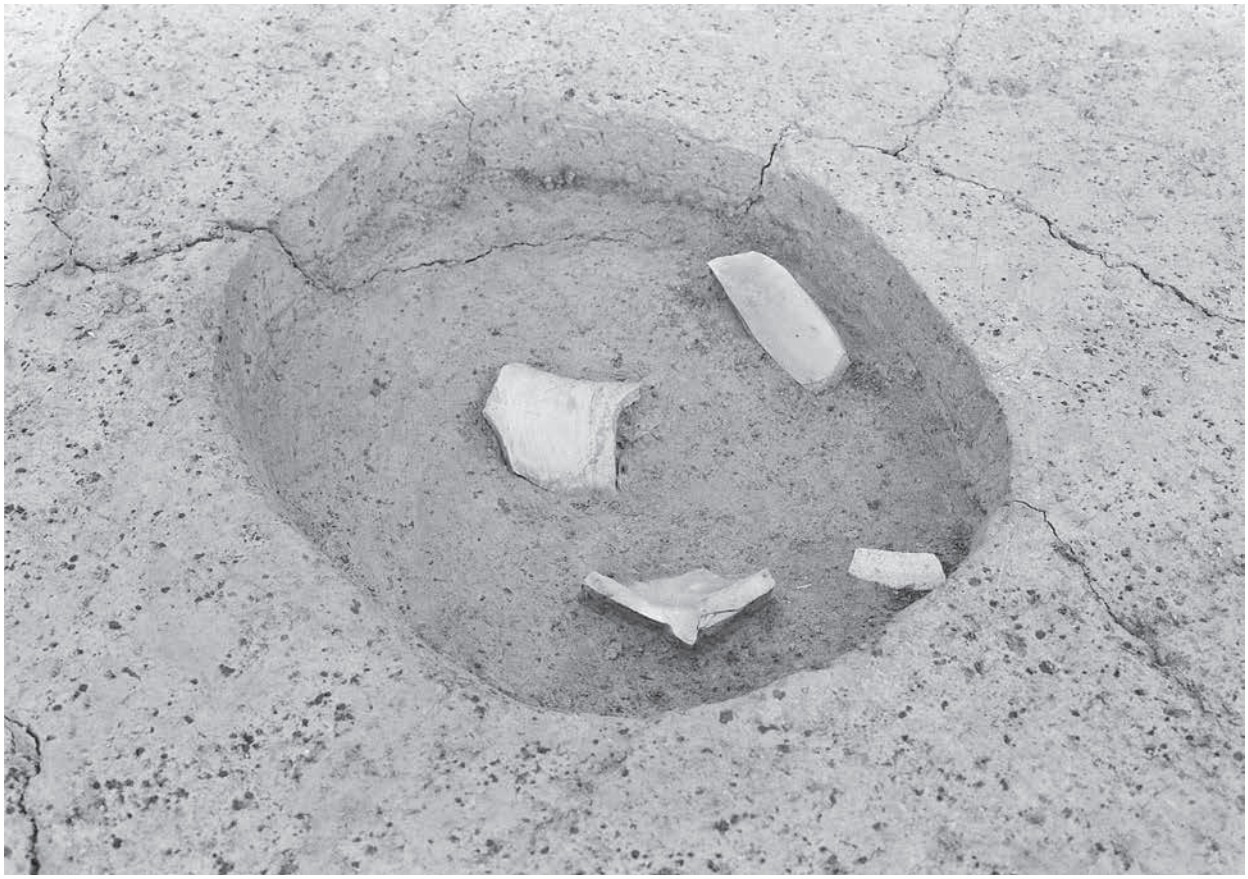
区画溝ＳＤ20遺物出土状況（北から）

区画溝ＳＤ20遺物出土状況（北から）

写真図版８

区画溝ＳＤ20遺物出土状況（南から）

区画溝ＳＤ20遺物出土状況（東から）



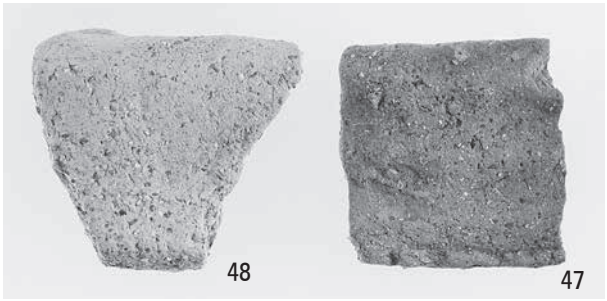
ＳＢ46（Ｆ７Ｐ３）遺物出土状況（東から）

ＳＢ48（Ｄ８Ｐ４）遺物出土状況（南から）

写真図版10

ＳＢ49（Ｄ７Ｐ12）遺物出土状況（北から）

作業風景（東から）


48
47

68

93

106

107

109

57

94

98
97

112

120

122

写真図版12

123

124

131

147

133

155

154

159

160

161

165

176

194

196

168

180

195

205

写真図版14

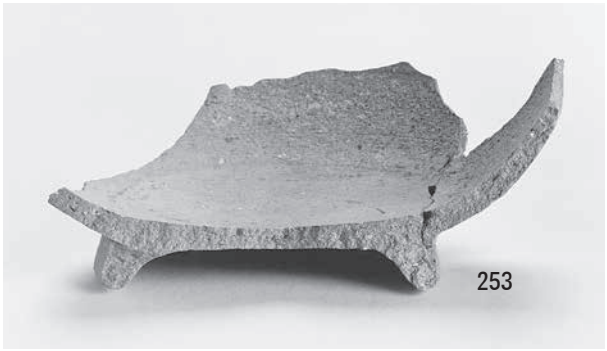
207

221

226

248

250


253

269

281

293

278

287

300

304

322

306

327

340

341

写真図版16

388

400

436

414

416

208

209

435

報 告 書 抄 録

ふりがな	だいれんじいせき（だいにじ）はっくつちょうさほうこく
書 名	大蓮寺遺跡（第２次）発掘調査報告
副 書 名	松阪市櫛田町所在
巻 次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	362
編 著 者 名	萩原義彦
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　　℡0596－52－1732
発行年月日	西暦2015年３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
だいれんじいせき 大蓮寺遺跡 （第２次）	みえけんまつさかし くしだちょうとうのもと 三重県松阪市 櫛田町塔ノ本	24204	a823	34° 33′ 67″	136° 34′ 44″	20120914 ～ 20121226	1161㎡	平成24年度一般県道松阪環状線地方特定道路整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大蓮寺遺跡 （第２次）	集落跡	平安時代	掘立柱建物・土坑・区画溝・火葬墓	緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・軒瓦	

要旨	大蓮寺遺跡では、平安時代の掘立柱建物・土坑・区画溝・火葬墓が確認された。こうした発掘調査の成果から当遺跡は、平安時代の条里集落と考えられる。また、遺物では陰刻花文緑釉陶器をはじめとし灰釉陶器・土師器が出土しており地域の有力者や斎宮の官人層の集落の可能性が高いと考えられる遺跡である。遺物の出土量は、コンテナバット57箱(122.25kg)である。

三重県埋蔵文化財調査報告 362

大蓮寺遺跡（第２次）発掘調査報告
～松阪市櫛田町所在～

2015（平成27）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社